

43005

教科書文庫

4
220.
52-1943
20000 71224

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

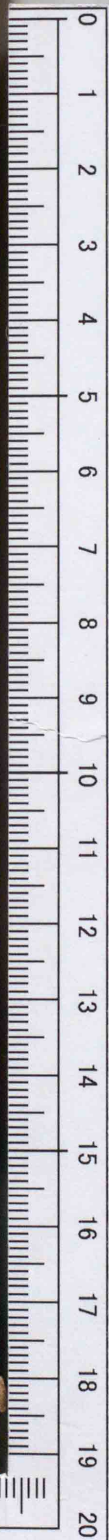
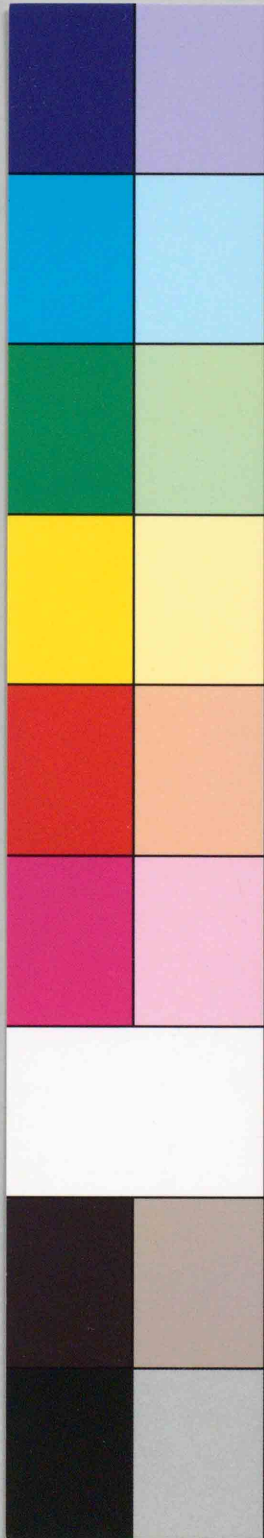
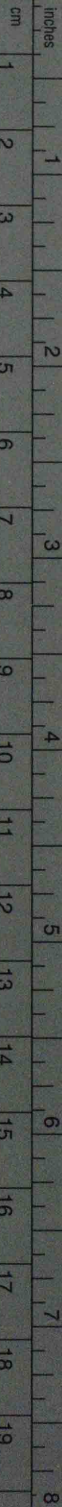


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



文學博士 時野谷常三郎著

新編女子西洋史

(高等女學校用)





資料室

教科書文庫
4
220
52-1943
2000071224

日廿月八年八十和昭  
 濟定檢省部文  
 用科史歷校學女等高

4b  
 230  
 HR18

# 新編女子西洋史

(用校學女等高)

広島大学図書

2000071224



士博學文

著郎三常谷野時





緒言

一、本書は昭和十二年三月文部省の公布にかかる高等女學校教授要目に準據し、高等女學校の西洋史教科書として用ひ得るやう注意して編纂した。

二、本文の記事は極めて正確平易に、西洋諸國家成立の由來・國體・國民性等を比較考究して、その我が國と異なる所以を明らかにし、日本國民の自覺を向上せしめるやう、格段の注意を拂つた。

三、西洋史の各時代に互つて一貫せる概念を與へるに努め、特に現代文化の趨勢と世界の大勢とを明らかにし、世界に於ける我が國の地位を自覺せしめるやう考慮を拂つた。

四、古今の史實の關聯するところを明かにし、史實の精神を捉へて綜合的・具體的に教授するやう特別な注意を用ひた。

五、各國各時代の女性が國家・社會・家庭に貢獻したる顯著な史實を授け、以



て女性の自覺を促し、日本婦人として取るべき態度をも啓發しようとした。

六、女性に關する記載事項を比較的多からしめ、その上、文藝宗教風俗等に關する事項も成るべく多く説述して、情操陶冶の資料となすやう一段の注意を拂つた。

七、挿繪は努めて典據正しきもの特に著者の歐米に於て蒐集せるものを掲げ、なほ婦徳修養に緊切なものを掲げるやう注意した。

八、努めて偉人傑士忠良賢哲の事績嘉言等を引用し、生徒をして感奮せしめ、よつて人格と國民性の培養に力を致さしめるやう注意した。

九、欄外隨處、簡單な設問を掲げ、生徒の學習に便ならしめるやう考慮した。  
十、著者は如上の方針に基づいて極めて慎重に編述したが、なほその足らざるもの多きを惧れる。切に大方の示教を得て將來の完璧を期するものである。

昭和十二年四月

著者識

# 新編女子西洋史

## 目次

### 西洋史の意義

#### 第一編 上古史

第一章 上代東方諸國……………三

第二章 ギリシヤの盛衰とその文明……………七

第三章 ローマの興亡とその文明……………三

〔上代史總説と大事年表〕……………編末

#### 第二編 中世史

第一章 ゲルマニヤ民族の大移動とその建國……………三

第二章 中世ヨーロッパ(一) マホメト教とサラセン帝國……………四

第三章 中世ヨーロッパ(二) キリスト教會とフランク王國……………六

第四章 中世ヨーロッパ(三) 神聖ローマ帝國とローマ法王……………九



第五章 中世ヨーロッパ(四) 十字軍とその影響……………三三

第六章 中世ヨーロッパ(五) 西歐諸國の形勢……………三五

〔中世史總説と大事年表〕……………編末

第三編 近世史

第一章 新機運の世界(一) 文藝復興と地理上の發見……………四〇

第二章 新機運の世界(二) 宗教改革とその影響(上)……………四四

第三章 新機運の世界(三) 宗教改革とその影響(下)……………四六

第四章 近代歐洲諸國家の發展(一) 英佛……………四八

第五章 近代歐洲諸國家の發展(二) 露普……………五〇

第六章 英佛兩國の植民地經營 アメリカ合衆國獨立……………五五

第七章 近世の文明……………五七

〔近世史總説と大事年表〕……………編末

第四編 最近世史

第一章 フランス大革命……………五七

第二章 ナポレオン一世……………六二

第三章 自由主義及び國民主義……………六二

第一節 自由主義國民主義と南米諸國ギリシャの獨立……………六二

第二節 自由主義とフランス及びイギリスの隆盛……………六四

第三節 自由主義とアメリカ合衆國の隆運……………六九

第四節 國民主義自由主義とイタリヤ王國の建設……………七一

第五節 國民主義とドイツ帝國の發展……………七三

第六節 國民主義とロシア帝國の進展……………七五

第四章 最近世の文明……………七九

〔最近世史總説と大事年表〕……………編末

第五編 現代史

第一章 列強の世界政策……………八五

第二章 世界大戰(一)……………八八

第三章 世界大戰(二)……………九一

第四章 世界大戰(三)……………九三



第五章 大戦後の列國の形勢……………三六

第六章 現代の趨勢……………三三

第七章 西洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟……………二四

〔現代史總説と大事年表〕……………編末

彩色附地圖……………卷末

一、第十七世紀のヨーロッパ要圖ウエストフリア條約後の形勢……………卷末

二、一八一五年後のヨーロッパ要圖……………卷末

三、世界大戦後ヨーロッパ要圖……………卷末

目次終

# 新編女子西洋史

## 西洋史の意義

西洋史は主として白人種White Raceの建設せる諸國家の事蹟換言せば各時代に互つての歐洲及びその附近、並に南北アメリカに起れる諸國家の政治の沿革、社會の發達、文化の進歩、その他諸國家相互の關係等に就いて研究の歩を進めるものである。

上代東方諸國に白人種たるハム民族並にセム民族Hamites Semitesの文明が發生し、それが歐洲に移植せられるに及んでアーリヤ民族Arjansの盛大な文明を生み、南北アメリカにも同じアーリヤ系の文明が發展した。そしてこのアーリヤ民族に依つてイギリス、フランス、ドイツ、イタリア、ロシア、アメリカ合衆國等現代最も有力なる國々が形成せられるに至



つたのである。

中世、東洋黄色人種の勢力頻りと歐洲を脅かし、その一種なる蒙古族は南ロシアに留まつて一箇の王國を建設し、同じ黄色人種のオスマン・トルコは遠く西に移つて東ローマを侵し、遂にバルカン半島を攻略して、歐亞に跨る大帝國をうち建て、東洋史と西洋史の關聯の淺からざるを示してゐる。やがて十五世紀の交、インド航路發見せられてより、十六世紀を通じ、ポルトガル人、イギリス人並にオランダ人等相踵いで東方に至り、インド洋上に、支那海上に、西力東漸の氣運が著しく昂上し、十八・九世紀を通じてはイギリス・ロシア・フランス等何れも侵略の成果を東方に於て獲得し、これらの點に於て西洋史と東洋史の相關聯するところ深きを明示してゐる。最後に十六世紀の交より通商・布教を中心に、西洋と日本との交渉盛んに、ここに國史と西洋史の相關聯するところ多きを見る。

最近世の交通の進歩は世界を擧げて一體とし、日本は東洋文化の中心として西洋諸國と對峙するに至つた。世界一體の今日、日本は國民的自覺の上に立つ國際主義の態度を以て、世界文化を指導せねばならぬ。既に吾人は國史の精粹を學び、國民的自覺を得、東洋史を學び、東洋に於ける日本の地位を見た。此に西洋史を學んで、諸邦の興亡變遷の間から、人文發展の真相を究め、世界を動かす日本文化の中樞を造らねばならぬ。換言せば、日本精神・日本正義を世界精神・世界正義にまで高める事に依つて、正しく世界を指導せねばならぬ。

### 第一編 上代史

#### 第一章 上代東方諸國

●西洋文明の源流 西洋の文明はナイル河下流に起れるエジプトの文明とチグリス・エウフラテス兩河の流域に生じたメソポタミ

世界最古の文明  
河川と文明との  
關係を考へ見よ



\*(前年千五約りよ今 (頃るすとんらま始の明文族漢) 前年千五約りよ今 \*  
るあて倫祭の漢東はのたつ造を紙てめ始で那支\*\*

【圖】ナイル河畔のギゼー (Gizeh) の光景  
圖の正面に見ゆる大ピラミッドは、いはゆるクフ (Khufu) 王の王陵で、高さ百三十八米、その前なる人面獅身像は高さ二十米、自然の花崗岩に刻まれてゐる

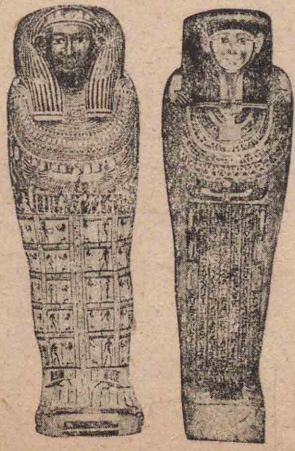


ヤの文明にその源を有する。そしてこれらの文明が西方に傳はつて、後世に於ける西洋文明に發達したのである。

● エジプト エジプトは氣候熱く、またナイル河の年々氾濫せることにより、農業早く發達し、紀元前三千年頃、既に統一王國をなし、文明次第に發展した。この國で王は太陽の子として敬はれ、この國の宗教は多神教であり、太陽を最高神とし、また靈魂不滅を信じ、屍體をミイラとし、永く保存した。學術で天文、數學に長じ、太陽曆、象形文字の發明あり、工藝でガラス、<sup>\*\*</sup>パピルス紙の製造盛んに、またピラミッド、<sup>\*\*</sup>オベリスクス、<sup>\*\*</sup>スフィンクス等壯大なものをも營むに至つた。

【圖】靈魂の不滅にしてもとの肉體に復歸することを信ずるエジプト人は、屍體保存の方法を考へて、ミイラを製し、圖に示さるる如きミイラの容器をも造つた (英國博物館藏)

エジプトの文明

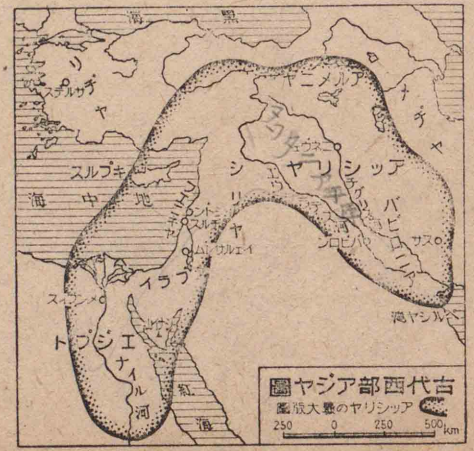


\* 天神武皇帝治世、支那春秋時代

バビロニアの建國とその文明の特色  
【圖】ハムラビ法典  
バビロニア王ハムラビの出した法典を石に刻んで立てたもの。ハムラビ(左)が太陽神(右)より法典を受けるところ。  
(ルーヴル博物館藏)  
(ルーヴル博物館藏)  
アッシリアの國民性



● バビロニアとアッシリア チグリス、エウフラテス兩河の間をメソポタミヤと云ひ、その南方にエジプトと同じ頃、バビロニア <sup>Babylonia</sup> 王國が起つた。農業が進み、天文數學



が發達し、楔形文字の發明も起つた。  
アッシリアはもとバビロニアの植民地でチグリス河上流に起つたが、國民が勇武にして、バビロニア王國を滅ぼし、次第に四方を征して大帝國を造つた。しかし内亂の爲、國力が衰へ、遂に紀元前六〇六年新バビロニアに滅ぼされた。  
<sup>New Babylonian Empire</sup>



ヘブライ人の信仰  
エジプト人の信  
仰と比較せよ

古代理形文  
字の變化

フェニキヤの國民  
性

船下フェニキヤ  
の船船  
船の運轉法に注  
意せよ

四 ヘブライとフェニキヤ

紀元前一三〇〇年頃パレスチナの地に國を建て、多神教徒の間にあつて、ただイエホヴァ神のみを崇むる一神教(ユダヤ教)を奉じ、紀元前十一世紀に王政が起り、その國富強を極めるに至つた。ヘブライの藝術に於ては見るべきもの無かつたが、宗教的文學には出色のものがある。

舊バビロニア楔形文字

舊フェニキヤ文字

舊ヘブライ文字

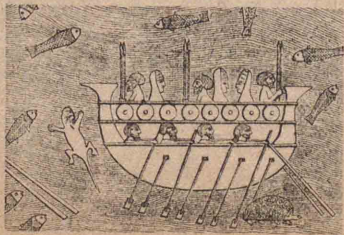
舊ギリシヤ文字

新ギリシヤ文字

舊英字

✱ al  
✱ al~p  
✱ ale~ph  
✱ al~pha  
A A A

フェニキヤは地中海の東岸に起つて、數多の都市の聯合から成り立ち、その人民は通商航海に長じて、地中海沿岸及び島々に植民地を開き、その貿易船は黒海や大西洋にも達した。フェニキヤの工業は頗る進歩し、特に染料の製産は有名であり、その用ひたる。音符文字は今日の西洋文字の基となつた。



ダリウス王の大業  
ペルシヤの國民性

五 ペルシヤ

ペルシヤはアッシリヤの滅亡後に起つたメヂヤの屬邦であつたが、紀元前六世紀の中頃に獨立し、紀元前五二一年ダリウス王の即位するに及び、國力大いに盛んになり、アジア・アフリカ・ヨーロッパ三大陸に跨る大帝國をうち建てた。その人民は概して武を重んじ、文化の見るべきもの少かつたが、政令はよく行はれ、通商の如きも大いに發達した。

第二章 ギリシヤの盛衰とその文明

一 ギリシヤの民族

ギリシヤはバルカン半島の南端に位し、ヨーロッパで最も早く文明の進んだところである。その國土は海岸線の屈曲多く、島々もまた東方海上に連つて居る爲、住民は早くから、通商植民の方面に發展した。しかし國內には山脈が互に相交はり、國人は各地に獨立の都市國家を營み、全體の統一がなかつたが、その祖先

古代ギリシヤの政治的特性  
ギリシヤとイタリアの地勢の相違を考へ、その人文に及ぼせる影響を究めよ



オリンピアの國民祭典

言語・宗教等の同一であつたことは、自ら同一國民であるといふ自覺を與へ、その上全體でオリンピアのゼウス神の爲、四年に一回、大祭並に大競技會を開いたので、益々この傾向を助長するに至つた。

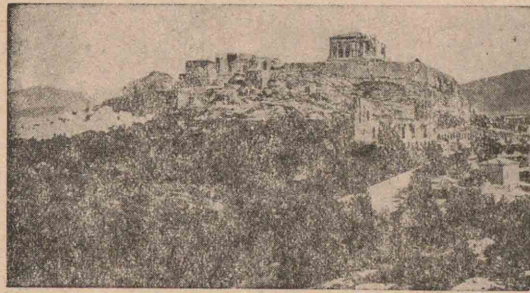
① スパルタとアテネ

スパルタはドーリヤ種族の國で一種の貴族政治を行ひ、自己の勢力を維持する爲、男兒に極端な尙武的教育を施し、質朴勇健の風を養成し、女子も亦、身體を強くし、婦徳を磨くやうに仕向けられ、國勢愈々盛んになつた。

スパルタの教育

アテネの中央丘上にあるパルテノン神殿

アテネの政治組織



アテネはイオニア種族の國で初めは王政であつて、後、貴族政治となつたが、紀元前六世紀の頃ソロン及びクリステネス出でて、平民にも政權を分ち、民主政治が完成した。アテネ婦人 アテネ婦人の貞操柔順も著しきものがあつた。

② ヘルシヤ戦役

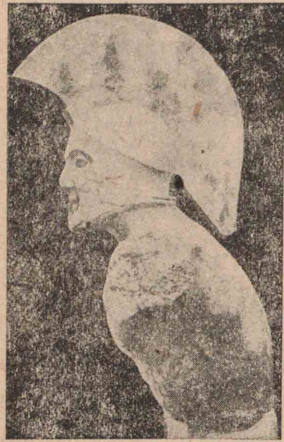
小アジア沿岸なるイオニア

ヘルシヤ戦役の起因

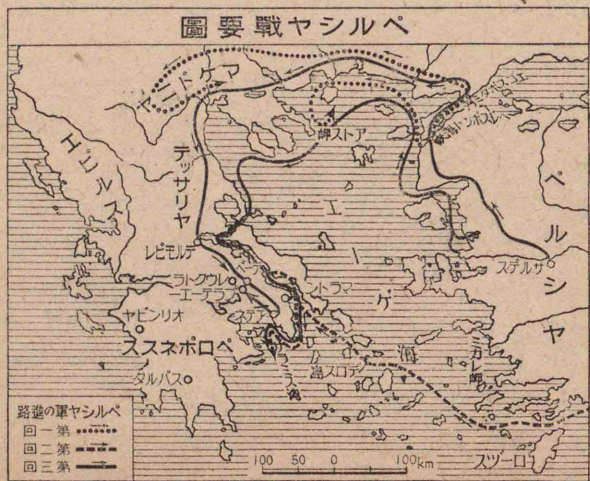
テルモピレの戦 (前五世紀)

スパルタ王レオニダス 前四九一—前四八〇年、スパルタ王であつた

人植民地がアテネの援を得て、ヘルシヤの支配を脱せんと計り、ヘルシヤ王ダリウス一世がこの亂を鎮め、またこれを機として全ギリシヤの併呑を企てたが失敗し、更に第二回の遠征軍を起して敗北した。そこで次の王クセルクセスは父の志を継ぎ、自ら大軍を率ゐてギリシヤに侵入し、スパルタ王レオニダスの兵がこれをテルモピレの險にむかへ、奮戦して皆死んだ。しかしアテネの勇將テミстокレスの率ゐるギリシヤ海軍は



ミストクレスの率ゐるギリシヤ海軍は





サラミスの戦

ペルシヤの艦隊をサラミス灣内に破り、その後、戦はなほ續いたが、ペルシヤは遂に屈して和を講じた。  
(前四八〇年)

ペリクレス時代

**四 ペリクレス時代** ペルシヤ戦役中、成立せるデロス同盟をアテネが盟主となつて指導し、大いに勢を振つた。時にペリクレスといふ大政治家出で、民権を重んじ國威を輝かし、學問藝術も亦大いに進んだ。これが所謂「ペリクレス時代」であつて、ギリシヤ文化の全盛時代である。

艦ペリクレス  
アテネの大政治家。前四九三年に生れ、前四二九年に死す



**五 スパルタの全盛とテーベの覇業** やがてスパルタはアテネの隆盛なるを嫉み、兩國各、その黨を率ゐてペロポネソス戦役を始め、交戦することが二十七年、遂にスパルタはアテネを降してギリシヤの全權を握つた。然るに中部ギリシヤのテーベにエパミノondas、ペロピダスといふ二名士が出で、スパル

ペロポネソス戦役

やがてスパルタはアテネの隆盛なるを嫉み、兩國各、その黨を率ゐてペロポネソス戦役を始め、交戦することが二十七年、遂にスパルタはアテネを降してギリシヤの全權を握つた。然るに中部ギリシヤのテーベにエパミノondas、ペロピダスといふ二名士が出で、スパル

マケドニヤ王フィリップ

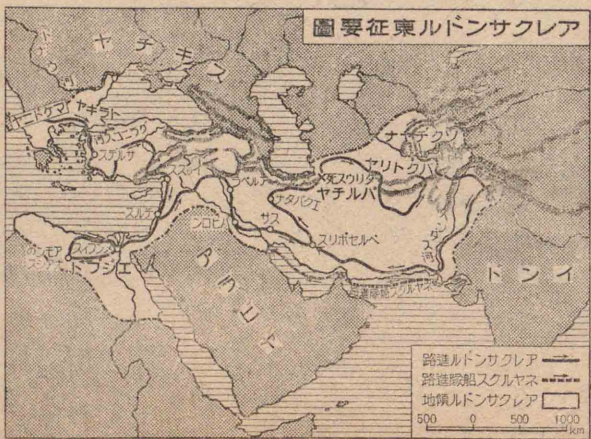
國貨幣に刻まれたアレクサンドル大王肖像  
向つて左は表面、裏面(向つて右)のギリシヤ字は「王リシマコス」なる意を示し、同王の鑄たる貨幣なることがわかる  
(ナポリ博物館藏)

アレクサンドル大王の東征

タに抗して民主政治を興し、遂にこれをレウクトラに破つて一時ギリシヤの覇權を握つたが、幾ばくもなくして衰ふるに至つた。  
**六 アレクサンドル大王の大業** この時ギリシヤの北方マケドニヤに英主フィリップ王が出で、頻りに國力を充實して、ギリシヤの各都市を従へ、遂にその覇權を握るに至つたが、不幸にして臣下に弑せられた。フィリップの子アレクサンドル大王は紀元前三三四年ペルシヤ征討の軍を出し、自らこれを率ゐて小アジアに入り、次いでシリヤ



その覇權を握るに至つたが、不幸にして臣下に弑せられた。フィリップの子アレクサンドル大王は紀元前三三四年ペルシヤ征討の軍を出し、自らこれを率ゐて小アジアに入り、次いでシリヤ

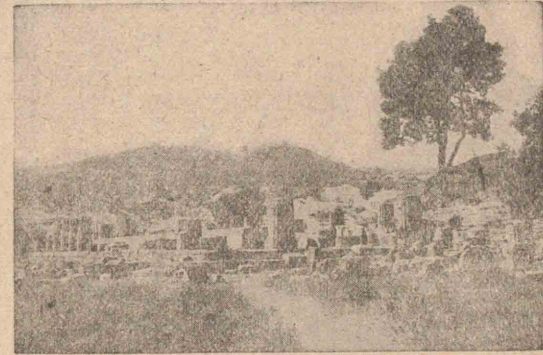




大帝國の分裂とへ  
レニズム

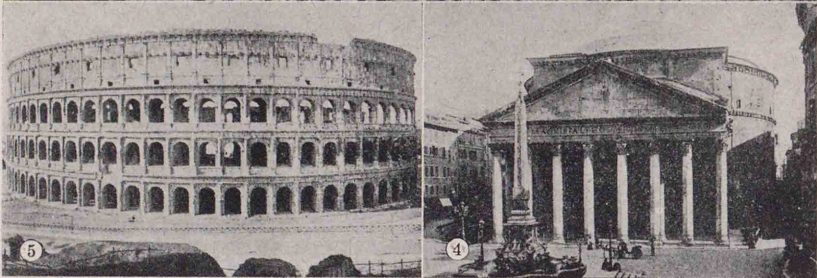
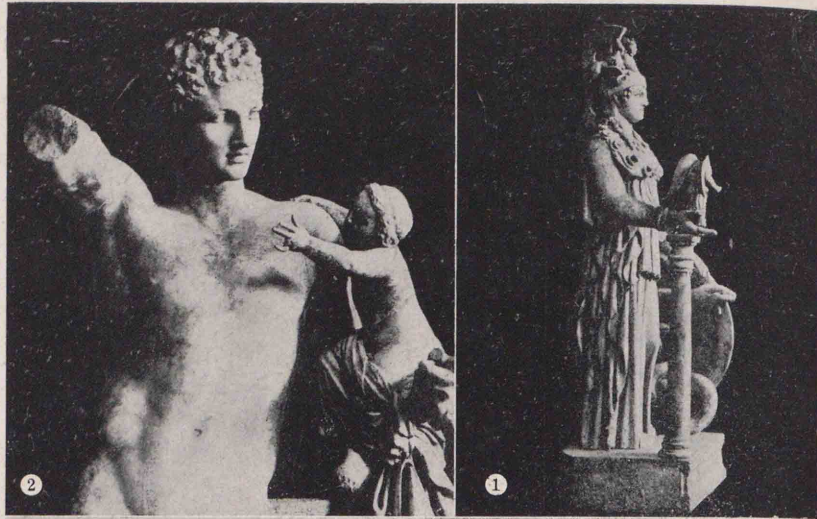
遺跡  
久しく土中に埋  
もれてゐたのを  
近代に至つて發  
掘した  
ギリシヤ文明の特  
質

エジプトを取り、更にペルシヤ全土とインドの西北部を従へ、遂にバ  
ビロンに凱旋してここに都し、東西文化の融合を企てたが、果さずに  
死んだ。<sup>前二二三年</sup>大王の死後、大帝國は分裂し、中にもマケドニア、シリヤ、エジ  
プト三國が強大であつて、共にギリシヤ文明の普及に力を致し、ギリ  
シヤ文化に彩られた東方文明、即ちヘレニズ  
ム文明が成立し、中央アジア、インド等東洋に  
もこの風が行はれた。



⑦ ギリシヤの文明

ギリシヤ人は高尙優  
美なる天分を有したのみならず、美はしい自  
然の影響を受け、また東方文物をも採り入れ、  
ここに獨特の新文明を作つて西洋文明の基  
礎をなすに至つた。オリンピヤの大祭では  
各種の競技に止まらず、また詩辯論等の優勝



① ナテアのスタヂイフの像 (彫刻マールコ作時代)  
② クラベシテスへの像 (彫刻マールコ)  
③ テアセオーン (建築マールコ)  
④ マールコのパテンオン  
⑤ マールコのパルセウム  
ドントス



① **フィヂヤスのアテナ像** (アテネ國民考古博物館蔵)  
 フヂヤス(前四九〇—前四三二年頃)の傑作、アテナ神像の忠實な模作で、ローマ帝ハドリアヌスの時に出来、十九世紀にアテネで発見された。高さ三呎餘の大理石像である。

② **フラクシテレスのヘルメス像** (オリンピア博物館蔵)  
 フラクシテレス(前四〇〇—前三三〇年頃)の傑作、ヘルメスの大理石像であり、もとオリンピアのヘラの神殿に飾られたものである。

③ **テセーオン** (ギリシヤ建築、アテネ在)  
 前四二一年勇者テセウスに捧げられた神殿、ドリク式の大大理石柱は見るからに豪壯な感じがする。

④ **ローマのパンテオン**  
 パンテオンはアウグスツス帝の創建、ハドリアヌス帝の改築。圓形アーチの天井とギリシヤ式大斗のある圓柱は注目し値する。その結構、莊嚴の觀あるは、これを以て四海統御の一方便たらしめようとしたのである。

⑤ **ローマのコッセウム** (圓形競技場)  
 コッセウムはヴスパシヤヌス帝の設計。チツス帝の完成せるもの(紀元八十年)圓形四層無蓋の大建築。壯大無比、帝政時代の盛觀を思はする。

ギリシヤの文學・  
 史學・哲學及び美  
 術

ソクラテス  
 ソクラテスは  
 「明智こそ徳行  
 の基なり。」と説  
 いた

圖 縮向つて右より  
 ドーリヤ式の大  
 斗、イオニヤ式  
 の大斗、コリン  
 ト式の大斗

古代ローマの政體

をも競うたので、大いに文化の發達を助けるに至つた。文學では詩

聖ホームー、悲劇作家のエスキルス、ソフォクレス、史學では「歴史の父」へ

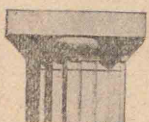
ロドツス出で、哲學ではソクラテス、プラトーン、アリストートルなどの

大家が出で、ギリシヤ哲學を大成するに至つた。ギリシヤ美術は建

築及び彫刻を以て古今に勝れ、莊嚴にして優美なものを多く今日に

止むる。建築ではイクチヌス、彫刻ではフィヂヤス、ブラク

シテレス殊に著れ、有名なパルテノン神殿はギリシヤ藝



第三章 ローマの興亡とその文明

● **ローマの勃興とその政治** ローマはもとイタリア

半島中部に住せるイタリア民族のチベル河畔に建てた  
 都市國家であり、初め王政に依つて治められ、後、共和政を



貴族と平民

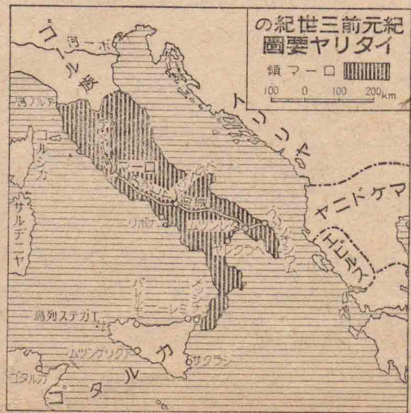
ローマ人の奉公心  
ギリシヤ人とローマ人の性格を比較せよ

行つた。然るに社會上、人民は貴族・平民の兩階級に分れ、兩者の争久しく絶ゆること無かつたが、貴族は次第に讓歩して紀元前四世紀の中頃兩者の差別は殆ど廢せられた。

元來、ローマ人は奉公犠牲、家名尊重の精神に厚く、今や貴族・平民協力して、外敵に當つたので、紀元前三世紀中頃には、殆どイタリア大部を支配することが出來た。

●ポエニ戰役とローマの興隆 この頃

アフリカ北岸に勢を有せるフェニキヤ植民地のカルタゴは、大なる富と、強力な海軍を以てローマに對抗し、兩國共にシシリー島に勢を伸さうとして相衝突し、ここに有名なポエニ戰役が始まつた。この戰にローマはよく戰ひ、カルタゴをしてシシリー島を割き償金を支拂ひ和を講ぜしめた。



第一回ポエニ戰役

第二回ポエニ戰役

\* 孝靈天皇御世、秦始帝時代

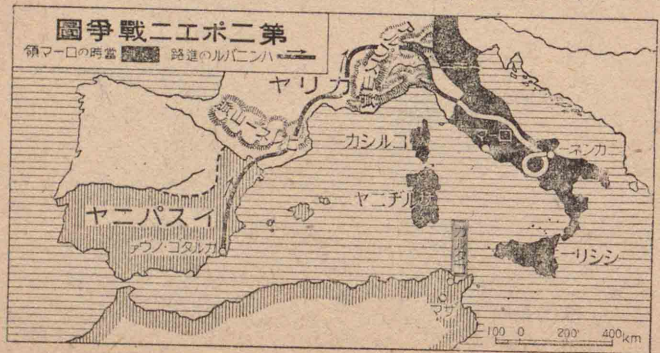
圖 漢ニバル  
前二四七—前一八三年頃  
ハンニバルのアルプス越に向つた時は五萬以上の軍を率ゐてゐたのが、イタリアに着いた時は二萬足らずに減つてゐた

第三回ポエニ戰役  
(カルタゴの滅亡)



やがてカルタゴに勇將ハンニバル出で、紀元前二一八年イスパニヤから軍を出し、イタリアに攻め入つてカンネーに大勝を得た。しかも本國、ザマでローマ軍と戰ひ、大敗を招き、カルタゴ爲に屈してイスパニヤを割き、償金を出して和を講じた。その後ローマはカルタゴの國力の回復せんとするを嫉み、紀元前一四九年強ひて戰を開き、攻め圍むこと三年、遂に全くこれを滅ぼした。なほローマはシリヤ・マケドニヤをも併せ、地中海を中央に三大陸に跨る強大な國家となつた。

●共和政の末路とケーザルの事業





ローマ人の奢侈

ローマの貴族夫妻

ローマで富豪の多くは貴族出であつた。彼等は元老院などの要職につき、多くの土地を各地に有し、且つ多数の奴隷を所有してゐた。  
グラックス兄弟の社會政策

三頭政治

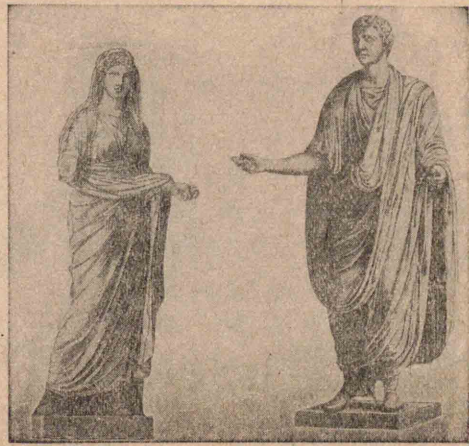
ケイザルここに掲げたケイザルの石像はローマ、カピトリノ博物館所蔵である。  
ケイザルの遠征

の領土の擴がると共に無限の富は國都に流入し、市民の風は漸く奢侈遊惰となり、なほ屬州から輸入せられる廉價の穀物と奴隷使用の流行により農夫の生計が奪はれ、その土地は富民の併せるところとなり、貧富兩階級の對立は益々甚だしくなつた。この間グラックス兄弟(母はコルネリヤ[*Cornelia*]といひ老ス)出で社會の弊害を救はうとしたが成らず、やがて



武將

にして貧民黨を率ゐるケイザル出で、ポンペイウス、クラッスを併せて、三頭政治を組織し、ローマの政權を左右した。既にしてケイ



ケイザルの政治

ケイザルとレゴリスの比較は如何

アウグスツス

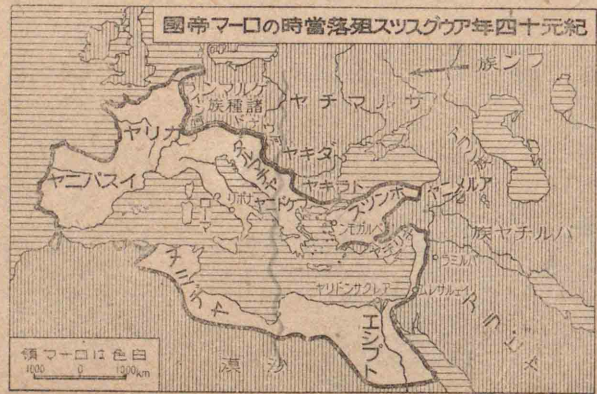
アウグスツスは前二七の統一に始まつて紀元一四年に終つた。その間國境方面に若干の騷擾があつたが、概して平和が打ちつづいた。彼の平和の時に開かれたといふヤヌス(Janus)の宮の扉が帝の時まで僅に二回閉ぢられたが、帝一代で三回も閉ぢられたと言はれてゐる。  
アウグスツス帝の大業

ケイザル出でてガリヤを征し、武を輝かし、文化を布き、名聲大いに揚つたが、ポンペイウス、ケイザルの功を嫉み、密かにこれを除かうと計つた。そこでケイザルは急に兵を率ゐ、ローマに入り、ポンペイウス黨を追ひ、文武の全權を握つて種々政治の改革を行ひ、民權の擴張、産業の保護、曆法の改定、植民の奨励等治績の見るべきもの多かつたが、紀元前四四年反對黨のために殺された。



④ アウグスツス帝の大業 その後

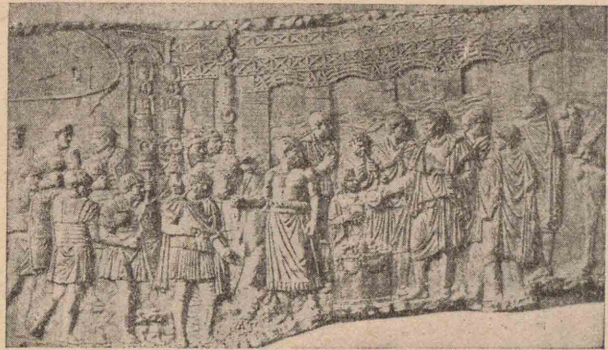
ケイザルの養子、オクタヴィヤヌスはエジプト女王クレオパトラの軍を破つて天下





ローマ帝政時代

【解説】ローマ、トラヤヌス記念柱に刻したダキヤ征伐の光景。ドナウ河、橋頭堡前のトラヤヌス帝と臣下。トラヤヌス帝のダキヤ征伐の肖像。  
【解説】コンスタンチヌス帝の肖像ある貨幣（向つて左、表面、帝の肖像）



を統一し、アウグスツスの尊號を受けて獨裁政治を行ひ、共和政治は名のみとなつた。史家これより後を稱してローマ帝政の時代と呼んでゐる。アウグスツス時代は兵備も充實し、文學美術も起り、交通も完備し、ローマ帝國の黄金時代と稱せられてゐる。  
\* (前二七年—紀元一四年)

【五】帝國の盛衰 アウグスツスの死後百七十

餘年間には帝國の勢力なほ盛んであり、殊にトラヤヌス帝時代に、ドナウ河を渡りダキヤの地を平定した。しかもその後帝國の運命傾き、外、蠻人の侵入があり、内、軍人の跋扈が甚しく、人民は重き租税に苦みて元氣が全く盡き果てた。



コンスタンチヌス大帝の政治

ローマ東西に分る

ローマ文明の特色

ローマの土木

キリスト教以前  
ローマの宗教

その後、コンスタンチヌス大帝出でて、再び帝國を統一し、都をコンスタンチノーブルに遷し、政治を改め、國勢大いに振うた。しかし帝の死後、内外の憂患交、起つて國力衰へ、遂に三九五年帝國を分つて東西ローマとなすに及び、世界統一の理想は永遠に失はれた。

【六】ローマの文明 ローマ人は實用を重んじ、理想を遠ざけ、學問藝術よりも、政治、軍事、法律、土木等に勝れた天分を發揮した。しかもその領土廣大にして、普く諸國の文明を吸収消化し、更にこれを帝國内に普及して歐洲文明の基礎を作つた。中にも土木建築では堅牢壯大なものを營み、宮殿、凱旋門、競技場、浴場さては道路、水道に於て後人を驚かすに足るものが多い。

【七】キリスト教の發達 ローマは初めギリシヤと同じく多神教を信じ、皇帝をも神として祀る風があつた。然るにアウグスツスの治世、ユダヤにイエスキリストが生れ、自ら神の子なる救世主と稱し、ユ

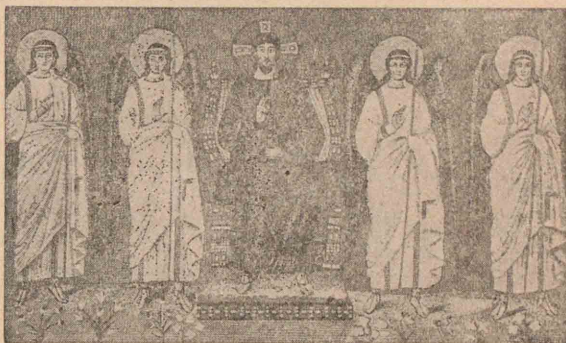
世、ユダヤにイエスキリストが生れ、自ら神の子なる救世主と稱し、ユ



キリスト教の特色

國モザイクで現はされたイエス・キリスト (ラヴェンナ聖アポリナレ寺藏)

キリスト教の公認



ダヤ教に基づきて一神教を説き、人類は皆兄弟にして相愛すべきものたるを教へ、ここに所謂キリスト教が起つた。しかもイエスはユダヤ人に嫉まれ、ローマ官吏のため、十字架の上に殺されたが、その弟子が熱心に傳道に努め、遂にローマに傳はつた。ローマの諸帝はこれに迫害を加へたが、コンスタンチヌス帝に至つてキリスト教を公認し、テオドシウス帝に至つてこれを國教とし、同教はここに始めて帝國の統一の信仰となつた。

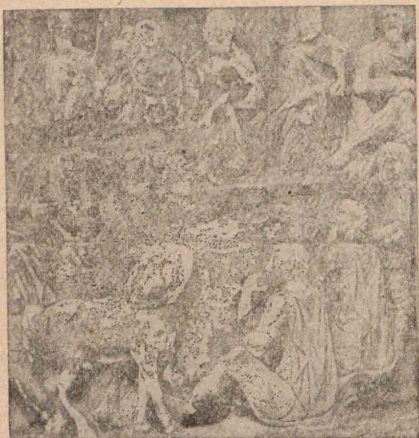
●ローマ強大の因由　ローマ人は團體的理想に富み、個人よりは家族を重んじ、婚姻の眞意も家名の存續にある。また家族よりは國家を重んじ、忠勇愛國を以て比類なき大帝國を建設した。

第二編 中世史

第一章 ゲルマニヤ民族の大移動とその建國

ゲルマニヤ人の特質

國羅馬、マールカスリアウレリウス記念柱に現はれたゲルマニヤ部族會議



●ゲルマニヤ民族の移動　ゲルマニヤ民族はローマ帝國の北方に住し、男子は性勇猛、戰を好み、また農牧獵を業とし、時に帝國の北邊を侵し、またその傭兵となつた。女子も勇敢に、節操正しく、戰場の夫に糧を運ぶを常とした。紀元四世紀後半、ヴォルガ河畔のフン族(アジヤ民族)西に動いて、ゲルマニヤ民族の東ゴートに従へ、西ゴートを追ひ、ここに西ゴートはドナウ河を涉つて、ローマ帝國領内に移住した。即ちゲル

ゲルマニヤ民族はローマ帝國の北方に住し、男子は性勇猛、戰を好み、また農牧獵を業とし、時に帝國の北邊を侵し、またその傭兵となつた。女子も勇敢に、節操正しく、戰場の夫に糧を運ぶを常とした。紀元四世紀後半、ヴォルガ河畔のフン族(アジヤ民族)西に動いて、ゲルマニヤ民族の東ゴートに従へ、西ゴートを追ひ、ここに西ゴートはドナウ河を涉つて、ローマ帝國領内に移住した。即ちゲル



民族移動

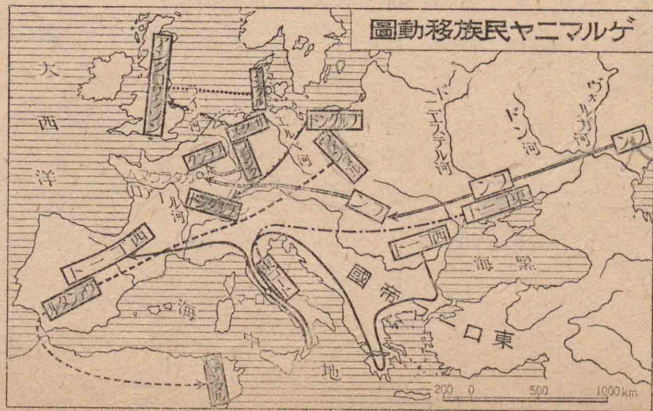
民族大移動の混戦

凶奴  
アッチラの西進

カタラウヌム戦の史的意義を考へよ

マニヤ民族移動の始めである。やがて西ゴートはイタリアを侵し、またイスパニヤに入り、ヴァンダル族(ニヤルマ)をして遠くアフリカ北岸(カルタゴの故地)に逃れて、ヴァンダル王國を建設せしめるに至つた。この間、西ローマはガリヤの兵を撤してローマを守らせたので、フランク族(ニヤルマ)はガリヤの北部に入り、別にアングル・サクス兩族(ニヤルマ)はブリタニヤ島に移つてイングランドの基を開いた。次いでフン族の王アッチラがガリヤを侵し、方に全ヨーロッパを切り従へんとしたが、西ローマ及びゲルマニヤ諸族のため、カタラウヌムの戦に敗れた。

① 西ローマの滅亡 帝國兩分後、西ローマ帝國は外人侵入等のた

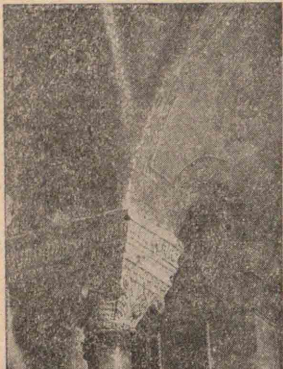
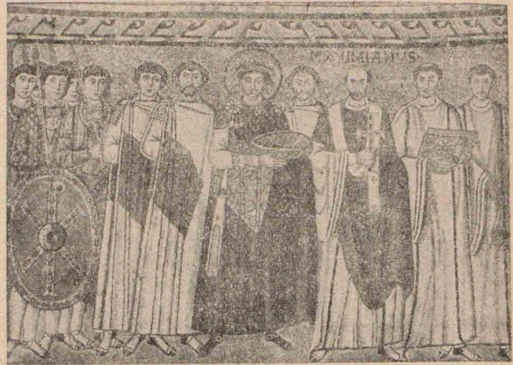


西ローマ帝國の滅亡  
東ゴート王テオドリク

西ローマ帝國の滅亡  
東ゴート王テオドリク

ユスチニアヌス帝の内政外交

東ローマ建築の大斗の趣、見るべきものがある



め國力が衰へ、遂にゲルマニヤ傭兵長オドアケルが皇帝を廢して、イタリア王と稱せられ、西ローマ帝國が亡んだ。やがて東ゴートのテオドリク王がオドアケルを併し、イタリアを支配したが、帝國の盛運に還し得なかつた。

② 東ローマ帝國 帝國分裂後、東ローマ帝國も亦衰へてゐたが、ユスチニアヌス帝の即位するに及び、内政、外交共に大いに振うた。

帝は先づローマ法典を編修し、セントソフィヤの大會堂を起し、更に支那より養蠶術を傳へ、また名將ベリサリウスに命じて、ヴァンダル王國を平げ、イタリアを従へ、勢威を海外に輝かしたが、その死後、國運再び衰ふるに至つた。



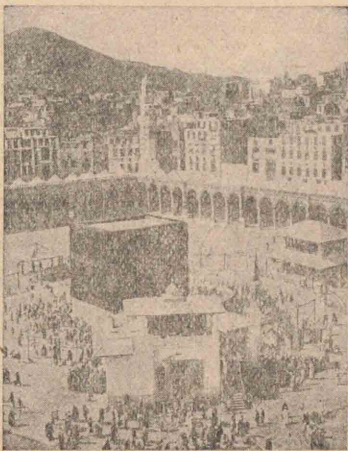
第二章 中世ヨーロッパ (一) マホメット教とサラセン帝國

サラセン人の國風

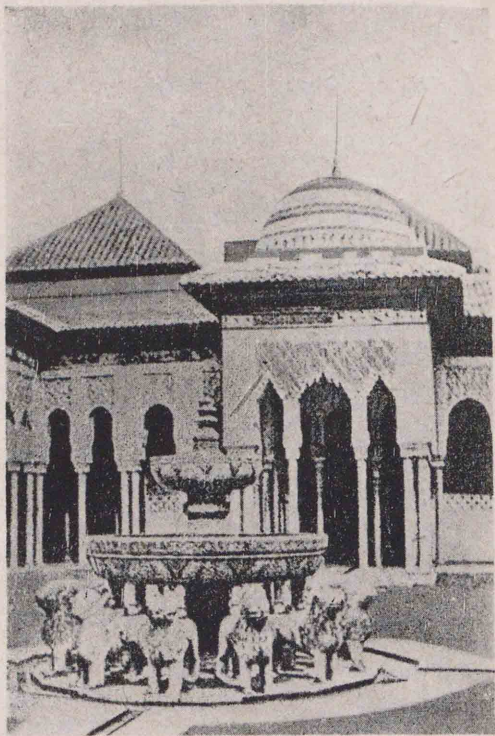
圖 阿拉ビ人本  
來の信仰中心で  
あり、今なほマ  
ホメット教徒禮  
拜の中心となれ  
るメッカ、カーバ  
の神殿

マホメット教(回  
教)の創立

コーランの成立

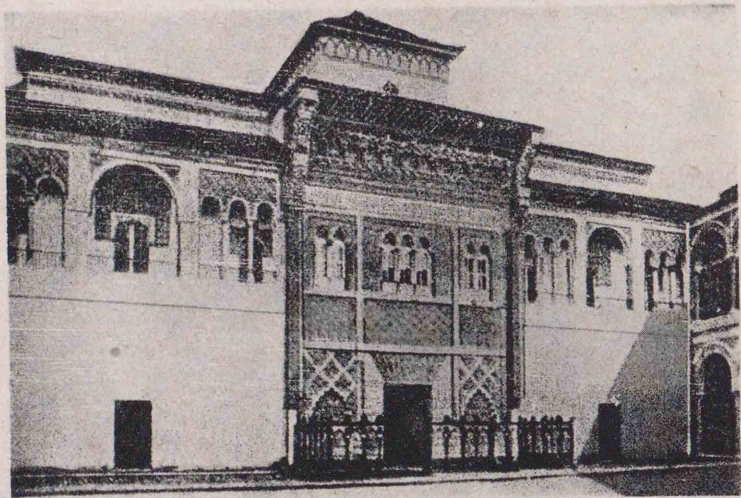


●アラビヤ族とマホメット もとアラビヤの住民はサラセンと呼  
ばれ、多くの部族に分れて、牧畜また隊商を業とし、多神教を奉ずる未  
開人であつたが、マホメットが<sup>Arabia</sup>出で新宗教  
の力に依り、宗教上並に政治上の統一を  
斷行するに至つた。マホメットは<sup>Mohammed</sup>メッカに  
生れ、はやく隊商に加はつてシリヤ方面  
に行商し、ユダヤ教、キリスト教の感化を  
受け、マホメット教(ムスラ)なる一神教をう  
<sup>Mohammedanism, Islamism</sup>ち立て、遂にメッカの住民に追はれて、難をメヂナに避けたが、やがて武  
<sup>Mecca</sup>力でメッカを復し、アラビヤの大半を平定し、ここにその教を弘め、彼の  
死後、コーランと云へる經典が編まれて、この宗教が確立した。



イスパニヤ、グラナダ、アルハンブラ王宮の獅子の庭

(サラセン式建築)



(築建ンセラ)「宮王ルーサカルア、ヤリ、ヴセ、ヤニパスイ



グラナダ「アルハンブラ王宮獅子の庭」(サラセン建築)

Granada

Alhambra

Patio de los Leones

サラセン帝國のゴルドヴ王朝がイスパニヤを支配した折、グラナダはイスパニヤのグマスクと言はれ、氣は澄み、樹は茂り、金銀は充ち足つて、實に殷富の都會であつた。しかも同地のアルハンブラ王宮は今に尚ほ當時の盛觀を傳へて、サラセン建築の代表的のものと云はれてゐる。圖は同王宮、兩姉妹の間の南側「獅子の庭」の光景を寫したものである。庭の中程に十二の石獅子に支へられた泉盤がある。この彫刻こそ十四世紀にマホメト五世の命にて造られたと言はれて居り、その形態の妙が遂にこの圓庭に名づくるに獅子の庭の名を以てするに至つた所以である。なほ中庭に噴泉を造るはサラセン建築の特色にして、暑熱烈しきアラビヤに起つたが爲である。庭の周圍の柱廊の彫刻が繊細にして色彩鮮かな幾何學的紋様を用ふるもサラセン建築の特質である。

セウイリヤ「アルカサール王宮」(サラセン建築)

Sevilla

Alcazar

イスパニヤの西南部セウリヤは、ゲダルキヴルの清流の左岸に位し、瀟洒たる藝術の都市である。ここに「アルカサール王宮」とよぶサラセン式の典型的建築がある。十二世紀の頃、スルタン「ユズフ」がアブハヤグプの造るところと言はれてゐる。圖に示すところはその王宮の正面であり、幾何學的紋様の鮮美なる彫刻は、今に尚ほ當年の盛觀を想像させるものがある。

サラセン帝國軍の西歐侵入

ツールの戦の史的意義如何

サラセン帝國の分裂

サラセン文明の特色

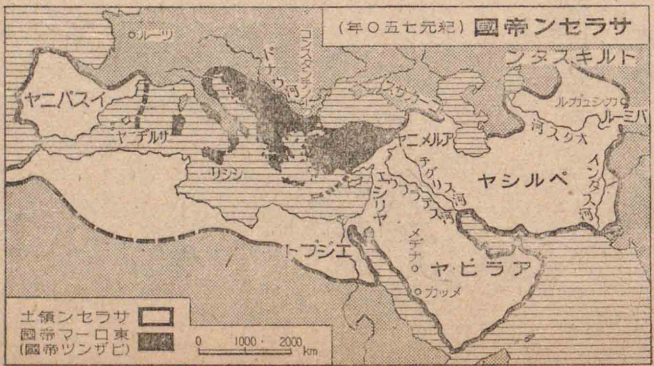
① サラセン帝國の強盛

マホメットの繼承者をカリフといひ、政教二つの全權を握り、征服と布教によつて諸國を服し、東はベルシヤを從へ、西はエジプトより北アフリカを平定し、更に北上、イスパニヤに入り、フランク王國を侵したが、ツールの戦に敗退してイスパニヤを保つた。また東方から東ローマを侵さうとしたサラセンの企も失敗に終つた。

その後、カリフ相續の争から、サラセン帝國が分裂し、東はバグダード(チグリ)に、西はコルドヴァ(ニヤ)に都して、國運何れも盛んであつた。

② サラセン文明

東西兩サラセン國は八、九兩世紀に跨つて文明が進み、藝術では美は





しき唐草模様や、獨特の建築様式が發達し、工業では製紙機織の法が進み、商業は海陸共に盛んに、その他、文學、數學、物理、化學等も長足の進歩を遂げた。

### 第三章 中世ヨーロッパ(二) キリスト教會とフランク王國

●ローマ法王 もとキリスト教會は單なる信者の集まりであつたが、後には布教の便宜から、信者の間に僧侶が出來、更にこれにも種々な階級を生じ、殊に五大本山の一、ローマの大長老は、歴代有爲の人物を出し、その勢が大いに高まつて法王と呼ばれ、精神界の帝王たる觀を呈した。さてローマ教會では布教の便宜上、キリスト教の本義から離れ、偶像崇拜を認めたが、東ローマ帝レオ三世はこれを禁じ、法王は遂にフランク國と結んで、東ローマの支配を脱した。かくてキリスト教は分れて、東のギリシヤ正教、西のローマ正教となつた。

法王の起源  
偶像崇拜問題  
東西兩正教の分立

ピピン國王を廢す

チャールス大帝

(長兄)位(800年)

一八四死)

デューラーの筆に成るチール

ス大帝

銘ラテン文。一

五一四年筆チ

ールス大帝

(ドイツ、ニール

ンベルヒ國民博

物館藏)

外征

チールス大帝の

内治

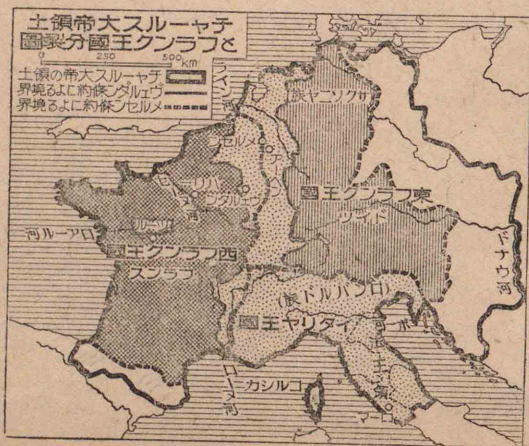
#### ●フランク王國

フランク王國では紀元八世紀の中頃に、宮宰ピピンが國王を廢して自ら位を奪ひ、法王はフランクの援を得ん爲、ピ



ピンの即位を認めた。やがてピピンの子チャールス大帝が位を継ぎ、五十餘回の遠征  
Charles the Great  
でイタリ  
ヤイスバ

ニヤの北部を取り、更にゲルマニヤ諸民族を従へ、キリスト教を弘め、ここに法王レオ三世はローマ皇帝の帝冠をチールスに授け、西ローマ帝國が恢復した。帝力を内治に注ぎ、教會を助け、地方制度を刷新し、教育を起し、農工を勵まし、西ロー

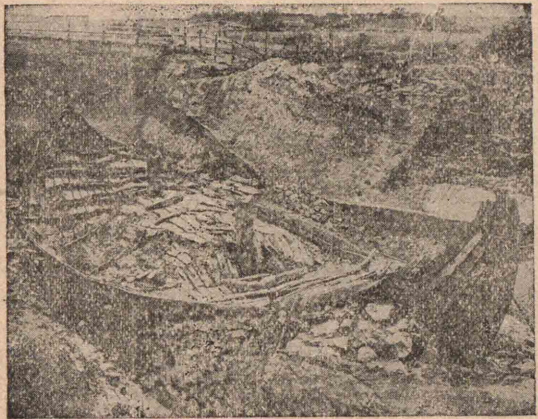




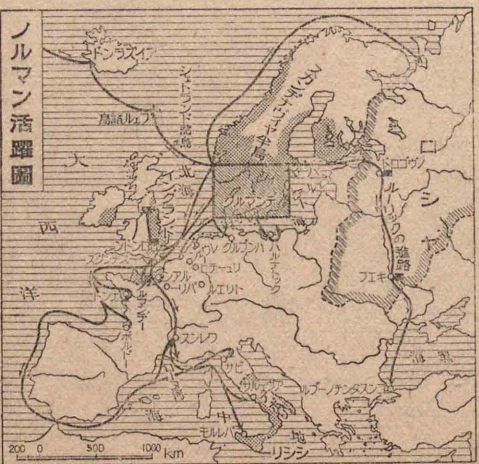
大帝國の分裂(獨・佛・伊三國の起り)

マ滅亡後、衰へ果てた文明は再興の氣運に向つた。さて大帝の死後、子孫がその遺領を争ひ、紛争久しきに涉つたが、遂にヴェルダン・メルセン兩條約に依つて帝國が分れ、東西兩フランク及ビイタリヤとなり、今のドイツ・フランス・イタリヤの基をなすに至つた。

ノルマン人の特性  
ノルマン人の起り



ノルマン人の活動  
ノルマン人(Normans)はもとスカンディナヴィヤ及ビデンマルク地方に住



藤原頼通關白の頃、宋の英宗時。

ノルマン人の特性  
ノルマン人の起り  
ヘースチングスの戦

ノルマン人の起り  
ヘースチングスの戦

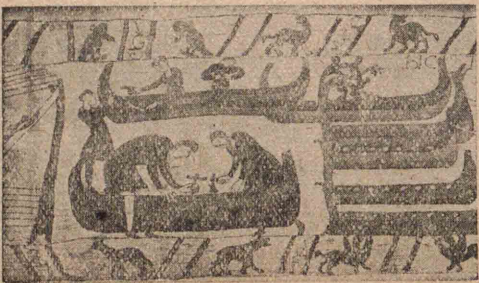
し、性勇敢で、冒險を好み、常に風波を凌いで東西兩フランクを侵し、西フランクではセーヌ河下流一帶の地を得、ノルマンディー公となり、その後、一〇六六年にノルマンディー公ウィリアムは兵を率ゐてイングランドに攻め入り、ヘースチングスの一戦に勝つて、ノルマン朝の王位を創め、以後ノルマンの文化が、アングル・サクスのそれと融和し、所謂イギリス文化の基をなした。  
その他ノルマンの一種は東に進んでスラヴ人を従へ、ロシアを建て、更に南に向つてシシリー島を取り、ナポリ王國を建設した。

第四章 中世ヨーロッパ

神聖ローマ帝國とローマ法王

神聖ローマ帝國

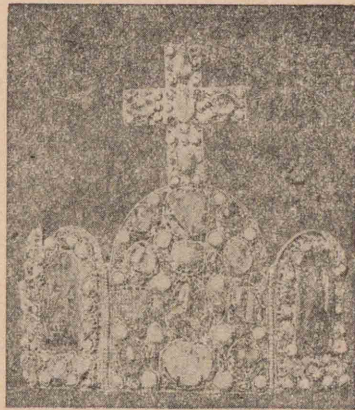
東フランク即ちドイツで





オットー一世の統一理想  
神聖ローマ帝國の起り(九六二年)

神聖ローマ帝國の帝冠  
(ウイーン宮廷博物館蔵)



ばチールス大帝の系統が絶え、諸侯伯等が國王を選舉する風が起つた。やがて大統一の理想をもつオットー一世が國王に選ばれ、蕃民を従へ、イタリヤを平げ、ために法王から神聖ローマ皇帝(ドイツ皇帝)の帝冠を受け、またイタリヤ王の稱號をも兼ねた。以後ドイツ王は概ねこれらの稱號を用ひ、ドイツの内事を顧みず、却つてイタリヤのことに力を注いだ。

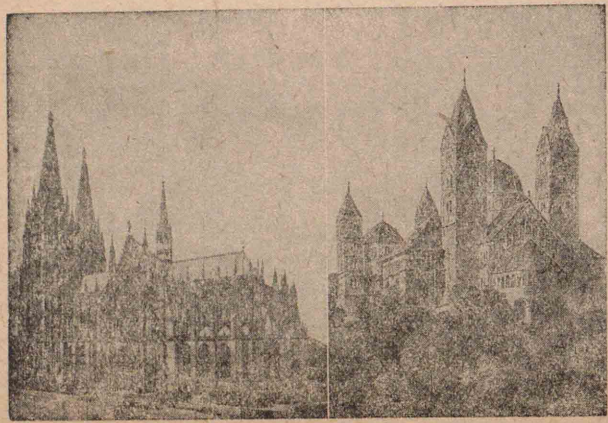
皇帝と法王との衝突 皇帝と法王とは永く相結んで互に勢を展ばしたが、その爲、兩者の間に烈しき争をひき起した。法王グレゴリー七世は才略に富み、法王權を以て世界を支配しようとして、先づ教會内部の改革を行ひ、ついで僧官任命權を皇帝の手から奪はうと計つた。ドイツ帝ヘンリー四世その命に従はず、却つて法王の廢位を宣し、爲

カノ、サの屈辱

教會建築 (ロマネスクとゴシック)  
圖國向つて右、ドイツ、スパイエル大寺院(ロマネスク)。左、ドイツ、ケルン大寺院(ゴシック)  
ロマネスクの平面圖はラテン十字形。天井は圓形アーチ、窓の上部も圓形アーチ。  
ゴシックの平面圖は複雑な十字形。天井は尖形アーチ。窓は大きく上方尖形アーチ。塔は高く尖銳である。  
封建制度の起源

に法王から破門の宣告を受け、止む無くイタリヤ、カノ、サに法王を訪ひて罪を謝し、漸く破門を赦されるに至つた。これより法王權盛んに、特に法王インノセント三世に至つては、諸國の君主をも下風に立たしめるやうになつた。かくて教會の財政は豊かに、大寺院の建立も起り、ロマネスク風の建築について、ゴシック風の莊嚴なものも行はれた。

封建制度 サラセン軍のヨーロッパに攻め入つた際、フランク國で王領寺領の一部を封土として臣下に與へ、依りて臣下をして兵馬を養ひ、有事の日に備へさせ、封建制度の端ここに開けた。さてこの制度では、國王より封土を與へられた諸侯が、更に





東洋に於ける封建制度に就いて研究せよ

封建制度の階級別

封建諸侯の居城

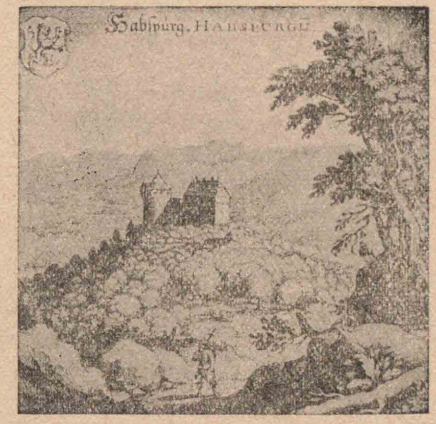
普通山城にしてブルグといふ

騎士の試合

武術競技會の光景。ここでは普通、一騎士と一騎士、或は騎士團と騎士團が互に武藝を比ぶるを常とする。馬上に槍を揮ひ、驅け違ひさま、相手の騎士を馬から突き落したものが勝である

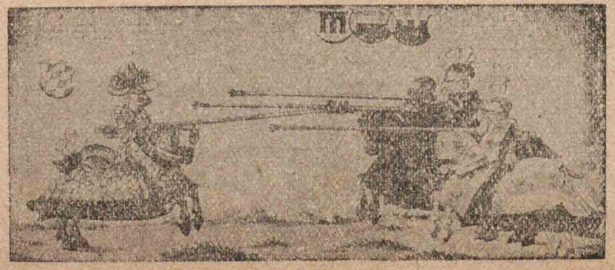
武士道の成立

自領を割き多くの武士(騎士)を養ひ、土地を媒とする主従の連鎖的關係を生じた。なほこの制度では階級區別が極めて嚴に、武士は社會の中心となり、商・工・農はその下層に位した。



この封建制度は十世紀頃完備し、以後五百年間、普く西歐諸國に行はれた。この制度の中心は武士であつて、武士道の發展を見、武士は嚴重な教養を経た後、

一定の儀式で一人前の武士に取立てられ、神を敬ひ、婦人を尊び、忠誠勇武にして平素武藝を勵み、戦時主君に従つて戦に臨み、その馬前に死するの覺悟を持つた。もしこれに背かば武士の列から追はれた。



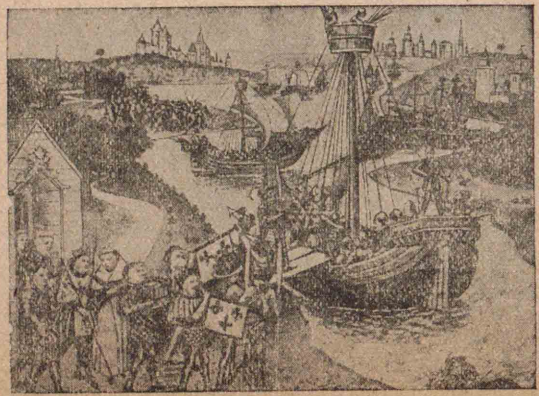
當時また修道僧は教會擁護に努める外、神への奉仕としての労働を尙び、商工業發達の氣運を促すに至つた。

第五章 中世ヨーロッパ(四) 十字軍とその影響

●十字軍の起りとその経過

サラセンに代つて聖墓の地エルサレムを領したセルジックトルコは、西歐から來る巡禮者に虐待を加へたので、憤慨の聲がキリスト教國の間にたかまつた。そこで法王ウルバン二世は諸國の僧侶、武士をクレルモンに集めて聖地恢復の軍を起すことを勧め、群集みな熱狂して從軍を誓ひ、所謂十字軍がここに起つた。

第一回十字軍は困難にも屈せず、聖地を取



セルジックトルコの横暴  
●十字軍軍士の出征  
船にて聖地に向ふところ  
クレルモンの會議  
因にこの頃、宗教熱が盛であつて修道院の僧侶の如き異教徒討伐の先頭に立ち上つた

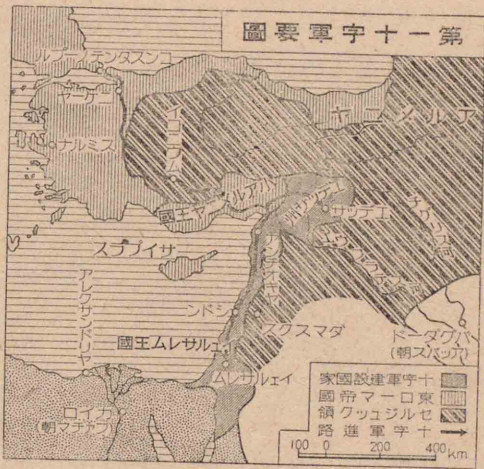
\*わが國は今から八百九十三年、白河院上皇時代、佛敎全盛のこのである。



十字軍の不成功

十字軍の各方面に  
與へた影響

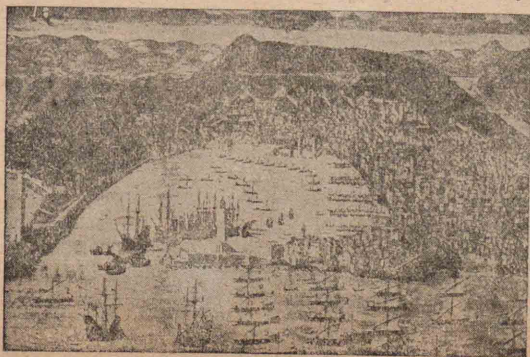
圖 一十一 十字軍要圖  
シエノアの盛況  
中世時代シエノアとヴェニス  
は地中海の良港であつて東洋貨物の集中するところであつた  
(プロヒレイン世界史所収)



り、ここにイエルサレム王國を起したが、トルコ人の爲に亡んだ。さて十字軍は第一回後、引次いで起り、第七十字軍に及んだが、何れも聖地恢復の目的を達せず終つた。

### 十字軍の結果

十字軍の失敗の爲、法王に對する尊敬心が衰へ、且つ信仰心も冷却し、從軍の諸侯、武士が戦死し、或は財産を失つたので、封建制度が破壊され、中央集權が諸國に起つた。更に十字軍の爲、東方交通が盛んとなり、通商も進み、都市の勃興を促し、特にイタリヤのヴェニス



「ハンザ」同盟

宗教改革の先驅者

ジョン王の失政

シエノアの如きは最も著れ、また市府の安全を目的に、相互同盟するの風を生じ、ドイツの「ハンザ」同盟の如き最も著名である。更に十字軍を機會に東方サラセン文化が西洋に傳はつた。なほ十字軍後、法王權が衰頽し、教會内部の腐敗も募つて來たので、フスやウイクリフのやうな宗教改革の先驅者も起つた。

### 第六章 中世ヨーロッパ(五) 西歐諸國の形勢

#### ● 英佛兩國の發展

十二世紀の半ば、イングランドではノルマン朝の王統が絶え、その親戚たるフランスのアンジー伯が王位を継ぎ、ヘンリー二世と稱した。ここに英王は英本國のみならず、フランスにも廣大な領地を有ち、その勢フランス以上に盛んであつたが、その子ジョンは暗愚で民を憐まず、フランス國內の領土も多く失ひ、威信は全く衰へた。かくて一二一五年貴族、僧侶等が王に迫り、彼等の起草



大憲章の發布

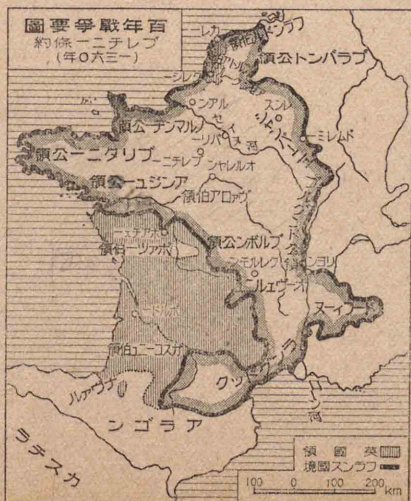
大國議會の起り

せる大憲章に署名を求め、民権を保護し、王權の濫用を抑へるやうにした。これがイギリス憲法の基礎である。ついでヘンリー三世の時、王の專横を抑へる爲、貴族僧侶と州市の代表者を集めた議會が開かれ、後に分れて上下兩院となつた。一方フランスでもフリッブ四世が立ち、法王との争に國民の援を得ん爲、貴族僧侶平民の代表者を集めて三部會を開いた。

States-General (1302年)

●百年戰役 十四世紀の初め、フランスでフリッブ六世が王位を嗣いだが、

英王エドワード三世は母方の關係で佛の王位を相續する權ありと唱へ、長子黒太子を従へ、兵を率ゐてフランスに攻め込み、百年戰役がここに起つた。この戰にフランス軍は頻りと敗れ、チャールス七世の時はオルレヤン

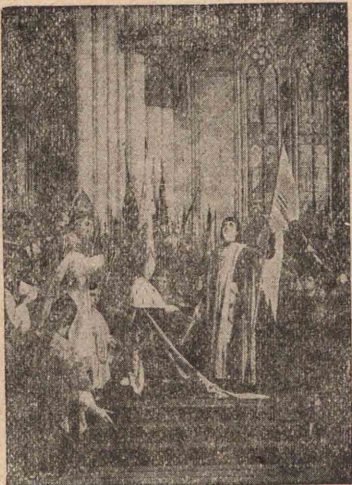


百年戰役 (1329-1359) (1339-1359)

ジャンヌダルクの出現

附近を保つに過ぎなかつた。この時ジャンヌダルクといへる憂國の一少女が出で、祖國を救ふべき神託を受けたものと信じ、自ら馬を陣頭に立てて全軍を勵まし、英軍を退けてオルレヤンの圍を解き、王をして戴冠式を

圖 戴冠式 (The Wars of the Roses) 式の侍立



英軍全く追ひ拂はる

薔薇戰爭 (The Wars of the Roses)

は大いに高まり、英國軍を追ひ拂つて殆ど全國を恢復することが出来た。この戰にフランスの諸侯、武士が衰へて中央集權の端が開かれ、英國でも王位爭奪の戰が起つて、三十年間に互れる薔薇戰爭となり、同じく諸侯、武士の多くが死んで、中央集權の勢を示した。

●イスパニヤ・ポルトガルの統一 イスパニヤではサラセン西帝國の勢が衰へ、キリスト教諸國の勃興となり、中にもアラゴン、カスチ

Argon Castile



。代時宗憲の明 代時軍將尙義利足 \*

イスパニヤ王國の成立

ラ兩國が合同してイスパニヤ王國の成立となり、遂にサラセン人を國外に逐つて、王權が著しく伸張された。（二四九二年）ポルトガルはもとカスチラの屬邦であつたが、十一世紀の末獨立し、次第に中央集權の業を大成した。

④ ドイツの形勢

ドイツは選舉に依つて皇帝を選んだので、帝權が常に弱く、これに反して諸侯の勢力が盛んであつた。かくて一三五六年皇帝チャールス四世の時、黄金文書を出して七大選帝侯の地位を確立し、諸侯の權は益々盛んとなつて、皇帝の命が行はれなかつた。

ドイツの一部なるスイスの地は、オーストリア、ハプスブルグ家の所領であつたが、人民が勇敢で獨立心強く、主家の壓迫に堪へずして反旗を擧げ、十四世紀の末センパハ等の戰に勝利を得て、獨立の實を得るに至つた。

⑤ オスマントルコの活動

ヨーロッパは先にサラセン人の侵入に

黄金文書

スイスの獨立戰

。代時宗景の明 代時軍將政義利足 \*

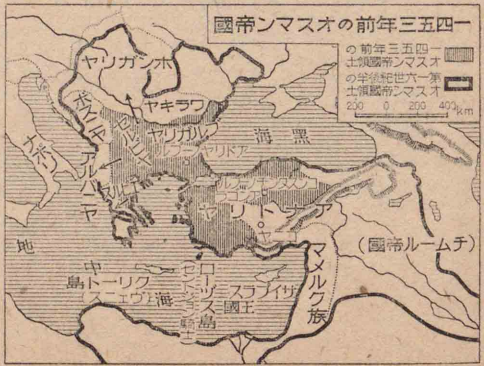
リーグニッツの戰

オスマントルコ帝國成立

東ローマ帝國亡ぶ  
マホメト二世  
のコンスタンチ  
ノープルを攻め  
た時、口径三呎  
これを運ぶに牛  
六十頭を用ふる  
大砲を使用した  
といはれる



脅かされ、後、蒙古人の侵入を受け、ドイツ・ポーランド聯合軍もリーグニッツの一戰に、蒙古軍の爲、大敗を招いた。これより先、同じく蒙古人に壓迫されたオスマントルコが、カスピ海の東を去つて小アジアに入り、部長オスマンの時、東ローマの衰運に乘じ、獨立帝國を建設した。（十三世紀末）後、オスマントルコはチムールとの戰（一四〇二年）に敗れたが、彼の死後再び盛んとなり、遂に一四五三年トルコ帝マホメト二世が、大軍でコンスタンチノープルを陥れ、東ローマ帝國はここに全く滅亡し、やがてトルコは三大陸に跨る大帝國となつた。





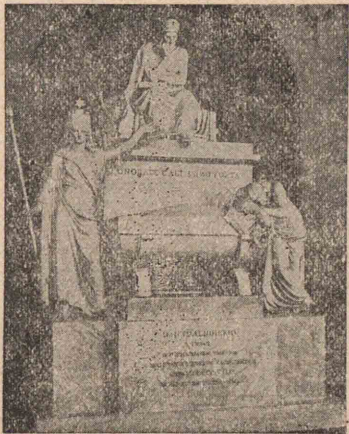
第三編 近世史

第一章 新機運の世界(一) 文藝復興と地理上の發見

ルネサンス

●復興氣運の動き 中世には凡ゆるものが宗教の束縛を受け、學問の研究も自由で無かつたが、十字軍以後、サラセン文化が傳はつて、西歐諸國民の見聞廣まり、諸國に起れる大學は好學の精神を盛んに

文藝復興の因由  
● 圖 聖イタリヤ、フ  
ロレンスなるサ  
ンタリクローチ  
テの記念墓、誌  
に云ふ  
上、詩聖に光榮  
あれ、先人によつ  
て三度企てられ  
て果さなかつた  
名譽の墓は一八  
二九年幸にも建  
てられた。眞  
因にダンテの眞  
の墓はラヴェン  
ナにある



し、その上、東ローマの滅亡前後、古典を抱いてイタリヤに避難する學者も多く、文藝復興の氣運はまづイタリヤに動いた。  
● 古學の復興 かくて十三、四世紀以來、イタリヤ各市では宗教を離れて自由に古典を研究し、人生及び外界の眞髓を



『母聖のオニリョフ』筆ルエッフラ



ラファエル筆「フォリニオの聖母」(ローマ、ヴァチカン宮廷美術館蔵)

ラファエル「サンチ」(一四八三—一五二〇)は文藝復興期のイタリアに於ける畫界の巨匠、法王ユリウス二世の殊遇を受け、幾多の名品大作を世に留めたが中にも聖母を畫けるものが有名である。蓋しラファエルは天使の如き無邪氣さと、優雅な感情に富んでゐた爲め、母性愛を描くに獨特の才筆を備へてゐた。さてここに掲ぐる「フォリニオの聖母」は一時カピトリノ丘のアラニコエリの祭壇に飾られ後にフォリニオに移されたのを以てこの名がある。天の幻影即ち天使の波に取巻かれた赫灼たる光の中、雲の座に聖母が立ち、膝に子たるキリストを抱いてゐる。母子共に慈愛と同情の眼に充ちみちてゐる。雲下の前面向つて左端に立つは使徒ヨハネであり、左手に十字架を捧げ、右手に雲上の聖母子を指してゐる。その右に地に跪けるは聖僧フランシス、天を仰いで敬信の意を表してゐる。右端を見れば、跑く法王の侍従を擁して、信心の眼を聖母に注げる聖ヒイロニムスが立つてゐる。そして聖母子の直下、空を仰いで立つ一天使が、両手に奉納額を支へてゐる。しかも雲際、浮動の間、聖母子の態様に一脈の動の氣の漲るは、常に靜の聖母子のみを描けるラファエルとしては特例である。

人文主義の代表者

ミケランジェロの傑作「モーゼ」はイタリア文藝復興期の彫刻家、畫家、建築家、彼の手に成るモーゼの大理石像は傑作の一つである。ローマ、聖ピエトロ寺院の法王ユリウス二世の墳墓の前に立つてゐる。

三大發明  
(活版術・火藥・磁針盤)

發揮するに力を致した。所謂、人文主義の風潮であつて、詩聖ダンテの如きは、この傾向の代表者である。やがてこの風潮はドイツ・フランス・イギリスの各國に及び、數多の人才を輩出させた。

● 藝術の發展

中世の藝術は宗教的精神の束縛を離れることが出来なかつたが、人文主義の流行はこの方面にも革新を促し、寫實に依つて眞美の表現にとつとめ、また清新自由の氣を發揚した。

繪畫のレオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエル・サンチ、彫刻のミケランジェロ、建築のブラマンテの如き、何れもこの時代を飾る有名な大家である。



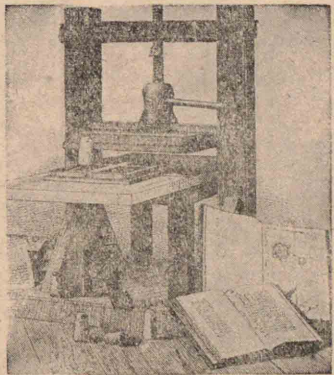
● 諸種の發明

自由な學問研究は自づと諸種の發明を促し、政治上、社會上、經濟上大なる影響を與へた。活版術は十五世紀中頃、ドイツ人グーテンベルヒが金屬活字を發明したことに始まり、貴重書籍



火薬及び磁針盤の利用

國語グーテンベル  
ヒの印刷機具  
(ドイツ、マイ  
ツ、グーテンベ  
ルヒ博物館蔵)



を廉價に普及させた。次に火薬は十四世紀に發明され、火器に應用されて戰術の變化を促し、封建制度の崩壞に大なる關係をもつこととなつた。更に十三世紀に起つた磁針盤の使用は、航海の發達を助け、新大陸、新航路の發見に大きな便宜を與へた。

⑤ 新航路の發見

十字軍起つて後、東西交通が盛んとなり、イタリヤ人マルコ・ポーロの如き元に至つて高官に上り、歸國後、旅行記を著して東洋の富有を説き、西歐人の東洋進出を促した。然るにオスマントルコは東方への商路を抑へて彼我の交通を妨げたから、意氣壯んなポルトガル人は、新に航路を發見して東方に通ぜんと考へた。十五世紀の初め、ポルトガルの王子ヘンリー航海王は、アフリカ西南海岸を探檢し、次いでバーソロミュー・ヂャズは

マルコ・ポーロ  
西歐人にして東洋を紹介せる有名な人考察せよ

ヘンリー航海王

\* 後土御門天皇應永七年。  
\*\* わが國は足利時代の末期の亂争時代。

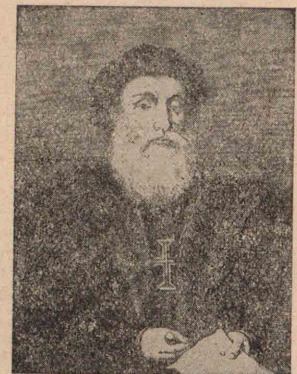
新航路の發見

國語ヴァスコ・コリダ  
ガマ  
インド航海にガマの用ひた旗艦サン・ガブリエル (San Gabriel) は僅かに百二十噸に過ぎなかつたと言はれてゐる

コロンブスの新大陸發見

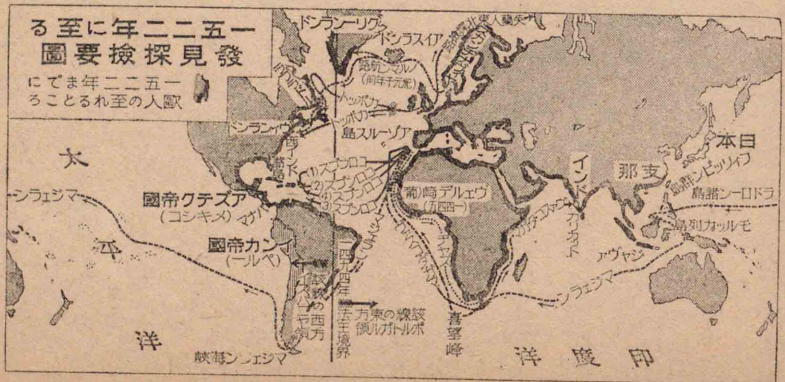
喜望峯に達し、有名なヴァスコ・ダ・ガマは一四九八年喜望峯を廻つてインドのカリカットに至り、インド航路は初めてここに開かれた。

● 新大陸の發見



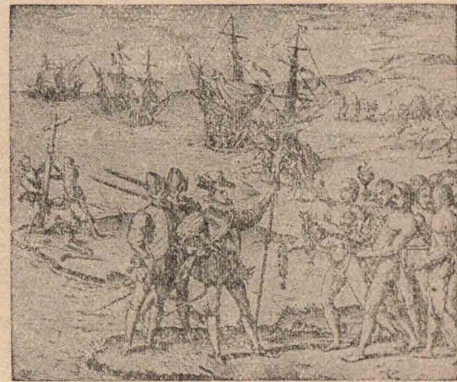
この頃イタリヤ、ジェノアの人コロンブスは、地球は球形だから、大西洋を西航せば、必ずインドに達するものと信じ、遂にイスパニヤ

女王イサベラの援助を得、一四九二年大西洋を横斷して、圖らずも今の西インド諸島の一、サンサルヴァドル島に達した。コロンブスはその後、引續いて西インド及び中南アメリカ





■ 西コロンブス、サンサルバドール上陸  
 一四九二年十月十二日コロンブス、緑十字を描ける旗を捧げ、一行を連れて上陸す。一行は土人にガラス玉の頸飾等を與へしに、彼等は大いに喜び、弓矢とか鸚鵡とか珍らしいものを持ち來つて一行に與へた



世界一周の始め

遂にフィリピン群島を發見したが、不幸にして土人に殺され、彼の部下が同じ船を以てアフリカを廻り、本國に歸り、ここに始めて世界一周の業を終へた。

第二章 新機運の世界(二) 宗教改革とその影響(上)

\* 後拍原天皇永正十四年、足利義隆將軍時代。

宗教改革の氣運

マルチンルーテルの奮起

■ 西クラナハ筆、マルチンルーテル  
 (シウエリン博物館蔵)  
 銘ラテン文「六十三歳の時」とあれば、老年時代のルーテルを見る事が出来る

チャールス五世帝の勢力



● 宗教改革の起り 中世の末、ローマ教會の腐敗を攻撃するものが現はれたが、何れも失敗に終つた。しかも文藝復興に依つて人智の高められた結果、教會改革の氣運が次第に盛んとなつた。偶、十六世紀の初め、法王レオ十世が聖ピーター寺の改築費を得るを名として、免罪符をドイツ各地で賣らせたが、ウイッテンベルヒの神學教授マルチンルーテルは、一五一七年その不法を攻撃し、ために法王から破門の宣告を受けたが、ルーテルはこれを焼いて斷然反抗の意を示し、宗教改革の争はここに起つた。

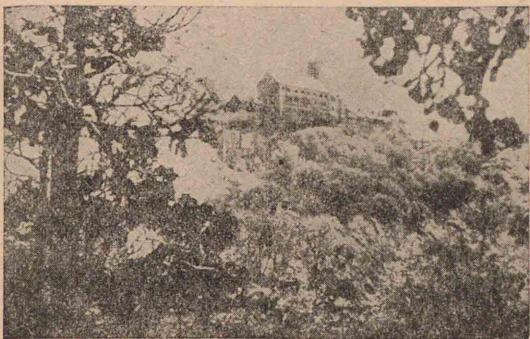
● チャールス五世の壓迫とルーテル  
 チャールス五世はオーストリア、ハプスブルグ家に出たドイツ皇帝で、イスパニヤ王を兼ね、廣大な領土を有して、威勢ヨーロッパに並ぶもの無かつたが、フランスに對抗



ウォルムスの國會

ワルトブルグ潜伏

全景  
山上の建物の中にルーテル潜伏の間あり。そこに聖書獨譯の際彼の用ひたといふ木製の机がある



する必要上、法王の意を迎ふるを有利と考へ、ルーテルをウォルムス國會に招いて説の取消を求めた。しかもルーテルは従はなかつたので、帝は彼に對する法律の保護を止め、ルーテルは密かにワルトブルグの城内に隠れて聖書の獨譯に從事した。

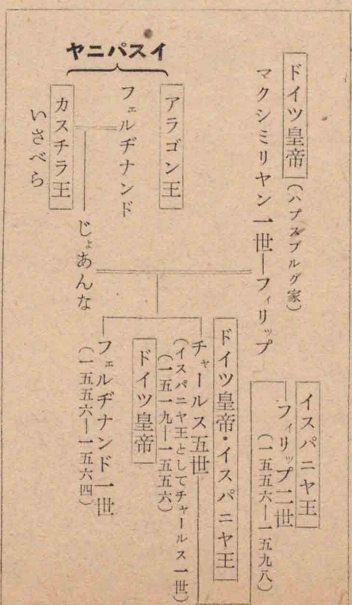
ワルトブルグの城内に隠れて聖書の獨譯に從事した。

ルーテルの妻

カザリンと呼ばれ、理智長けた婦人であり、ルーテルは僧侶獨身の無意義を唱へて、これと結婚した。

③ 新教の弘布とアウグスブルグ和議 この頃、チャールズ五世はフランス王フランシス一世

とイタリヤで戦ひ、更にオーストリアに侵入せ



アウグスブルグの宗教和議

ジョン・カルヴィンの新説

カルヴィン (一五〇九 - 一五六四年) フランスのピカルデー (Picardie) の人

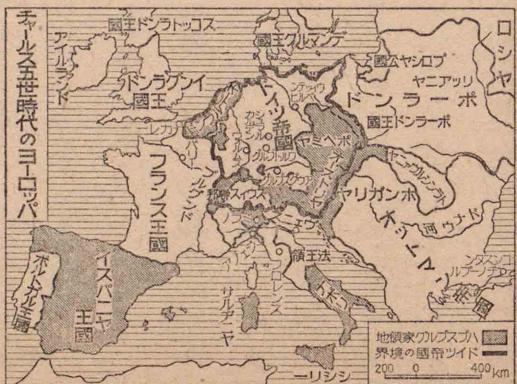


るトルコの勢力に當らん爲、ルーテル派と争を止め、同派の勢が増して、新教の基が固まつた。そこで帝は新教壓迫を止め、アウグスブルグ宗教和議を結び、諸侯都市に信

これよりルーテルの教はドイツを中心

に、北歐のデンマルクスウェーデン等に傳はり、別にフランスに出たカルヴィンの新教はフランス・オランダ・イングランドに傳はり、フランスのユグノー、イングランドのピューリタン (清教徒) 等諸派をひき起すに至つた。

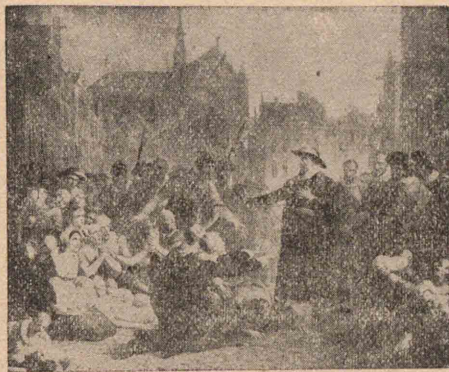
④ 耶蘇會の起り ルーテル・カルヴィン等の





耶蘇會(一)にジニスイト教團(二)が國では天主教或は切支丹宗といふの起り

一五七四年イスペイン軍、オランダのライデンを圍み、市内を食盡き、市民を長に迫つて、開城を求む。市長劍を市民に刺へ、まづ己を刺して後降らんことを命ず。市民感情して起ち、遂に勝つ。圖はこの時の光景を描く。(ライデン博物館藏) 市立博物館蔵



新教諸派は互に自説を主張して和合することなく、しかもその儀式は簡略に過ぎて民心を失ふやうな弊がある。これに乗じて舊教の弊害を除き、その勢力の恢復を計つたのが、イスパニヤ人イグナチウス・ロヨラである。彼は同志を集めて耶蘇會を組織し、法王に絶対服従を誓ひ、熱心にその宣傳を計つた。中にもわが國にこの教を傳へたフランシス・サヴィエルは有名である。

第三章 新機運の世界(三)

宗教改革とその影響(下)

① オランダ獨立 イスパニヤ王フィリップ二世(テイルス五世)の子はポルトガルの王位を兼ね、ネーデルランド・ナポリ等を領し、アメリカにも廣大なる植民地をもち、その勢全歐に振うた。しかも舊教を信ずること厚く、ネーデルラン

\* 天正九年にして信長本能的變の前の年

オランダの獨立宣言

イングランド教會の創立

ド各州の特權を奪ひ、且つ舊教を強ひたので、新教を奉ずる諸州の人民、憤慨して反を計り、遂に北部七州は聯合して獨立を宣言し、オレンジ公ウリヤムをあげて世襲の統領となし、頻りにイスパニヤと戦つて獨立の實を擧げ、十七世紀に至つてオランダ共和國と稱した。なほオランダは盛んに海外貿易に力めて東洋に勢を張り、わが國とも通商を開いて、イスパニヤ・ポルトガル兩國民を驅逐し、貿易の利を獨占した。

② イングランド教會の創立 エリザベス朝の盛運 十六世紀の

初め、イングランドでは、チードル王朝のヘンリー八世が位にあり、王后離婚問題で、ローマ法王と關係を絶ち、別にイングランド教會を作り、自らその首長となつた。次いで子エドワード六世が立ち、直ぐに教義を新教主義に改めたが、その姉メリーの立つに及んで、舊教を復し法王權を認めた。異母妹エリザベスが立つて、またもや新教に基



エリザベス女王の  
國教確立

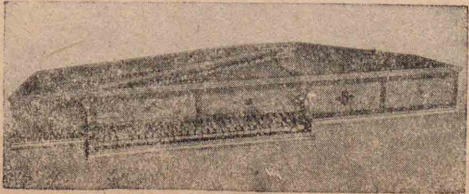
圖 艦隊の無敵艦隊  
 隊滅の記念牌  
 表(向つて左)中  
 央エリザベスの  
 肖像を刻し、周  
 圍はラテン文に  
 て「世界最上の  
 富をもつものは  
 女王なり」と刻  
 す  
 裏(右)海島に立  
 つ月桂樹の日光  
 に萎まぬ有様を  
 描き、ラテン文  
 で「如何なる危  
 険もエリザベス  
 女王を害はぬ」と  
 記してある  
 (英國博物館所  
 藏)  
 下の女王使  
 用の方形無脚有  
 鍵琴(ヴァクトリ  
 ヤルアルバート  
 博物館藏)  
 上のスコットラ  
 ンド女王メリー  
 (ロンドン國民  
 肖像畫館藏)

づいたイングランド教會を設立し、これを國教と認めた。更に首長  
 令及び統一令を發し、凡ゆる官職にあるものをして、英國王の政教兩  
 權の元首たるを認めさせ、且つ英國民をして國教以外の儀式を行は  
 せぬやうにとり決め、これに従はざるものに嚴罰を加へ、ピューリタン  
 一派のものはオランダやアメリカに脱れた。さてイングランドの  
 舊教徒は新教に傾けるエリザベスの  
 廢し、別にスコットランドの前女王メリ



Scotland

ーを迎へ立  
 てようと計  
 つたが、エリ  
 ザベスは直  
 ぐメリーを  
 捕へて死刑



エリザベス、メリ  
ー女王を殺す

無敵艦隊の失敗

エリザベス女王時  
代の盛運

圖 佛王ヘンリー  
 四世及び妃マリ  
 ヤ(イタリヤ、メ  
 チチ家)記念牌  
 夫の姿を表す  
 教の王ヘンリー  
 四世(マリアリ  
 ガスタ)と記し、佛  
 文)と記し、向つ  
 て右(裏)には夫  
 妻結婚の様を刻  
 し、且つ「權力擴  
 大の源」とラテ  
 ン文にて記す  
 この結婚により  
 王權のイタリヤ  
 方面に及ぶこと  
 とを表はす  
 フランス、ブルボ  
 ン朝起る



に處した。そこで同じ舊教徒なるメリーの處刑に憤れるイスパニ  
 ヤ王フィリップ二世は、有名な無敵艦隊を遣して、一舉にイングランドを  
 攻め取らうと計つた。しかし英艦隊は奮戦してこれをイギリス海  
 峽に破り、以後英國の海權は大いに振ひ、通商は頗る進み、東インド會  
 社も出來て、インド貿易に従事し、またアメリカ東海岸にヴァージニヤ  
 植民地も出來た。なほ内には文運が頻りに興つて、所  
 謂「エリザベス朝文學」の名を後世に留めた。

③ フランスの政教的内亂 フランスではカルヴィン  
 派の新教が段々盛んに、同宗の信徒が相結んでユグノ  
 ー派と呼ばれ、遂に舊教徒と争を起した。かくてイン  
 グランド・ドイツはユグノー派を援け、法王とイスパニ  
 ヤとは舊教派に與し、紛亂虐殺ひきついで起つたが、遂  
 にブルボン家のヘンリー四世が王位に即き、所謂「ナン



ナントの勅令

トの勅令を發し、新教派にも信仰の自由を許して、新舊兩教徒の政治的平等を認め、更に賢相de Narbonneシリを登用して内政の改善を計り、健全なる國家の發達を見るに至つた。

四 三十年戰役

ドイツではアウグスブルグの宗教講和後、なほ新舊兩教徒の争が絶えなかつたが、ボヘミヤの新教徒が、その王Ferdinandフェルディナンド後のフェルディナンド二世皇帝の壓迫に對して兵を擧げたので、これより三十年に互れるヨーロッパの大亂となつた。翌年フェルディナンド王は帝位に上つて、フェルディナンド二世と稱し、直ちに兵を遣してボヘミヤの新教徒を平げ、次いで名將Wallensteinワレンスタインを登用して、新教徒擁護を名に、侵入し來れるデンマルク王Christian IVクリスチャン四世の軍を破つた。

然るにスウェーデン王Gustav Adolfグスタフアドルフ



三十年戰役(一六一八—一六四八年)の勃發  
デンマルク王クリスチャン四世の來侵  
ワレンスタイン將軍  
(一五八三—一六三四年)

\* 前年三の亂雪正井由

グスタフアドルフのドイツ侵入  
リッツェンの戰

リッツェンの戰  
(ストクホルム博物館藏)  
畫の中央、方に馬より落ちんとせるは戰死せるグスタフアドルフである  
ウニストフリア條約

フは同じくドイツの新教徒を援けるを名とし、フランスと相結んで來り侵し、ワレンスタインはドイツ軍を率ゐて、これをリッツェンに邀へ撃ち、スウェーデン王をして戰死せしめるに至つた。しかもその後ワレンスタインは皇帝諸侯に疑はれて不幸なる死を遂げ、フランスも公然スウェーデンに力を併せ、ここにドイツ國民の戰意が急に衰へ、フランス・スウェーデンもまた財政の困難に苦しみ、遂に一六四八年ウニストフリアの條約成り、多年の紛亂漸く収まつた。この條約で、フランスはライン左岸Pomeraniaの地を、スウェーデンはポメラニヤの西部を得、スウェーデンは獨立を許され、ドイツの新舊兩教徒は同一の權利を得た。この戦によつてドイツは人口大いに減じ、田園は荒





ドイツの衰頹

第四章 近代歐洲諸國家の發展(一) 英佛

ジェームス一世の  
王權神授説

チャールス一世の  
弊政

クロンウエルの活  
動

れ、商工業は衰退し、爲に帝國の威信が衰へ、統一の基礎が全く壞れた。

① **イングランド第一革命と共和政治** イングランドではエリザ

ベス女王が死し、縁戚スチュアート家のジェームス一世王位に上り、スコッ

トランド王を兼ねたが、王は王權神授説を執つて専制政治を行ひ、屢  
議會と衝突した。子チャールス一世も弊政多く、武力で議會を抑へん

と計つたので、八年に互れる大内亂があつた。

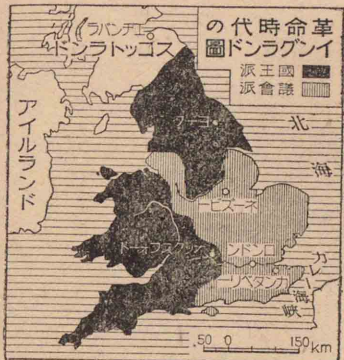
時に議會黨の勇將オリヴァークロンウエル出で、

精銳な騎兵を率ゐ、王軍を破り、王を捕へ、遂に

議會は無法にも王の罪を論じ死刑に處し、王

政を廢し共和政を布いた。かかる天理に悖

つた行爲はわが國史上にこれを認むべくも



革命時代のイギリスの地圖  
イギリス王國派議會派  
スコットランド  
アイルランド  
50 150 km

共和政治の出現

航海條例發布

クロンウエルの

筆

フロレンス、ピ

王政復古

無く、君臣の分嚴として兩者の關係父子の如きわが國體にこれを比

すれば、眞に雲泥の相違である。さてクロンウエルは共和政府長官と

なり、ピューリタン主義によつて嚴に奢侈を禁じ、航海條例を出しオラ

ンダの海運を妨げ、イスパニヤを討つてジャマイカ島を取つた。嘗、彼

の政治は峻嚴であつたので、却つて國民の怨

を招き、彼の死後、チャールス一世の子チャールス

二世が招かれて、王政復古を見るに至つた。



政治の成立

② **名譽革命と議會**

政治の成立

ス二世及びその弟ジェームス二世の時代は、國

教を守らず、民權を無視し、また國威を辱しめ

ることもあつたので、議會はジェームス二世の

女婿オランダ統領ウィリアムを、イギリス王に



ウィリアム三世  
世騎馬像  
(英國ハムトン  
コート離宮藏)

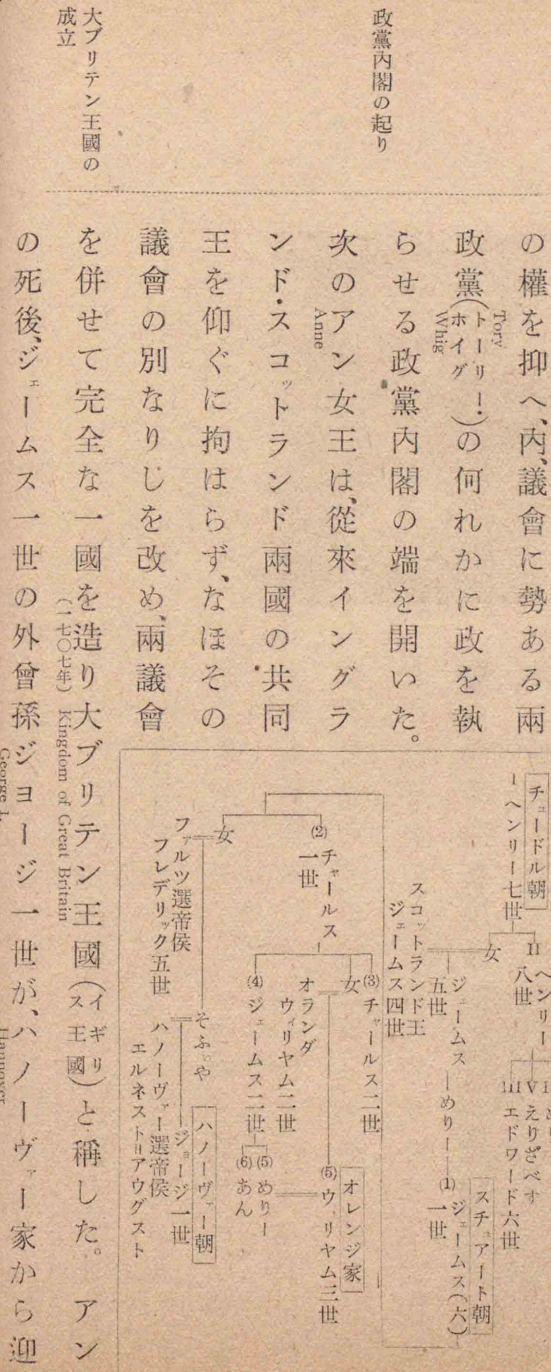


\* 頃の吉綱軍將がわ

名譽革命  
(一六八八年)

迎へ、ジェームス二世は國外に奔つた。よりてウイリヤムは議會の決議した「**權利宣言**」を認め、自ら王位に即いてウイリヤム三世と云うた。この革命は平和の間に行はれたので**名譽革命**と呼ばれる。

○ **チュードル・ステュアート及びハノーヴァー三王朝**



政黨内閣の起り

大ブリテン王國の成立

ハノーヴァー王朝  
(一九一七年ウイン  
ゾル「 Windsor」朝  
と改む)  
リシニユー及びマ  
ザレン

國圖  
ルイ十四世  
(ヴェルサイユ博  
物館蔵)

ルイ十四世時代の  
豪華

へられて王統を継ぎ、現イギリス王朝がここに起つた。

● **フランスの發展とルイ十四世** ブルボン朝のヘンリー四世後、ルイ十三世、ルイ十四世相ついで立ち、それぞれリシニユー・マザレンを宰相として王權を張り、國威を輝かした。やがてマザレンの死後ルイ十四世が政を親裁し、コルベールを財務



の局に當らせ、保護政策によつて國富を増し、ヴェルサイユに壯麗な宮殿を營み、美術の粹を集め、また大いに文藝を奨励し、フランス文學の黄金時代と稱せられた。更に列國はフランスの文學趣味を模範と仰ぎ、フランス語を上流社會に用ふるに至つた。しかもナントの勅令を廢して勤勉な新教徒を國外に追ひ、また屢外國と事をかまへて國庫を空しうし、大革命の因由を形づくつた。



ネーデルラント侵入

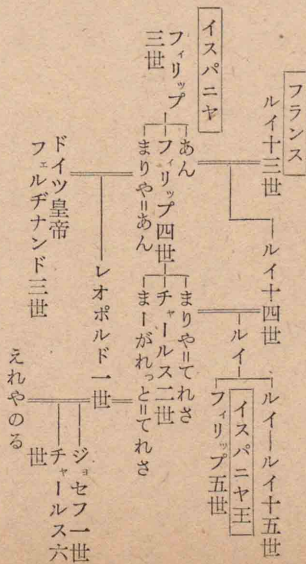
ファルツ戦役

イスパニヤ繼承戦役  
(一七〇一—一七四四年)

#### ④ ルイ十四世の外征

ルイ十四世は領土を擴げてヨーロッパの覇者とならうとし、先づネーデルラントを侵し、次にオランダと戦ひ、更にファルツに攻め込んだが、列國に妨げられて充分その目的を達しなかつた。その後イスパニヤ王チャールス二世が歿し、ルイ十四世の孫フィリップが遺言によつてイスパニヤの王位を嗣ぎ、フィリップ五世と稱した。しかるにドイツ帝レオポルド一世は次子チャールスをイスパニヤ王に推してこれに反し、フランスの強大を嫉めるイギリス、オランダ、ポルトガルと結んで戦を宣し、ここに十三年に互れるイスパニヤ繼承戦役となつた。やがてイギリスはマールボロ公をして兵を率ゐて大陸に渡り、ドイツ軍と共力して頻りにフランス軍をうち破らせた。しかもその後イギリスに政變が起つて平和論が盛んとなり、ドイツでもまた、イスパニヤ王の候補たるチャールスが帝位に即いて戦意衰へ、遂に一七一三年關係列國間にユトレヒト和約が結ばれ、將來、フランス・イスパニヤの合同せぬを條件に、フィリップ五世のイスパニヤ王たるを認め、イギリスはフランス・イスパニヤからアメリカ・地中海方面で領土を得、ここに海上王國たる基を固めるに至つた。

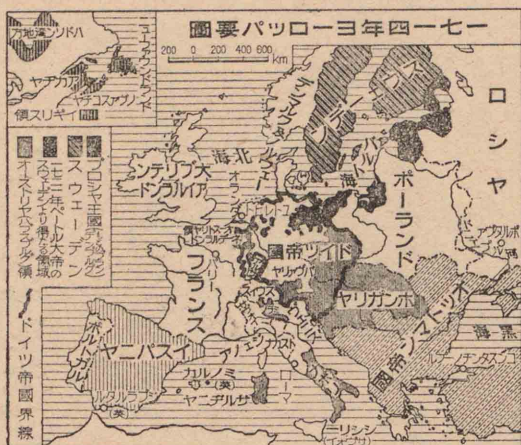
イスパニヤ繼承戦争關係系圖



\* わが徳川家継代時、清の聖祖時代

ユトレヒト條約の要項  
(因に一七一四年特にドイツ・フランス間の和議が成立した)

モスコイ大公國獨立



#### 第五章 近代歐洲諸國家の發展(一) 露普

##### ① ロシヤの發展

ロシヤは蒙古人の壓迫に苦しんでゐたが、モス



ロマノフ王朝の興起

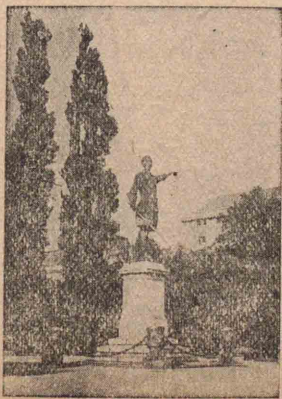
ペートル大帝の西歐巡歴

造船所に於けるペートル大帝

ペートル大帝西歐見學の時、オランダ、ツァンダム(Zaandam)に於て造船を學んだ。圖は斧を手にせる帝とその家從(ツァンダム、ペートル大帝舊宅藏)の銅像(スウェーデン王チャールス十二世銅像(ストックホルム王宮前に立つてゐる))



同盟して、スウェーデンに戦を宣し、北方戦役



Nov

コー太公イヴァン三世の時、獨立し、孫イヴァン四世の時、皇帝と稱し、シベリアの侵略に着手した。後、十七世紀の前半、ミカエル=ロマノフなるもの内亂を鎮めて、新に帝位に上り、ロマノフ王朝がここに起つた。  
●ペートル大帝と北方戦役  
ロマノフの孫ペートル大帝が出で、親しく西歐諸國を巡つて制度・文物を視察し、特にオランダでは造船術を學び、歸國後は陸海軍を整へ、教育を奨め、婦人の地位を高め、産業を盛んにするに至つた。  
これより先、大帝はトルコを伐つてアゾフ海沿岸の地を得たが、更にバルト海上に門口を開かうと企て、ポーランド・デンマルクと

北方戦役 (一七〇〇—一七二一年) ナルヴァの戦

ニスタット條約

カザリン女帝 (一七六二—一七九六年) プロシヤ、ステッテン(Stein)の貴族の家に生れ、ロシア帝ペートル三世の皇后となり、後に自ら即位し、啓蒙的専制君主として名高い

がここに起つた。スウェーデン王チャールス十二世は、デンマルクを攻め、直ちに軍を東に轉じてナルヴァの一戦にロシア軍を破り、更にポーランドを侵して王の廢立を行つた。この間大帝はスウェーデン領を奪つて新都ペテルブルグを營み、やがてチャールス十二世がロシアの中心を侵すや、これをポルタヴァに擊破してトルコに敗走させ、遂にチャールスは本國に歸つてノルウェーを攻め、フレデリクスハルドの戦に戦死した。かくて一七二一年ロシア・スウェーデンはニスタットで和約し、ロシアはここにバルト海沿岸の地を得て、北歐に雄飛した。

●カザリン二世の雄圖

ペートル大帝の後六代を経て女帝カザリン二世に及んだ。女帝は内政を改め、學術を奨励し、更に領土を擴げて國威を張らうとした。即ち大帝の時清國の北境に及んだシベリヤ經營をうけ繼





カザリン女帝のポーランド干渉

ポーランド分割

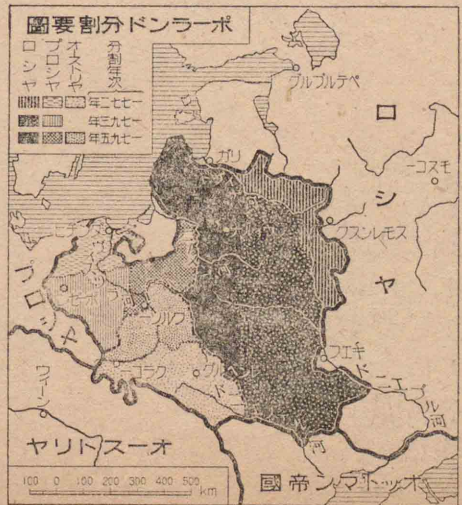
プロシヤの起源

フレデリックウイリアム一世の治績

ぎ、遠く東に手を展べてわが北邊を窺ふに至つた。當時、スラヴ族のポーランド王國は貴族の専横から階級間の争を生じ、次第に列強の侵略するところとなつた。かくてロシヤのカザリン二世はオーストリア・プロシヤ兩國と計り、前後三回に互つてポーランドを分割し、全然これを滅亡させるに至つた。

④ プロシヤの起りとフレデリック大王

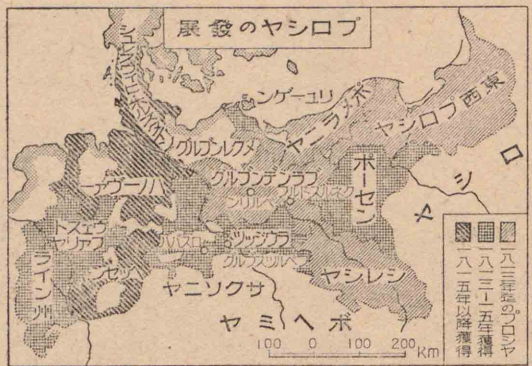
プロシヤはもとドイツ騎士團の領地であつたが、十七世紀にブランデンブルグ選挙侯の所領となり、やがて選挙侯フレデリック三世がイスパニヤ継承戦役にドイツ帝を援け、功によつてプロシヤ王フレデリック一世と稱した。その子フレデリックウイリアム一世は勤儉で



マリヤテレサ女王と女子相續家憲

オーストリア継承戦役 (一七四〇—一七四八年)

アーヘン和約 (一七四八年)



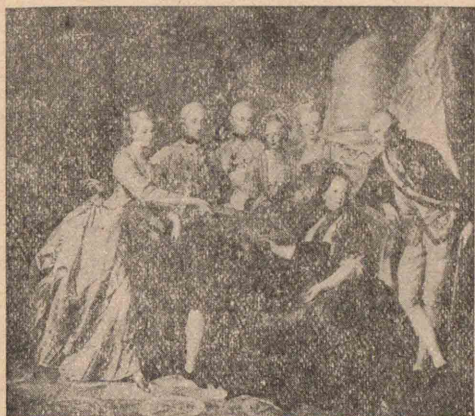
武を重んじ、國力を充實して、これを子フレデリック二世(大)に傳へた。

大王は武略に長じ、プロシヤの地位を列強間に高めようとした。時にドイツ帝チャールス六世が死んで、女マリヤテレサが女子相續の家憲に従ひ、オーストリア全領土を相續した。然るにバヴァリア選挙侯はこれを認めず、イスパニヤ・フランス等の援を得、共にオーストリアを攻め、オーストリア継承戦役が起つた。開戦前、フレデリック大王は急に兵を出してオーストリア領シレシヤを占領した。マリヤテレサはシレシヤを割いてプロシヤと和し、全力を以て聯合軍と戦つたが、遂にアーヘンで列國が和を議し、マリヤテレサの相續權を認め、プロシヤはシレシヤの領有を許された。



七年戦役

七年戦役  
(一七五六一—  
七六三年)  
マリヤテレ  
サ女王とその子  
女  
慈母としての女  
王の面影を見る  
ことが出来る



マリヤテレサはシレシヤの回復を企て、密かにロシヤフランスサクソニヤ等と結び、戦機の熟するを俟った。フレデリック大王は早くもこれを知り、イギリスと結んで、機先を制し、オーストリアを攻め、七年戦役が始まった。この役、大王は殆ど獨力で敵の大軍に當り、ロスバハ等に勝利を得たが、次第に軍資の缺乏と兵員の不足に悩み、大王は非常な窮境に立つた。然るにロシヤが同盟を捨てて、プロシヤに味方し、形勢が一變し、遂にフベルツスブルグ條約でプロシヤのシレシヤ領有が確認された。大王は七年の苦戦に堪へ、よくプロシヤの武威を輝かしたが、内政にも注意し、教育を奨め、法典を作り、産業を盛んにし、プロシヤを列強の間に伍せしめるに至つた。

フベルツスブルグ  
條約(一七六三年)

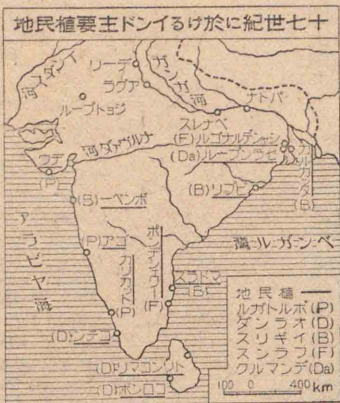
第六章 英佛兩國の植民地經營

英佛兩國の植民地經營

英佛蘭三國の東  
インド會社

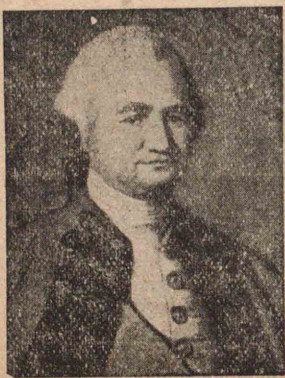
インド及びアメリ  
カに於ける英佛  
植民地

國國クライヴ  
(一七二五—  
一七二七)  
性狀 傲慢不屈  
にして争を好  
む。十八歳の時  
會社の書記とし  
て、インドに來  
り、フランスの  
一戦に名聲を輝  
かした



オランダ東インド會社の創立に前後して、英佛兩國にも同様の會社が出来、イギリスはインドのマドラス、カルカッタ、ボンベを、フランスはシャンデルナゴル、ボンヂシエリを領有するに至つた。また十七世紀までにフランスはカナダ、イジヤナ地方を得、イギリスは十八世紀までに北アメリカ東岸一帯の地を得た。

かくて英佛兩國は本國に事ある場合、東西兩植民地で争を起したが、アメリカでは英軍がケベックを取つて、フランスの勢力をカナダ





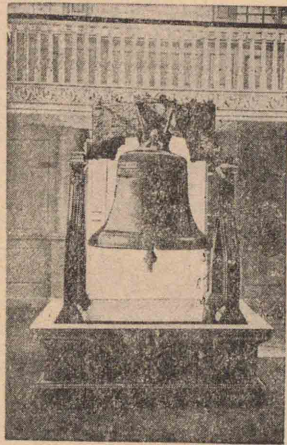
\* 竹内式部投獄の前。

英領インド帝國の基礎成る

から逐ひのけ、結局、パリー條約で完全にこれを領有し、インドでは英人クライヴがフランスの勢力を打破り、英領インド帝國の基を造つた。  
Clive  
British India  
二七六三年

アメリカ獨立の原因

國一七七六年獨立の宣言出で、フィラデルフィアの人民狂喜して警鐘を亂打し、鐘裂く。稱して「自由の破れ鐘」といふ  
(フィラデルフィア市獨立閣藏)



七年戰役後の財政窮乏を救はんがため、北アメリカの植民地に諸種の課税を行ふことになつた。ところが植民地の人民は本國議會に代議士を出す權利の無いのを理由に、極力課税に反對し、一七七五年本國軍との間に戰が開かれ、翌年十三州の植民地代表者がフィラデルフィアに會合し、ワシントン<sup>Philadelphia</sup>を總督に推して、「獨立の宣言」を發  
Washington, George  
Declaration of Independence



獨立の宣言

英軍の屈服

ヴェルサイユ條約 (一七八三年)

し、十三州を結んで、アメリカ合衆國と稱した。初め獨立軍の勢が振はなかつたが、フランス、イスパニヤが援軍を送り、ワシントンの戰略また巧妙で、敵軍の根據地ヨークタウン<sup>Yorktown</sup>を陥れ、イギリス軍遂に屈して、一七八三年ヴェルサイユ條約を結び、合衆國の獨立を認めた。かくて、合衆國は新に憲法を定め、聯邦共和政を立て、首府をワシントンに置き、ワシントンを選び、第一回大統領とした。  
(一七八七年)

ワシントンの母 <sup>Mary Washington</sup> メリー・ワシントンと云ひ、子の出征を悲まず、その軍旅に備へん爲、絹羊毛で靴下を編み、又子の部下の爲にも編物に忙がしかつた。

### 第七章 近世の文明

#### ● 近世國家思想

中世末封建制度が衰へ、中央集權の風が盛んとなり、近世に至つて君主專制政治にまで進んだ。しかし一面には君主も啓蒙思想の影響を受け、特權者を抑へ、國力を張らうとする傾向

啓蒙的專制君主

\* 光格天皇の御世。



重商主義

國民文學の建設

英・佛・獨の諸文豪

が起つた。かかる國家中心の風が經濟にも及び、國內産業を保護するに關稅を高め、所謂重商主義の名を以て呼ばれるに至つた。

●國民文學

近世國家對立の形勢に伴ひ、各國とも自國語に依る

學問・文學を獎勵し、イギリスでエリザベス朝には有名なシェイクスピア

ピヤが出で、共和時代にミルトンが現はれ、フランスではモリエール

コルネーユ、ドイツではゲーテ・シルレルの如き大家が出で、何れも不

朽の大作を遺してゐる。

◎藝術

近世、中央集權が發展し、壯大華麗な藝術

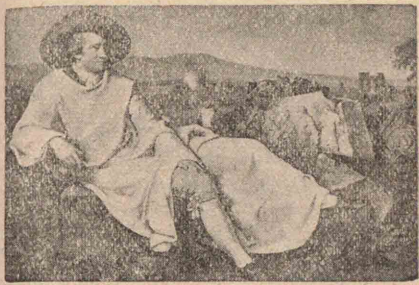
術が悦ばれ、繪畫でイスパニヤにヴェラスケス・ムリ

リ<sup>ロ</sup>が出で、オランダにルーベンス・ヴァンダイク・レン

ブラントが現はれ、何れも得意の大作を出した。

音樂ではドイツにモツァルト・ベートーヴェンが出で、

斯界の明星と仰がれてゐる。



■ 獨逸タリヤの廢城を背景とせるゲーテ(ドイツ、チン・シヨ・パイン筆)

繪畫の進展



ムリリヨの清淨受胎



「等兒小ぶ庭を環物果」のスノベール



ルーベンスとムリリョ

バロック文化の盛なりし時、オランダにルーベンス(一五七七一—一六四〇)、ヴァンダイク等、イスパニヤにヴァラスケス、ムリリョ(一六一七一—一六八二)等が出で等しく形式の誇張とその理想化といふ方面に才筆を揮うた。ここに掲ぐるムリリョの清淨受胎、ルーベンスの果物環を運ぶ小兒等の如き、何れもこの間の消息を傳へて、觀者の賞讃を博するに足りる。

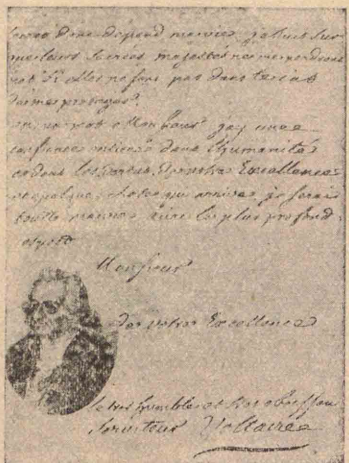
(前者はロンドン、國民繪畫館藏、後者はドイツ、ミンヘン、ピナコテーク繪畫館藏)

啓蒙文學

國圖 ヴォルテールの手蹟と肖像  
手蹟はヴォルテールがフレデリック大王と争ひて、ドイツより本國に還らんとし、途にプロシヤの官憲に擄へられた時、英國大臣スタヂオン伯に救を求めた手紙。一五七三年六月七日附  
國際法の神グロチウス

④ 啓蒙思想

文藝復興以來、人智が進み、科學が振ひ、特に十八世紀になつては、凡ゆる迷信や傳統を排し、凡ゆる事物を純理によつて解釋しようといふ風が起り、所謂「啓蒙思想」と呼ばれてゐる。文學でもこの影響を受け、フランスのヴォルテールは社會制度の弊風を攻撃し、貴族・僧侶を非難し、モンテスキューは、イギリス流の憲法を説き、專制政治を非難し、ルソーは人間の自由平等を力説し、フランス革命の因由をつくつた。その他アダム・スミスは關稅貿易を排して、自由貿易論の先驅となり、その前に出たオランダのグロチウスは海洋獨占の不法なのを論じた。



⑤ 哲學と科學

近代眞理探究の精神は精神文化の活動を促し、哲學の隆盛を來すことになつた。十七世紀に出たフランスのデカル



唯理論と經驗論

大哲カント出づ

大哲カント  
(一七二四—  
一八〇四年)



トは眞の知識は先天的の一定の原理に出づるといふ唯理論を説き、  
イギリスに出たベーコンの「經驗論」に對立した。やがて十八世

紀のドイツに大哲カントが現はれ、巧にこれ  
ら兩説を綜合し、近世哲學の基を定めた。

科學の研究も近代精神文化の活動に伴つ

て起り、コペルニクス

(Copernicus) は地動説を述べ、ケ

プレル(ツイ)は天體運行の法則を發見し、その他

英人ニートンは引力の大法則を案出した。な

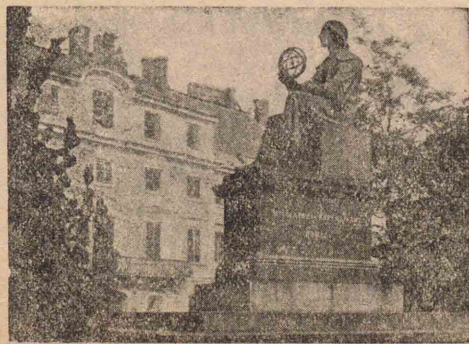
ほ科學の應用は啓蒙思想によつて著大なる發

展を遂げ、各種機械の發明も起つた。英人ワット

は蒸氣機關を、同じ英人アークライトは水力紡

績機を、米人フランクリンは避雷針を發明した。

科學の進歩  
歴ワルソーにあ  
るコペルニクス  
記念像  
手に持てるは天  
球儀である  
機械の發明



第四編 最近世史

第一章 フランス大革命

●大革命の原因

大革命の歴史的價  
値

フランス大革命はヨーロッパの社會に大變動を  
與へ、後世の歴史にも大影響を留めてゐるが、その基づくところは、主  
として政治上社會上の弊害に歸着する。フランスではルイ十四世  
以來專制政治を行ひ、奢侈と外征のために財政が亂れ、しかも少數の  
貴族僧侶は大部の土地を有するにかかはらず、免稅の特權を得、却つ  
て重稅を課せられたのは、大多數の所有地少き平民であつて、平民の  
不平は實に甚だしきものがあつた。その上啓蒙文學に鼓吹せられ  
た自由平等の精神、これが思想に基づく合衆國獨立の影響等、いやが  
上に平民の奮起を促し、遂にルイ十六世の失政を動機に恐るべき革

大革命の起れる因  
由



\* 時の軍將齊家、年元政寬皇天格光はで國がわ

ルイ十六世の性格

圖 魯イ十六世夫妻とその太子

財政整理の失敗

國民議會の成立

バスチーユ牢獄の破壊

命の騒亂をひき起すに至つた。

革命勃發と議會の活躍



National Assembly

命の騒亂をひき起すに至つた。かかる難局に際してフランスの王位にあつたのはルイ十六世である。王は時局を救ふべき決断はもたなかつたが、改革の志に富み、先づ財政整理の目的で、一七八九年、久しく開かなかつた三部會をヴェルサイユに召集した。然るに議決法について議論が生じ、結局平民議員は貴族僧侶と分れて、別に國民議會を組織し、新に憲法を作つて解散すべきことに定めた。偶、王が武力を以て議會を壓迫する企があると傳へられ、不平の暴民が一時にパリに蜂起し、遂にバスチーユ牢獄を破壊し革命の端を開いた。これより暴動は各地に起り、貴族僧侶の外國に避難するものが相次いで起つた。

やがて議會は「人權の宣言」を出して、自由平等の民權を主張し、ミラ

Declaration of the Rights of man

Mirabeau

人權の宣言  
圖 巴士チーユ牢獄破壊の記念牌  
上銘(佛文)「バスチーユの攻圍」  
下銘(佛文)「一七八九年七月十四日、パリ市民により奪取さる」  
王家國外へ遁走を計る  
立法議會の活動



ボー等の盡力で立憲君主制に基づく新憲法が出来た。然るにミラボーが死んで王は頼るところを失ひ、王后マリーアントワネットと他國に遁走を企て、遂に擒へられて幽閉の身となり、先に議會の定めた新憲法に承認を與へた。かくて新憲法に基づく立法議會の成立となつたが、プロシヤ・オーストリア二國は革命思想の傳播を恐れ、共にフランスを侵し、ここに議會は王權を停止し、王一族を禁錮し、力を一にして外敵に當り、屢、これを破つた。

(一七九二年六月)

Legislative Assembly

立となつたが、プロシヤ・オーストリア二國は革命思想の傳播を恐れ、共にフランスを侵し、ここに議會は王權を停止し、王一族を禁錮し、力を一にして外敵に當り、屢、これを破つた。

恐嚇時代

National Convention

やがて立法議會が解散して、國民公會がこれに代り、溫和過激兩共和黨が提携して王政を廢し、共和政を布き、ルイ十六世を死刑に處した。かかる天理に背いた所行は、君臣の分、嚴然として、

(一七九三年一月)

國民公會の成立  
共和政の成立



第一回歐洲大同盟

恐嚇時代

秋毫も亂るる無き、神聖なわが國體に比ぶべくも無いのである。報を得たヨーロッパ諸國、大いに驚き、英國宰相小ピットが中心となつて、第一回歐洲大同盟を組織し、四方からフランスの國境に迫つた。ここに於て過激黨は溫和黨の諸名士等を斷頭機上に殺し、國論を一にして、屢々侵入軍を破つた。かく慘忍の處置の行はれたので、世人この時代を恐嚇時代と呼んでゐる。

やがて過激黨の虚を窺ふものが出で、また黨内にも分裂を生じ、マラー・ダントン・トロベスピエール等の巨頭相  
Mara Danton Robespierre  
次いで殺され、恐嚇時代がここに終つた。

馬ラー(一七四三—一七九三年)とその自著  
總裁政府の組織

四 總裁政府とナポレオン かくて國民公會が解散して五人の總裁と上下兩院より成る總裁政府が組織され、ここに新政府はオーストリアを征伐するため、新に三軍



天才的英雄ナポレオン・ボナパルト

北伊、アルコレ(Arcole)の戦に自ら軍旗を捧げて陣頭に立ち、橋上を進んで大いにオーストリア軍を破つた(ヴェルサイユ博物館藏)

ナポレオンのエジプト遠征

第二回歐洲大同盟

統領政府の組織

を向はせた。そのうち第一第二兩軍ともドイツ方面でうち破られ、

獨りナポレオン・ボナパルトの率ゐる第三軍のみイタリアに進出し、

Napoleon Bonaparte

次いでオーストリアに攻め入り、同國をして地を割き和を講ぜしめるに至つた。

やがてナポレオンは英本國とインドとの交通を遮斷せんため、エジプトに

遠征し、忽ちにして全土を平げたが、その海軍

は、ネルソンの率ゐる英艦隊のため、アブキール灣内で破られた。



五 統領政府とナポレオン 當時イギリスは更めて第二回歐洲大

同盟を組織し、諸處にフランス軍をうち破つて、パリーの人心は大いに動搖し、ここに機敏なるナポレオンは本國に還つて總裁政府を倒し、新憲法を作つて統領政府を起し、自ら第一統領として全權を握つた。かくて共和政治は空名と化し、その實、武斷的君主政となつた。



第二章 ナポレオン一世

マレンゴの戦

ナポレオンは一八〇四年法王をパリに招いて、ノートルダムに戴冠式を行ひ、その際また皇后ジョゼフに親ら加冠した

ナポレオンの内治

ナポレオンの即位

●オーストリア征伐 やがてナポレオンは新政府を認めぬオーストリアに打撃を加へんが爲、自ら北イタリアを侵し、オーストリア軍をマレンゴに破り、別軍もドイツ方面から進撃し、遂にライン左岸の地を割かせて和を講じた。ついで英國とも和を講じ、互に侵地を還し、歐洲は一時平和を保つた。

●ナポレオンの内治と帝政 さてナポレオンは内政に意を用ひ、財政を整へ、教育をすすめ、産業を奨励し、法典を修め、民望を集めた。かくて彼は國民の總同意を得て帝位に即き、ナポレオン一世と稱し、イタリア王の位を兼ねた。



●ナポレオン (一七五八—一八〇五年)

トラファルガルの大海戦

●トラファルガルの大海戦 (タールナー筆) 正面の橋の下にネルソンが斃れてゐる

アウステルリッツの戦



ナポレオンの母 女を育成した。

レチチヤラモリノと云ひ、美にして嚴、家産乏しき中に多くの子

●ナポレオンの海陸攻戦 當時イギリスはヨーロッパ諸國を誘ひ、第三歐洲大同盟を結び、フランスを抑へようと計り、ナポレオンはイスパ

ニヤと結び、イギリスを伐たんとしたが佛西聯合艦隊はネルソンの爲、トラファ

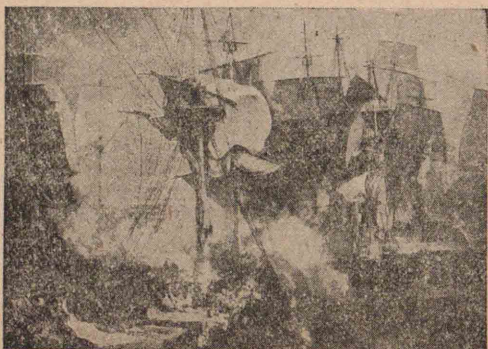
ルガル沖に大敗を招き、ナポレオンの希望は挫

折した。ここにナポレオンは軍を轉じオース

トリアを侵し、オーストリア・ロシヤ聯合軍をア

ウステルリッツに破り、オーストリアと和睦した。

●神聖ローマ帝國の瓦解 やがてナポレオ



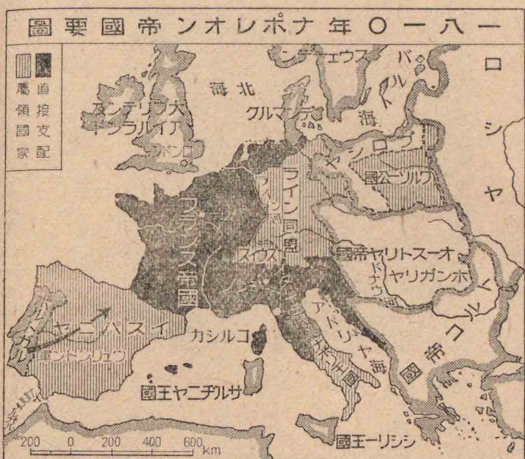


ライン同盟  
神聖ローマ帝國の  
滅亡(一八〇六年)

ンは西南ドイツに、彼自身を保護者とせるライン同盟を組織させ、ここに神聖ローマ帝フランシス二世は帝國の解散を宣して、單にオーストリア帝フランシス一世と稱した。  
The Confederation of the Rhine  
Francis II.  
(一八〇六年)

⑤ ナポレオン一世の盛運

プロシヤは久しく中立を守つたが、ナポレオンの暴狀に怒り、ロシヤと結び、フランスに宣戦した。そこでナポレオンは大兵を擧げ、プロシヤの首府ベルリンを取り、ついで東プロシヤに進んで、プロシヤ・ロシヤ聯合軍を破り、普露兩國の君主とチルジットに和を講じた。これより先、ナポレオンはベルリンで有名な大陸封鎖令を出し、大陸諸國のイギリスと通商するのをとどめた。  
(一八〇六年十一月)  
Continental System



ナポレオン帝のプロシヤ侵入  
大陸封鎖令

ナポレオンはイゼと  
その二子。年長  
の方は後のフレ  
デリック、ウイリ  
ヤム四世、年少  
の方は後のウイ  
リヤム一世帝  
(フレステラウ繪  
畫館藏)

ナポレオン、ハブ  
スブルグ家に娶る

ナポレオンのロシ  
ヤ遠征

⑥ ナポレオンの極盛

かくてナポレオン帝は大陸封鎖を守らざるポルトガルを撃ち、次いでイスパニヤを侵して舊王家を抑へ、己が兄ジョセフを王位に上らせた。更に帝は隙に乗じて起つたオーストリアを征してこれに勝ち、皇后ジョセフィンの繼嗣なきを理由にこれを廢し、オーストリアの皇女マリヤ・ルイザを娶つて家門の永續を計つた。かくてイギリス・トルコを除く殆ど全歐洲は帝の足下に跪いた。  
Josephine  
Marta Louisa

⑦ ナポレオンの衰運

その後、プロシヤは國內に統制なき爲、フランスに乗ぜられたのを悟り、王后ルイゼ(ルイゼの生める王子の一人は、後のドイツ帝ウイリヤム一世である)が國民の奮起を促し、名相スタインも内政を整へ、報復の擧に出でようとした。時にロシヤも大陸封鎖を破つたので、ナポレオンは大舉してこれを侵し、一旦莫斯科を奪つたが、大火と飢饉に惱み敗退した。この報  
(一八〇二年)





ライプチヒの戦  
(歐洲諸國民戰)

ブルボン朝再興

ウーロン公會

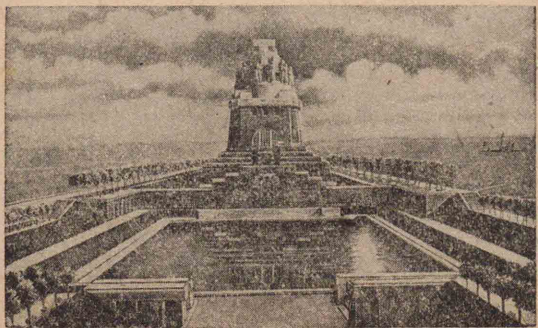
勝記念碑  
高さ九六米突

ワーテルローの戦  
ナポレオン、セン  
トヘレナに流さ  
る

が全歐に傳はつて第四回歐洲大同盟が出来、やがて同盟軍が大舉してフランス軍をライプチヒに破り、進んでパリを陥れ、ここにナポレオンは帝位を辭してエルバ島に流され、ルイ十八世(ルイ十六世の弟)が迎へられてフランス王となり、ブルボン朝が再興した。

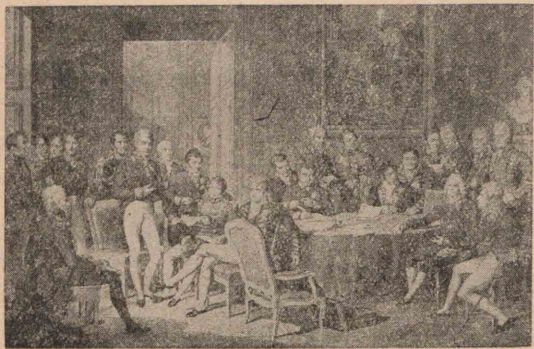
○百日天下とウーロン列國會議 一八一四年

歐洲列國が戦後の處置を議するため、ウーロンに公會を開いたが、諸國の利害が一致しなかつた。報を得たナポレオンは直ぐエルバを遁れてパリに還り、再び帝位に即いた。しかもイギリスのウーリントン將軍等が聯合軍を率ゐ、大いにナポレオンとワーテルローに戦つてこれを破り、ナポレオンは擒へられて、セントヘレナ島に流され、所謂ナポレオンの百日天下が終つた。



ウーロン條約要綱

ウーロン公會の光景  
前列向つて右より二人目タレーラン佛、中央椅子に倚るはカッスルリー(英)、左の中央に立つはワーテルニヒ



これより先、ナポレオンの再舉に驚いたウーロンの列國委員は、急に議事をまとめ、ウーロン條約を結び、オーストリアはネーデルランドを捨ててイタリヤ北部を得、プロシヤはサクソニヤ北半をとり、ドイツは三十五君主國、四自由市合して統制弱きドイツ聯邦を造り、ロシヤはポーランド一部を取り、オランダは舊埃領ネーデルランド(ベルギー)と合し、ネーデルランド王國を造り、スウェーデンはノルウェーを併せ、イギリスは戦役中取つたセイロン、ケープタウンを得、イタリヤは革命前通り諸小國分立に委せられた。

第三章 自由主義及び國民主義

第一節 自由主義國民主義と南米諸

國、ギリシヤの獨立



神聖同盟の成立と目的

① 神聖同盟 ウィーン會議後、ロシア帝アレクサンドル一世がオーストリア帝並にプロシヤ王と計つて神聖同盟を組織し、各國君主が何れもキリスト教の精神を體し、正義平和博愛を旨として兄弟のやうに親しみ、臣民を赤子のやうに愛しよ



Alexander I, Czar Holy Alliance

うと約し、戦を厭へる歐洲諸國の殆ど全部がこれに加はつた。オーストリアの宰相メッテルニヒはこの同盟を利用して國民統

圖解メッテルニヒ

一八〇九年以降一八四八年までオーストリアの宰相として歐洲外交の牛耳をとつた

メッテルニヒの干渉政策

圖解西歐男女の風俗

(自一八一八年至一八二二年)

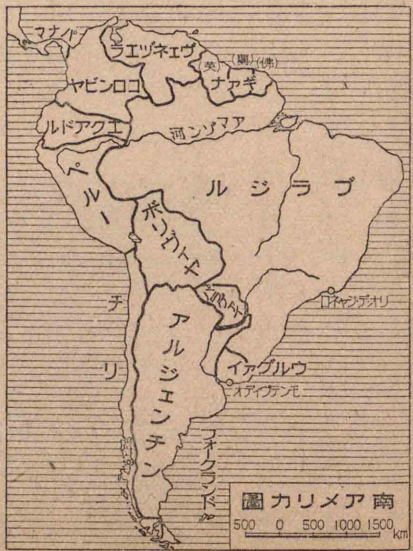
一 自由主義を抑へようと企て、一八一七年以降四箇年間に互つて、ドイツ・イタリヤ・イスパニヤに起つたこの種の運動に彈壓を加へた。

② 南米諸國の獨立 ナポレオン戰役前後中南



南米諸國獨立

米のイスパニヤ・ポルトガル植民地は自由主義の主張から續々と獨立し、メキシコ・チリ・ペルー・アルゼンチン諸共和國、ブラジル帝國等を創めるに至つたが、メッテルニヒは例の神聖同盟を利用して、武力で以て抑へようと計つた。しかも米國大統領モ



南カリメア圖 500 0 500 1000 1500 km

モンロー主義宣言

圖解バイロン (英國國民肖像畫館藏)

ギリシヤ獨立戰役の因由



ンローはイギリスの助を得て、モンロー主義の宣言を出し、メッテルニヒの干渉も力及ばずして止んだ。

③ ギリシヤ獨立 ギリシヤは國民主義・自由主義に刺激をうけ、人種・宗教を異にせるトルコに對し、獨立の旗を擧げ、詩人バイ



ナヴァリノの海戦

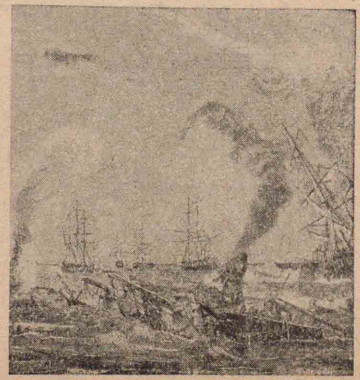
ギリシヤ獨立の承認

海戦

メッテルニヒ、海戦の報を得、十月二十日(海戦の日)の事件は歐洲に新時期を開いた」と歎じたが、それは神聖同盟の没落を悲しんだ言葉である

七月革命勃發

ロン(人)の如きも來り加はつた。トルコはエジプトの藩王メヘメット<sup>Mehemet Ali</sup>の援を得、頻りとギリシヤ軍を破つたが、ロシヤは神聖同盟の方針に背き、英佛二國と同盟してギリシヤを援け、遂に三國艦隊はナヴァリノの海戦にトルコ艦隊を破り、ロシヤの陸軍もトルコの首府に迫つて、一八二九年アドリヤノーブルの和議を<sup>(一八二七年)</sup>結び、ギリシヤの獨立を承認させるに至つた。



第二節 自由主義とフランス及

びイギリスの隆盛

●七月革命とその影響 フランスではルイ十八世歿後、王弟チャールス十世位に上り、極端な専制政治を行つて民権を抑へ、首相ポリニャックの説を用ひ議會を解散し、言論を妨げ、選舉權を制限した。爲にパリイ市民は激昂して暴動を起し、王はイギ

ルイフィリップ王即位

ベルギーの獨立

ルイフィリップの整政

二月革命の勃發

ルイナポレオン出づ(フランス第二共和政)

リスに脱れ、王族ルイフィリップが「フランス國民の王」となつた。所謂七月革命である。君臣の關係父子のその如きわが國體にこれを比すれば、眞に天地の相違である。今や自由主義の影響全歐に及び、特にポーランドはロシヤの支配を離れて、完全な獨立を得ようとし果さなかつた。なほネーデルランド王國で、北、オランダと南、ベルギーは人種、宗教等を異にする關係上、和合しなかつたが、七月革命の影響でベルギーが獨立を計り、遂にその目的を達し局外中立國となつた。<sup>(一八三〇年)</sup>

●二月革命とその影響 七月革命で王位に上つたルイフィリップは、最初巧みに平民風を裝うて有産者の援を得たが、後には次第に専制に傾き、遂に選舉法改正の示威運動に彈壓を加へ、これを機會にパリの暴民が一時に蜂起し、王は位を辭してイギリスに脱れ、共和政治が成立するに至つた。<sup>(一八四八年二月)</sup>これが所謂二月革命である。やがてナポレオン一世の甥ルイナポレオンが人民投票で大統領に選ばれた。<sup>(一八四八年十二月)</sup>



二月革命の影響

この革命の影響は忽ちにして全歐に波及し、中にもオーストリアでは自由主義者の暴動が起り、メッテルニヒが国外に逃れ、ハンガリアでは志士コッシュートが主となつて獨立を計り、遂に目的を果さずに止んだ。

ナポレオン三世とクリミア戦役

新に大統領となつたルイナ



ポレオンは、早くから帝位を望んで人望を收攬し、ついで武力で以て反對黨を抑へ、やがて國民の總投票に問うて帝位に上り、ナポレオン三世と稱した。

その後、ナポレオン帝は華々しき外交

クリミア戦役の原

ナポレオン三世の即位  
世  
父はナポレオン一世の弟ルイ・ボナパルト、母はジョゼフィーヌの女オルタンス Horace  
（一八〇八—一八七三年）  
ナポレオン三世

\* 天明孝皇永五年、その翌年米使ワリーが賀浦に来る。

セバストポールの包圍  
パリイ條約

ナポレオン三世帝の内治

に戦を開いた。そこでナポレオンはイギリスと相結びトルコを援

（一八五三年）

け、遠くクリミア半島に兵を出し、サルヂニヤの援兵をも併せ、セバス

トポール要塞に露軍を圍んでこれを陥れた。やがてナポレオンは

（一八五五年）

關係列國代表をパリイに集め、所謂パリイ條約を結び、（一）ロシヤはギ

リシヤ教徒保護の要求を捨て、（二）黒海を中立とし、露土兩國共にその

沿岸に武備を許さぬ定めとし、ロシヤ南下の希望が全く挫けた。

ナイチンゲール女史

クリミア戦役當初、英軍、軍需品少く、且つ傷病者看護の設備なく、將卒共に困しんだ。女史、特志看護婦を率ゐ、戦地に至り、看護に餘念なく、クリミヤの「天使」の名、一代に高まつた。

ナポレオン三世の内治

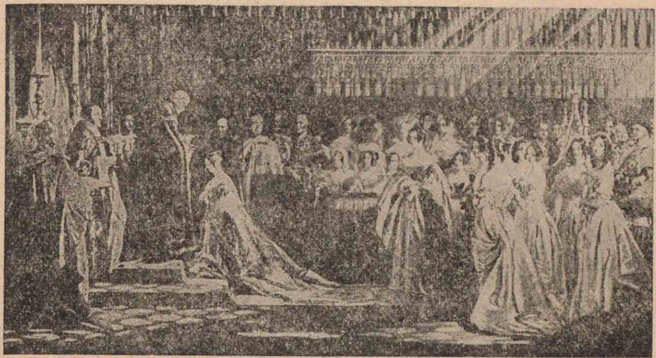
ナポレオンはまた内治にも意を注ぎ、

教育をすすめ、交通を便にし、パリイ及びその他の諸市の市區改正を行つて、文化的設備を完成し、更に産業を盛んにし、貿易を勵まし、前後二回の世界大博覽會を開いて國運の隆昌を示すに至つた。



産業革命  
もと英國に起つた産業革命は全歐に波及した一八三二年の選舉法改正

國 ヴクトリア女王、戴冠式後聖餐式に臨むの前、洗禮を受ける光景  
女王の前に立てるはカンタベリー大僧正、(ウエストミンスター) 寺院にて行はる) 莊嚴、嚴肅の觀、想見することが出来る  
スエズ運河株の買収  
アイルランド自治法案



### ⑤ イギリスの隆昌

十八世紀の後半期より、早くもイギリスで産業革命が行はれ、大工場組織の勃興と共に殷盛の大都市が起り、遂に一八三二年グレイ内閣は自由主義の見地に立つて人口少き腐敗選舉區を廢し、新興都市を選舉區に加へた。なほ世界大戦後普通選舉法が行はれ、女子にも參政權が與へられた。

一八三七年には、<sup>Victoria</sup> ヴクトリア女王が王位に即き、一八四六年穀物法を廢して下層民の困難を和らげ、後、<sup>Disraeli</sup> ディズレーリ内閣をしてスエズ運河株を買収させ、後年エジプトに力を展ぶる素因を示した。なほ女王治世の晩年グラッドストーン首相はアイルランド自治法案の完成に努力し、人道政治家として名を輝かすに至つた。

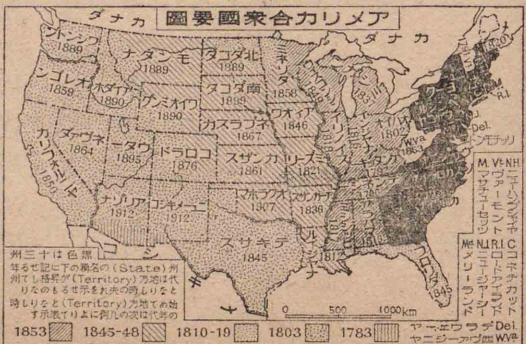
### 第三節 自由主義とアメリカ合衆國の隆運

#### 合衆國の隆運

① 合衆國の膨脹  
アメリカ合衆國は建國以來、領土擴張に餘念無く、フランスからルイジアナ、イスパニヤからフロリダ、<sup>Florida</sup> フロリダを買ひ、またメキシコと戦つて西方に領土を擴げ、獨立後六十餘年、早くも太平洋岸に出ることが出来た。

② 南北戦役  
合衆國の南北は國情を異にし、南部は奴隸を用ひ、盛んに農業を營み、北部は商工業に従つて、人道上、奴隸使用に反對し、特にストー夫人は小説を著

はし奴隸の慘狀を述べた。やがて一八六〇年、奴隸廢止論者のリンカーン大統領に選ばれ、ここに不平に驅られた南部諸州が分離を宣言し、新にアメリカ聯邦を造り都をリッチモンドに奠め、翌年遂に北部



アメリカ合衆國の發展

南北戦役の原因



南北戦役  
(一八六一—一八六五年)  
グラント將軍奮戦

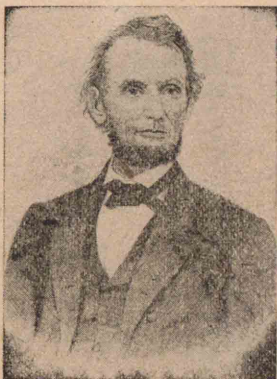
圖 諸州リンカーン大統領

(アメリカ第十  
六代大統領、一  
八六一—一八六  
五年在任) 一八  
四六年選ばれて  
下院議員とな  
り、遂に大統領  
の榮職にすすむ  
戦後に於けるア  
メリカの發展

英・佛・西三國の共  
同メキシコ出兵

諸州と戦を開き、ここに五年に互れる南北戦役となつた。初め南軍

The Civil War of America



Grant

よく戦つたが、北軍の將グラント奮戦して勝ち、遂にリッチモンドを陥れ戦争が止んだ。間もなくリンカーンが狙撃されて死んだが、戦争中彼の出した奴隷解放令が諸州に行はれて自由主義高潮し、南北の融合漸く完成した。戦後、アメリカに於ける工業の勃興は驚くべき位であり、石油石炭の採掘も愈々盛んに行はれ、交通の發達も比類なき位であつた。

● **モンロー主義の主張** メキシコ共和國は黨争烈しく、財政亂れ、一八六一年遂に外債の支拂を中止した。爲に債權國たる英・佛・西三國は共同に出兵して、損害賠償を約させ、英・西兩國は兵を引上げた。然るに佛帝ナポレオン三世は獨り兵をメキシコに止め、共和政を廢して帝政を布かせ、これをフランスの保護の下に置いた。しかも間

モンロー主義の強  
要

もなくアメリカ南北戦役が止み、合衆國はモンロー主義に基づいて嚴重にフランスに抗議し、ナポレオンは止むなくここに撤兵し、帝の威名は全く地に墜ちてしまつた。

#### 第四節 國民主義、自由主義とイタリア王國の建設

● **イタリア統一戦役** 中世以來、統一の無かつたイタリアは、ウィーン會議後も諸小邦に分れ、オーストリア等外國の干渉も屢々起つた。

サルヂニヤ王、Victor Emmanuel II

これを憂へて、イタリアの統一、自由を大成しようとし、賢相カヴールを用ひ政治に勵み、外、クリミヤ戦役に兵を出して、英・佛兩國の同情を得、遂に佛帝ナポレオン三世と密約を結



Cavour

んでフランスの援を得、オーストリアと戦を開いた。この戦に聯合

ヴィクトル・エマニュエル二世の大志  
圖 諸州カヴール  
(一八一〇—一八六一年)  
イタリア三傑の一人、實際的積極的政治家

イタリア統一戦役開始



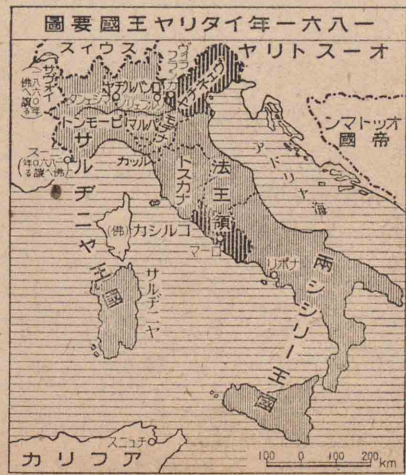
ソルフェリノの戦  
赤十字社の起り  
し次第を考へよ

軍はソルフェリノ等に大勝し、オーストリアをしてロンバルディアを割かせて講和した。  
Solferrino (一八五九年)

② 統一の進展とイタリア王国

ガリバルヂのナポリ攻略  
イタリア王国成立

がてエマニエール王はフランスの内諾を得、中部イタリア諸国民の希望を納れて、これを自國に併合し、更に法王領の大部を得、またガリバルヂの攻略せるナポリ王國を收めて、益々その勢を伸ばし、ここに境領ヴェネチヤ並に法王領を除くイタリア全土を併せ、遂に一八六一年イタリア王の位に即き、後四年、フロレンスに都を奠めた。  
Garibaldi (一八六〇年)  
Venezia  
Florence



圖要國王ヤリタイ年一六八一

イタリア統一の完成

一八七〇年ドイツフランス戦役の時、法王領を併せてローマを取り、法王との關係を規定して都をここに遷し、統一の業始めてここに完成した。  
(一八七〇年)

第五節 國民主義とドイツ帝國の發展

① プロシヤの雄圖とプロシヤ・オーストリア戦役

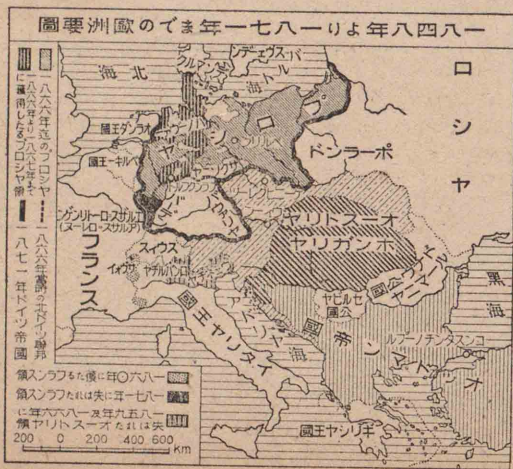
ドイツ聯邦はその統制が薄弱で、國民統一の必要が叫ばれるやうになつた。かくて十九世紀初め、プロシヤが首腦となつて關稅同盟を組織し、一種の經濟的統一を試み、次第に政治的統一の傾向を生じた。やがてウィリアム一世がプロシヤ王となるや、プロシヤ自ら

關稅同盟

ウィリアム一世  
プロシヤ王となる

Prussia

William I



圖要洲歐のてま年一七八一りよ年八四八一



ビスマルク、プロシヤの宰相となる

世

フレデリック三世

ウイリヤム三世の子

の攝政

年攝政

一八八八年

プロシヤ王

一八七一年

八七年

八年

シュレスウイヒ

ホルスタイン問題

プロシヤ・オース

トリヤ戦役(七週

間戦役)

(一八六六年)

相

北ドイツ聯邦成立

一八七一年

ドイツ・フランス

戦役(一八七〇-

一八七一年)

パリ

の包圍

の完成

外交の失敗に悩める佛帝

ナポレオン三世は、プロシヤのオーストリヤを破つて、勢盛んなのを

恐れ、ビスマルクも亦、ドイツ統一完成のため、フランスを屈する必要

ありと考へ、兩國の關係が險惡となつた。かくてイスパニヤ王位繼

承問題につき兩國の意見の衝突するや、遂に戦端を開くに至つた。

所謂ドイツ・フランス戦役である。

この戦にプロシヤはドイツ諸邦の援を得、モルトケ將軍の巧妙な

作戦によつてフランスに侵入し、メッツの要塞を圍み、またセダンにナ

ポレオン帝を圍んでこれを降し、進んでパリを包圍した。その間

帝政が廢されて共和假政府が出来、パリは防戦四月、食盡きて開城

中心となつてオーストリヤを斥け、以てドイツの統一を成さうと企て、先づビスマルクを宰相とし、モルトケを參謀總長に擢んで、議會の

Bismarck

Moltke

スキ



反對にも屈せず、斷然軍備を擴張し、密かに機會の至るを待つた。偶さきにデンマルクから奪つたシュレスウイヒ、ホルスタインの處分につき、普墺兩國間に紛議を生じ、一八六六年プロシヤは遂にオーストリヤに戦

Schleswig

Holstein

Denmark

を宣した。この時プロシヤは盟邦イタリヤと相應じて敵に迫り、遂にケーニヒグレートに戦つて大勝を得、

Königsberg

Prague

オーストリヤ屈して、ブラーグ條約を結

び、シュレスウイヒ、ホルスタインをプロシヤ

に割いて自ら聯邦を離れ、更にヴェネチヤ

を割いてイタリヤに與へた。

戦後プロシヤは自ら盟主となつて北ドイツ聯邦をつくり、南ドイ



ツ諸邦とも同盟を結び、オーストリヤはホンガリヤを獨立させて、これと二元君主國をつくつた。

North German Confederation

戦後プロシヤは自ら盟主となつて北ドイツ聯邦をつくり、南ドイ

二ドイツ・フランス戦役と帝國の完成

外交の失敗に悩める佛帝

ナポレオン三世は、プロシヤのオーストリヤを破つて、勢盛んなのを

恐れ、ビスマルクも亦、ドイツ統一完成のため、フランスを屈する必要

ありと考へ、兩國の關係が險惡となつた。かくてイスパニヤ王位繼

承問題につき兩國の意見の衝突するや、遂に戦端を開くに至つた。

所謂ドイツ・フランス戦役である。

この戦にプロシヤはドイツ諸邦の援を得、モルトケ將軍の巧妙な

作戦によつてフランスに侵入し、メッツの要塞を圍み、またセダンにナ

ポレオン帝を圍んでこれを降し、進んでパリを包圍した。その間

帝政が廢されて共和假政府が出来、パリは防戦四月、食盡きて開城

を圍んでこれを降し、進んでパリを包圍した。その間

帝政が廢されて共和假政府が出来、パリは防戦四月、食盡きて開城

を圍んでこれを降し、進んでパリを包圍した。その間

帝政が廢されて共和假政府が出来、パリは防戦四月、食盡きて開城



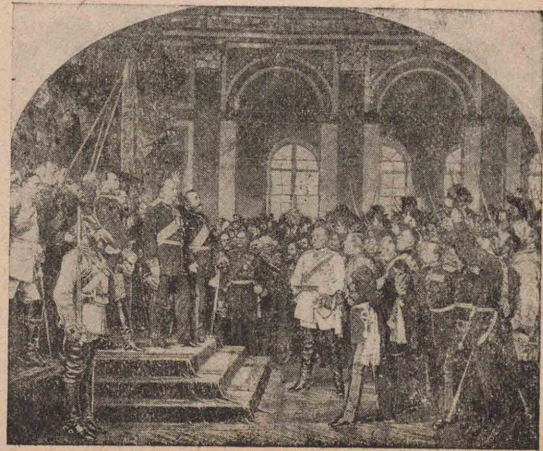
ヴェルサイユ假條約

國威ウィリヤム一世ドイツ皇帝即位式  
壇上中央に立つはウィリヤム一世壇下ビスマルク・モルトケの兩功臣立つ。王に向つて右側右手を舉げて萬歳を呼ばふはバーテン太公フレデリック

ドイツ帝國の成立

ドイツの進展

し、チエールがビスマルクとヴェルサイユ(一八七一年一月)に會して假條約を結び、ついでフランクフルトでこれを確認し、フランスは償金五十億フランを出し、エルザス(Alsace)、ローリンゲン(Lorraine)を割いて和を講じた。これより先、ウィリヤム一世はドイツ諸邦の望を納れ、ヴェルサイユ宮殿に於てドイツ皇帝の位に即き、ついで憲法が定められ、プロシヤ王はドイツ皇帝の位を世襲して帝國の大權を統べ、聯邦議會と帝國議會が立法を掌ることとなつた。なほビスマルクは帝國最初の宰相として内政・外交の刷新に任じ、産業をすすめ、通商を盛んにし、植民地を開き、更に同盟に依つて外交の基礎を固め、國力日に隆盛に赴いた。



九六

ロシヤの南進

トルコの暴政

ロシヤ・トルコ戰役(一八七七年—一八七八年)

サンステファノ條約

第六節 國民主義とロシヤ帝國の進展

●ロシヤ・トルコ戰役　ロシヤはバルカン半島なるスラヴ族を併せて大國民主義に基く大スラヴ帝國を造らうとし、密かに南下の機を窺つてゐた。當時トルコは弊政の結果、人民は疲れ、財政は亂れ、殊にトルコの回教徒はギリシヤ教を奉ずるスラヴ族を壓することが甚だしく、同族の居る諸地方に叛亂が起つた。そこでロシヤは英獨、埃諸國と相携へて内政改革をトルコに迫つた。然るにトルコに何等の誠意が認められなかつたので、ここにロシヤはキリスト教保護を名として、斷然トルコに宣戰した。やがてロシヤ軍はドナウ河を越え、トルコの勇將オスマン・パシヤの守れるプレヴナ要塞を抜き、勢に乗じてコンスタンチノーブルに迫らうとし、ここにトルコはロシヤとサンステファノ條約を結び、バルカ



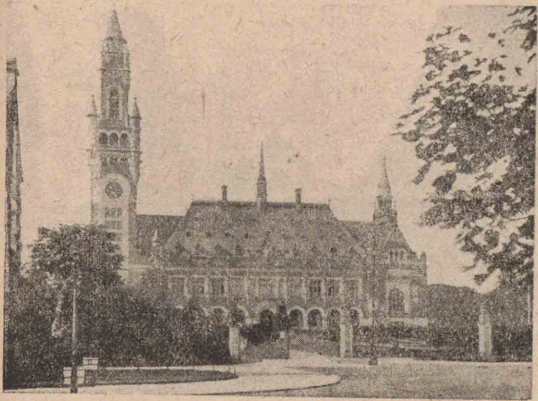




ロマンチック主義  
と尙古主義

帝國主義

圖 海グの平和  
堂  
一九〇七—一九  
一三年創立。こ  
の建設に際し米  
國のカーネギー  
は百五十萬弗を  
寄附した。通例、  
平和會議の會場  
に使用されてゐ  
る



純理に従はんとし、これが反動として十八世紀から十九世紀にかけ、  
歴史、理想感情を主とする理想主義、將たロマンチック主義更に合理的  
功利的なるも精神生活をも重んずる尙古主義の勃興となつた。歴  
史を重んずるロマンチックの影響は民族主義、國家主義また帝國主義  
をひき起すに至つた。次に尙古主義の功  
利的なることが世界的傾向を馴致し、ここ  
に國際協調主義を生むに至つた。一八六  
四年に出來た萬國赤十字同盟、一八九九年  
一九〇七年オランダ、ハーグに開かれた萬  
國平和會議の如きは、國際協調の明かな現  
はれである。諸種の萬國學術會議、萬國郵  
便聯合、萬國電信聯合、また世界大博覽會の  
Postal Union, International Telegraph Union, International Exhibition  
如きも、國際協調に立つて、人類の幸福を計

社會主義

實證主義

自然主義

科學の進展

圖 ダーウ  
ン  
(一八〇九—  
一八八二年)



れるものである。次に啓蒙主義や尙古主義に影響された所謂自由  
主義は、國家主義と相結んで立憲主義を盛んにし、また普通選舉や婦  
人參政權の叫びをかため、更に産業革命後の労働問題を解決せんた  
め、自由民主主義から社會主義への發展を示し、ドイツのカール・マル  
クスKarl Marxの如き人物も出た。なほ啓蒙尙古兩主義の合理的傾向から、實  
證主義Positivism、現實主義Realismを誘致し、ひいて科學の振興を促し、思想界を風靡し  
た物質主義、自然主義もその一端の現はれである。なほこれに對す  
る反動が新理想主義の名によつて知られてゐる。  
(十九世紀後半)

② 科學とその應用 十九世紀以降現實

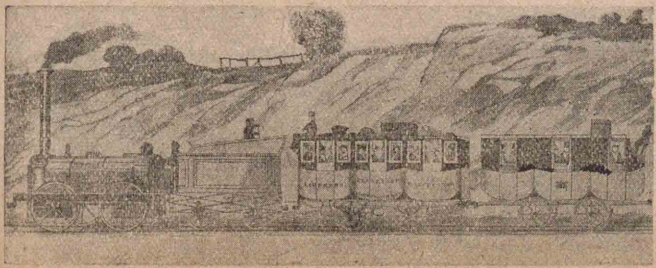
主義の影響から、科學は長足の進歩をなし、  
天文學、數學、物理學、化學、醫學、動物學等何れ  
も著しき進歩を遂げ、中に、イギリスのダー  
ウインの進化論、ドイツのマイエル・ヘルムホ  
フDarwin, Meyer, Helmholtz



汽車・汽船の發明

ルツの勢力不滅説、また遙に後のアインスタインの相對性原理の如き、學界に及ぼせる影響は大である。科學應用の發明では、蒸氣力利用にかかるアメリカ人フルトンの汽船、イギリス人スチヴンソンの汽車、電氣の利用から生れた米人モースの電信機、エヂソンの電燈、イタリヤ人マルコニの無線電信、英人グラハム・ベルの電話、また現代のラチオの如き、特に注目に値する。ガソリン・モーターの利用は、現代盛んに起り、自動車・飛行機・飛行船の發明は、軍事上、大なる影響がある。その他ドイツ人レントゲンのX放射線、細菌學者コッホの血清療法、佛人キエリーが夫人と共に發見せるラヂウムの如き、醫術の進歩を示すこと大に、地理的探檢ではノルウェー人アムンゼンの南極探檢殊に注目に値する。

船スチヴンソン發明の初期の汽車



交通通信機の進歩

醫術の進歩

理想主義哲學  
史界の泰斗

◎哲學・文藝

哲學では十九世紀に、ドイツのフイヒテ・ヘーゲル等がカント後に出で、理想主義哲學を大成し、フランスにコントが出て、實證的哲學を創めた。史學ではドイツ人ランケが、科學的研究を大成し、史界の泰斗と稱せられてゐる。文學では十九世紀にバイロン・スコット・カーライル等が英國に出で、ハイネはドイツに、ユーゴーはフランスに出で、共にロマンチック派の文豪と呼ばれ、更に十九世紀の中頃以後、自然主義の文學が盛んとなり、フランスのゾラ、ロシアのトルストイ、ノルウェーのイブセン等がその名聲を稱せられてゐる。

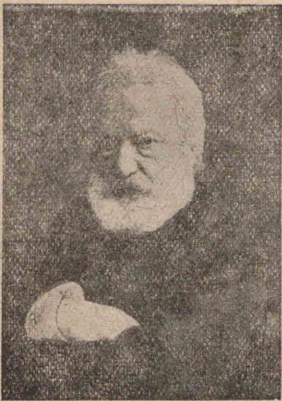
蘭ケ

(一七九五—一八八六年)

ロマンチック派の文豪

自然主義の文學

國 ユーゴー  
(一八〇二—一八八五年)



れ、更に十九世紀の中頃以後、自然主義の文學が盛んとなり、フランスのゾラ、ロシアのトルストイ、ノルウェーのイブセン等がその名聲を稱せられてゐる。繪畫では十九世紀にフランスに出たデ

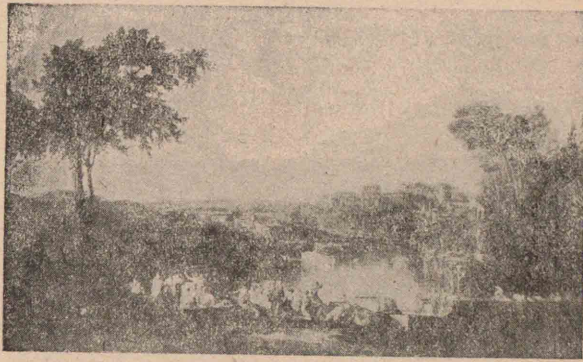




ロマンチック派及び古典派の繪畫

自然派の父

圖 國ウイリヤム・ターナー (William Turner 1775-1851) は英國印象派の畫家。ここに掲ぐるはその傑作「チドー及びイーネアス (Dido and Aeneas)」である。トロイ亡命の將イエネアスがカルタゴ海岸に漂流して女王チドーと會ひ見るところである。



ラクローア・コロはロマンチック派の名手であり、同じくフランスのダヴィッドは古典派(尙古派)の巨匠として知られてゐる。

またフランスのミレーは十九世紀に出て、自然派の父と呼ばれ、フランスのマネー、イギリスのターナーは印象派(自然科学の實證的傾向に端を發する)の大家と稱せられ、彫刻界の天才ロダンも現世紀の初め、フランスに出で、同じく印象派の名匠として知られてゐる。

第五編 現代史

第一章 列強の世界政策

國家主義の發展

● 帝國主義の發展

十九世紀後半以降、歐洲列強の國家主義が頗る發展し、列國競うて國力充實、軍備擴張を計り、なほ各國何れも急激な人口増加を示し、その經濟組織が著しく變化して、生産力増大せる結果、列國競うて原料を海外に求め、新市場を世界各方面に開くの必要に迫られ、ここに國權の弱きところ、所有權の確實ならぬところ、努めてこれを求めて經營し、屬領或は保護國となし、またその經濟的利權を得んとした。所謂世界政策、一に帝國主義と云ふものである。

● 列強のアフリカ經營

アフリカはもと「暗黒の大陸」と稱せられ、列國の顧みるところとならなかつたが、十九世紀後半に、英人リヴィン

世界政策(帝國主義)

暗黒大陸の探検











西米戦役  
(一八九八年)

圖 羅斯福大統領  
ト大統領  
第二十六代大統領  
(一九〇一年  
就任—一九〇九  
年辞任)  
パナマ運河の開通



マッキンリー大統領時代、キューバの叛亂に干與して、イスパニヤに戦を  
Mackinley Cuba

開き、キューバを保護國とし、フィリピン群島を得、更にハワイ王國の内亂を利用してこれを奪ひ、着々太平洋上に根據を固めた。やがて米國は大統領ルーズヴェルトの時、パナマ運河の開鑿を企て、一九一四年遂に完成し、運河支配權を收めて、太平洋大西兩洋上に雄視することとなつた。

ヴィクトリヤ女王、  
インド女皇となる

④ 列強のアジヤ經營 (イ英國 東インド會社による英國のインド經營は十九世紀に至つてその大半を經略し、一八五七年、モガール帝國をうち滅ぼし、翌年、本國政府が會社に代つてインドを統治し、一八七七年、ヴィクトリヤ女王がインド女皇の位を兼ね、總督を置いて政務を行はせた。かくてインドは英國の寶庫として重要な地位を占め、西はベルチスタンを保護國として露の南下を抑へ、東はバルマを併

Baluchistan

Burma

シンガポールの占領

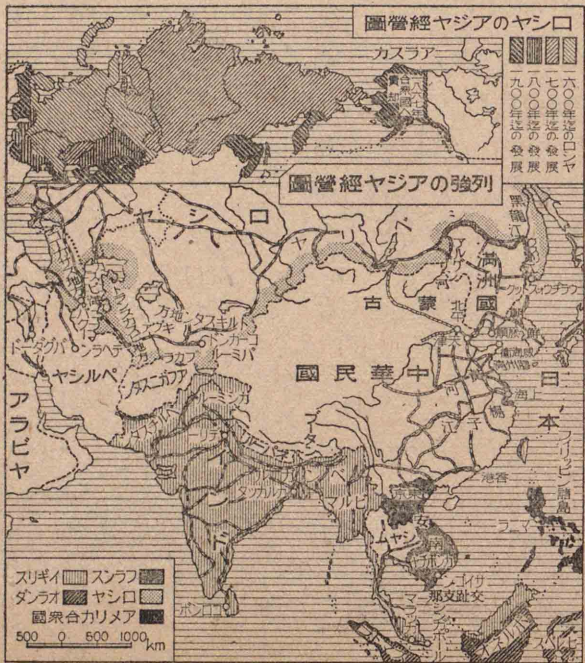
Singapore

Malacca

英國の帝國主義

ロシアの南下

せて佛の西侵に備へた。更に英國はシンガポールをとり、マラッカを得、太平、印度兩洋の關門を扼し、遂に支那に出で香港をとり、威海衛を租借し、英國の帝國主義はアジヤの南方から北に向つて一大飛躍を試みんとするやうになつた。(ロ)ロシア ロシヤは十九世紀の後半盛んにアジヤに活動し、中央アジアに進出して、インドに於けるイギリスの利權を脅かし、東シベリヤより南下して、黒龍江方面に力を展べ、更に北滿の地より南に下つて朝鮮を脅かし、ひいて新





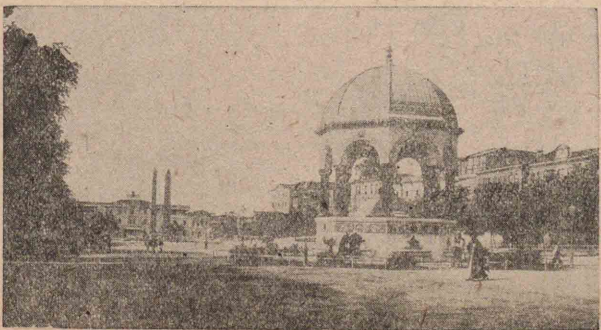
日露戦役  
(一九〇四—  
一九〇五年)

佛のインド支那經  
營

國一八九八年ト  
ルコ懐柔の目的  
からコンスタン  
チノープルを訪  
問した獨帝ウイ  
リヤム二世は、  
訪問の記念とし  
て八角形の旗亭  
を造り、これを  
トルコ帝の贈つ  
た天井の四周  
にはW IIといふ  
己が名の略字と  
トルコの帝冠を  
交錯して表出  
し、亭内には噴  
泉數條を造らし  
てゐる

ドイツの三B政策

興日本の國防線を危くし、ここに日本は露の南下を恐れる英國と接  
近して日英同盟を結び、遂にロシヤと戦つて大勝を博した。(一)佛國  
フランスは露の極東政策を援けつつ、自らインド支那の侵略に従  
事し、安南よりサイゴン、Saigon コーチ支那をとり、遂に  
カンボヂヤ及び安南を保護國とし、更に北に出  
Cambodia 清國から廣州灣を租借するに至つた。(二)下  
ドイツは國內の統一既に終つて、ウイリヤ  
ム二世の時から着々世界政策を行ひ、遂に清國  
から膠州灣を租借し、更に三B政策をとつて、ト  
ルコを懐柔し、Balkan ベルリンから、Bagdad コンスタンチノー  
プル(ビザンチウム)を経て、Bagdad バグダードに鐵道を敷設し、  
やがて英國のインドに於ける利權を脅かさん  
とするに至つた。



## 第二章 世界大戦(一)

### ● 國際關係の變動

ドイツ・フランス戦役後、ドイツはビスマルク  
の政略に従ひ、フランスの復讐戦に備ふるため、先づオーストリアと  
同盟し、次いでチニスを取られて不平を懐けるイタリヤ  
を誘ひて同盟に加へ、一八八二年、所謂獨逸・伊の三國同盟が成立した。  
よつてフランスはロシヤと相結んで、所謂二國同盟を組織し、三國同  
盟に對立した。しかもこれらの二大同盟に對して英國は、強大な海  
權に護られて、よく「名譽の孤立」を守り、十九世紀末以降二十世紀の初  
めにかけて、ヨーロッパの平和は、これら三大勢力平均の上に、辛うじて維  
持された。然るにその後、ドイツの海權が擴大され、産業は急激に發  
展し、英國の地位が著しく脅かされ、ここに英王エドワード七世は、所  
謂「ドイツ包圍策」によつて先づ佛國に近づき、日露戦後にロシヤとも

三國同盟と二國同  
盟

名譽の孤立

エドワード七世の  
ドイツ包圍策



三國協商の成立

■エドワード七世王  
ヴィクトリヤ女皇の子。ジョージ五世の父。  
(一九〇一年—一九一〇年在位)



があつた。

### 二大民主主義の衝突

十九世紀以後、總スラヴ主義、總ゲルマン主義の二大民主主義が對立し、前者はロシアが主となつてスラヴ種族の諸國を聯ね、自らの權力をうち立てようとし、後者は獨塊二國が主となつて、ゲルマン諸國を併せ、その勢力を發展させようとし、常に統制の無いバルカン方面で、互に死力を盡して争つたのである。されば青年トルコ黨の改革もその效無く、トルコの國力は日に衰へ、

Panslavism

Pangermanism

Balkan

Young Turkey Party

ブルガリヤの獨立宣言

イタリヤ・トルコ戰役(一九一二年)

第一バルカン戰役(一九一二年—一九一三年)

遂に一九〇八年オーストリアに親しきブルガリヤが獨立を宣言し、獨塊自らもボスニア・ヘルツェゴヴィナの併合を公にした。これ實に總ゲルマン主義の勝利であつたのである。その後一九一一年イタリヤがトルコの衰弱に乗じ、その領トリポリを奪はんとトルコに戰を開いたが、かねて機會を窺つてゐたセルビヤ・ブルガリヤ・モンテネグロ・ギリシヤ四國もこのトルコの難儀に乗じ、それぞれ自領を擴げんと、一九一二年同盟してトルコに戰を宣した。ここにトルコは止むなく、イタリヤにトリポリを割き、力を専らにして四國に當つたが戰敗れ、一九一三年多くの地を割いて和を講じた。トルコは元來ドイツの盟邦であるから、この戰に敗れたのは取りも直さず、總

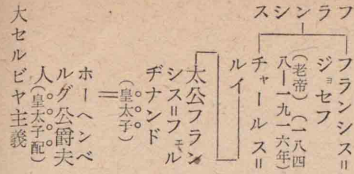




第二バルカン戦役  
(一九一三年)

ブカレスト和議  
(一九一三年)

妻 皇國皇太子夫



ゲルマン主義への打撃であつた。然るに割譲地の分配から同盟四國の間に争を生じ、ブルガリヤの要求が過大であるとして、他の三國がこれを討ち、ルーマニヤもこれに加はり、ブルガリヤは遂に屈して、一九一三年ブカレストの和を結んだが、聯合四國(セルビヤ、モンテネグロ、ギリシヤ、ルーマニヤ)は何れもその領土を増し、ブルガリヤのみは前戦役の所得を大いに減殺された。このこともオーストリアに親しいブルガリヤの失敗であつたので、同じく總ゲルマン主義の敗北であつた。かくバルカンを



中心とせる二大民族主義の争が續いたので、兩者の不和は益加はり來つた。  
 ③ サライエヴォの暗殺と大戦の勃發  
 セルビヤはその同じ民族(スラヴ系)の居住する諸地方を併せて、大セルビヤを建設し、以て總スラヴ主義の先鋒

\* わが三大正年當る。

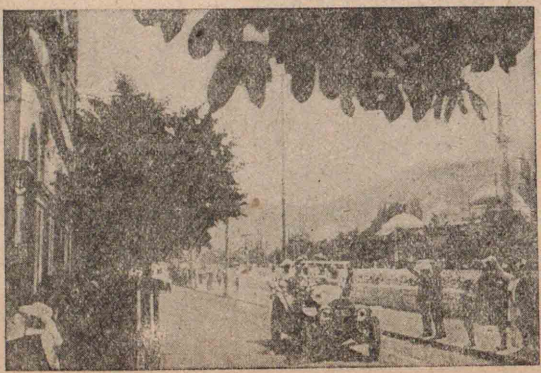
世界大戦の遠因を總説せよ

サライエヴォの兇變

圖一九一四年六月二十八日、皇太子夫妻遭難前數秒の撮影(ウィーン陸軍博物館藏)

世界大戦の勃發

となる考であつたが、オーストリアは事毎にその行動を妨げ、特にボスニヤ・ヘルツェゴヴィナを取つて、セルビヤの發展を阻止したので、奥國に對する反感は大いに高まつた。偶一九一四年六月、奥國皇太子フランドチナンド太公夫妻がボスニヤのサライエヴォで、大セルビヤ主義の青年に暗殺され、爲に奥國はセルビヤに最後通牒を送つて嚴重に詰問し、遂に兩國間の平和が破れ、(七)ロシヤは總スラヴ主義の關係でセルビヤを援けんとし、ドイツは三國同盟と總ゲルマン主義の關係から奥國を援け、ロシヤに戰を宣し、フランスも亦三國協定の關係と、往年の敗戦に報復せんため、ドイツに戰を宣した。やがてドイツがベルギーの中立を破つて、フランスに兵を進めようとしたので、





日本の對獨宣戰

圖 關カイゼル、ウィリヤム二世とその幕僚

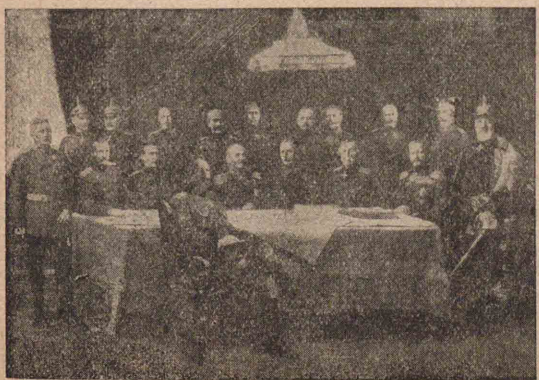
卓の此方に座せるはウリヤム二世帝、卓の彼方に座せるは向つて右からチルピッツ、ヒンデンブルグ、モルトケ、立てるものにて右より二人目ベイトマン、ホルウエヒ、ドイツ軍のベルギー中立侵犯

マルヌ河の戰

イギリスはその不信を咎めてドイツと開戦し、以て三國協商に對する義務を全うし、我が國も亦、東洋平和のため、且つ日英同盟の誼のため、ドイツに戰を宣し、千古未曾有の世界大戰はかくして始まつたのである。  
(一九一四年八月)  
The World-wide War

### 第三章 世界大戰(二)

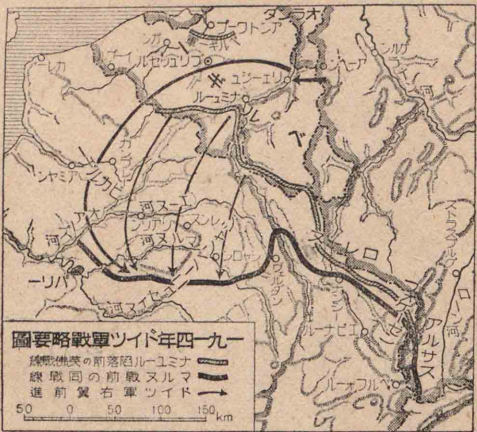
●一九一四年戰 開戰當初、ドイツは先づフランスを一舉に粉碎し、直ちに軍を還してロシアに當るの策戰をとり、一九一四年八月ベルギーの中立を犯し、その抵抗を排してフランスに入り、疾風の如くパリに向つて前進したが、佛の名將ジョッフルの率ゐる英佛聯合軍のため、マルヌ河の一戰に敗れ、退いて



露軍のガリチヤ侵入

タンネンベルグ激戰

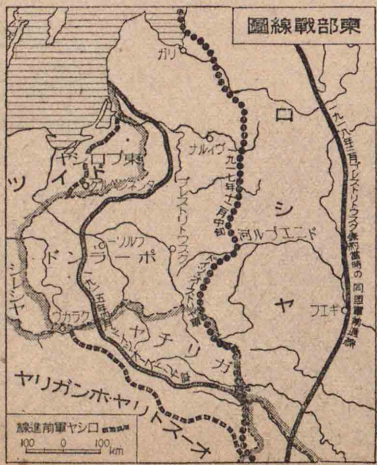
ドイツ軍のポーランド占領



陣地を固め、ここに持久戰の姿をとるに至つた。この間東方では一時、露軍が優勢を示し、奥領ガリチヤを侵し、その別軍はまた東プロシヤを攻めたが、ドイツの名將ヒンデンブルグはこれをタンネンベルグに破り、(八月)士氣大いに振ひ、更に奥軍を援けてガリチヤを復し、ポーランドに攻め込んだ。

### ●一九一五六年戰 一九一五年、ドイツ軍は進んでロシア軍を破り、ポーランドを占領し、また三國同盟にありながら、密かに形勢を窺つてゐたイタ

リヤが、密かに形勢を窺つてゐたイタ





イタリヤの参戦

聯合艦隊ダーダネルス海峽砲撃

リヤは、斷然聯合側(協商側)に加はつて、オーストリアに戦を開いた。しかもバルカンのブルガリヤは奮起して同盟側(獨逸側)を援け、共にセルビヤを占領して戦の前途に大變化を與へた。この間英佛聯合艦隊は大舉してダーダネルス海峽に迫り、さきに同盟側に應じたトルコを攻撃したが、目的を果さなかつた。さて一九一六年ドイツは海陸包圍の難境にあつて、戦の永びくのを恐れ、主力を西部戦線に集めて、ヴェルダン要塞に猛襲を試みたが、佛軍の抵抗は頑強にして、防戦すること數箇月、遂に敵を撃退した。なほバルカンのルーマニアも聯合側に應じ兵を擧げたが、ドイツ、ブルガリヤ兩軍これを攻め、その半ばを占領した。海軍に於て聯合側は常に同盟側を壓し、五月、英獨兩艦隊ユトランド沖に戦を交へ、始め英

ヴェルダン要塞戦

の戦

Verdun

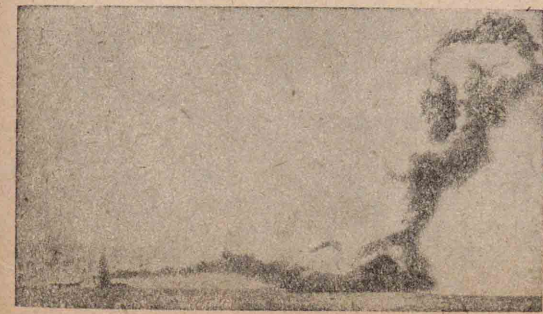
ユトランド沖の戦

英艦グリンビリー爆發の光景

ユトランド沖の大海戦

ユトランド沖の大海戦

國側が大なる損害を受けたが、後には敵艦隊に損傷を與へて退却させ、これを北海に封鎖して制海權を收め、逐次ドイツの植民地を攻略するに至つた。



ドイツ植民地攻略

無制限潜水艇戦

一九一七八年戦

一九一七年二月、ドイツは英國の海上封鎖に對する報復として、無制限潜水艇戦を開始し、従前よりドイツの潜水艇に悩んだ米國が、ここに斷然ドイツに戦を宣し、聯合側に参加し(四月)諸邦のこれに倣ひてドイツと交を斷つものが續出した。しかもこれより先、三月、ロシアに革命が起つて、聯合側に不測の禍をもたらし

無制限潜水艇戦

ロシア三月革命 (ロマノフ朝仆る)

た。ロシアはかねてから、階級民族上の不平に充ち、自由民主主義が極端に走つてゐたが、大戦のため生計困難となり、官僚の腐敗も暴露し、遂に革命が起つて、ニコラス二世が退位し、ロマノフ家三百年の帝政が仆れて、一時假共和政府が起つた。やがて十一月に過激黨の領袖レニン、トロツキー等が假政府を仆して、共產主義のソヴェト政府

ロシア十一月革命

Lenin Trotsky

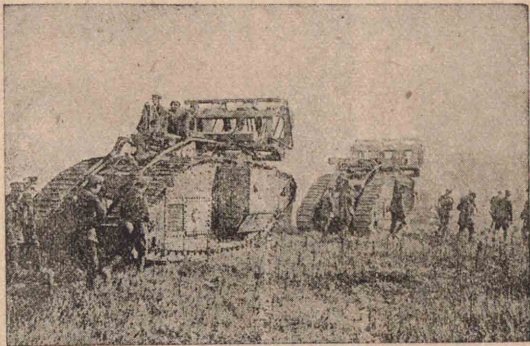


ブレストリトウ  
スク單獨條約  
(一九一八年)

英國イギリス、タ  
ンク隊の活動  
「タンク」は大戦  
に始めて用ひら  
れた新武器

フレンシ、將軍進撃  
を令す

ドイツの革命



を立て、ドイツとブレストリトウスクに單獨條約を結び、ルーマニヤはここに孤立して同盟側と和するの止むなきに至つた。ロシヤの屈服に力を得たドイツ軍は、一九一八年三月大舉して西部戦線に猛撃を加へたが、英佛軍はアメリカの精銳を併せて名將フオッシュの下に統制され、獨軍の攻勢衰ふるをまつて、却つて攻勢に轉じ、全線に涉つて進撃した(九)。かくてバルカンの形勢に動搖を生じ、ブルガリヤトルコが相次いで屈服し、次いでオーストリアも休戦し、ハプスブルグ朝が仆れて共和制が起つた。ドイツも兵員補充の困難と革命思想の勃興から、十一月、ウイリヤム二世帝(ホーエンツォルン家)が退位し、共和政府が起つて、十一月十一日の休戦となつた。

### 第四章 世界大戦(三)

#### ●大戦の結果

世界大戦はその参加國數よりせば三十二國、參戰の兵數は約六千八百萬、兵の損失は約三千三百萬、戦費三千餘億圓、しかも新銳の銃砲、航空機、戦車、潜水艇等を利用して、約四箇年、半に互り力を競うた。眞に有史以來の大活劇といひ得る。かくて戦後、平和欲求の念が頻りに昂ツカまつたが、これと同時に發展の機を得た民族自決主義、國家主義が高調され、且つその實現を見るに至つたのは、見脱すべからざる事實である。



凱旋の  
パリ、凱旋の  
フレンシ、  
ル兩將軍  
先頭の兩將軍  
中、向つて右  
シラブル左フ  
シ

大戦の總決算

#### ●講和條約の大綱

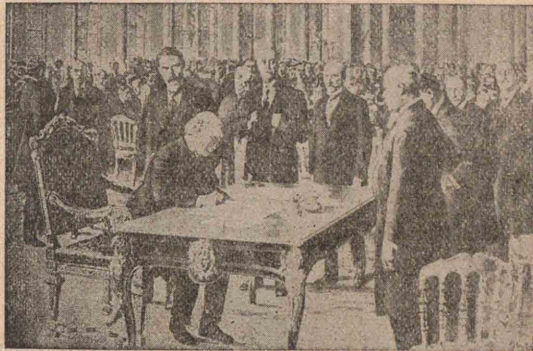
對獨休戦の成立後、一九一九年一月から聯合諸國代表が、パリに集まつて講和條約案を作り、六月にはドイツ全

パリ講和條約案



ヴェルサイユ條約  
調印

圖 國 際 連 盟 條 約 調 印 光 景  
今、署名してゐるのは英のロイド・ジョージである。この時、日本からは西園寺侯爵等が参列す。その後わが國は世界列強の先頭に立つて活動す



投票により、ドイツ・ポーランドの間に所屬を決する。(三)北シレスウィヒも同じく人民投票で、ドイツ・デンマルクの間に所屬を定める。(四)ドイツは國際聯盟に對し、ザール流域の施政權を放棄し、同流域にある炭鑛はフランスに讓與す。但し條約實施後、十五箇年を経て、概地

ヴェルサイユ條約及び、その他諸條約の要項

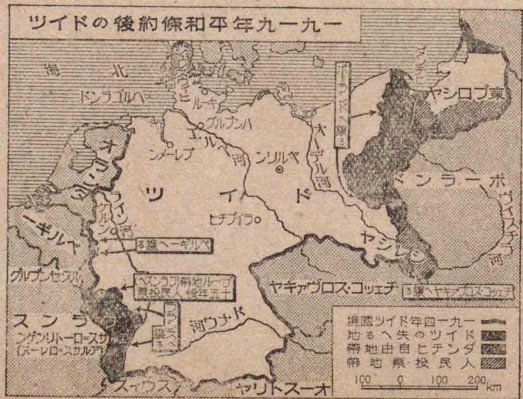
ザール流域の放棄

委任統治

オーストリアの崩壊

國際聯盟と平和主義

の住民をして人民投票によりその所屬を決せしめる。(五)ドイツは賠償の責に任ずる(金額は將來の賠償委員會が定める)。(六)ドイツは陸海軍を著しく制限され、且つ海外領土の全部を失ひ、これらは聯合側諸國の委任統治となる。(七)オーストリアは分解して、奥匈兩國及びチエッコ・スロヴァキア、セルブ・クロアチア・スロヴェニア(もとのセルビヤ等も加はつてゐる)の四箇の國家となり、ロシヤの崩壊によつて、フィンランド、エストニア等諸國が生れ、(八)オーストリアはまた、イタリヤ、ルーマニヤ等に地を割き、(九)トルコもギリシヤ、イタリヤに地を與へて、その領土概ねコンスタンチノーブルと小アジアに限られ、(十)なほ國際聯盟の成立によつて、今後、戰爭の起る





を妨げ、世界の平和を維持すると云ふのである。

### 第五章 大戦後の列國の形勢

巨額のドイツ賠償金

ルール地方の占領

ドーズ案

●ドイツ賠償問題の紛議 ヴェルサイユ條約ではドイツの賠償金を出す原則だけが決まつて、總金額が定まらなかつたが、一九二一年のロンドン會議で、總額千三百二十億金「マルク」を課することになつた。然るにドイツは支拂不可能を主張し、容易にその責務を行はなかつたので、フランスは強硬論を唱へて、ベルギーと共に、一九二三年ドイツ工業地帯のルール地方を占領した。ためにドイツの産業が衰へ、財界は不振となり紙幣は暴落し、物價は騰貴し、民衆が大いに困しんだ。そこで列強はこれが救済を計り、一九二四年ロンドン會議でドーズ案を採用し、五箇年間に對するドイツの支拂年額を決定し、その後はドイツの經濟狀況に應じ、支拂年額を増させることに定め、

ロカルノ條約

ヤング案

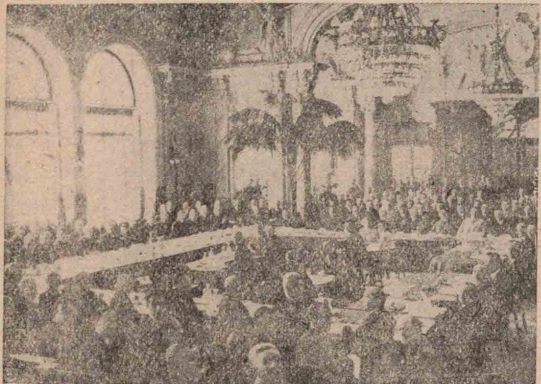
フランスも満足してルールから撤兵を行つた。その後ドイツの經濟的回復が段段進み、一九二五年のロカルノ列國會議でドイツの國際聯盟加入が認められ、列國國境の安全も保證され、次いで一九二九年にはヤング案の成立を見、向後、ドイツの支拂ふべき賠償總額を三百五十八億餘「マルク」と定め、これを一九二九年から約五十九箇年間に完済させることにし、ドイツの負擔が非常に輕められた。しかし、ドイツの經濟回復はなほ充分でなかつたので、一九三二年のローザンヌ會議は、將來支拂ふべき賠償總額を三十億「マルク」と定め、ヤング案の支拂殘額三百二十億餘「マルク」に比し、大なる輕減を得ることになつた。その翌年、ドイツ國粹社會黨のヒトラーが首相とな

The Young Plan

Locarno

ローザンヌ會議の光景  
一九三二年六月十六日、ローザンヌ、ボエリリヴァー、ジョーホテ  
ル(Hotel=Beau-Rivage)で開かる

ローザンヌ會議の成果



ナチス  
Hitler



ヒトラー首相の活躍

戦債問題

ドイツ共和国の成立

ストレーゼマン外相の国際協調主義  
國市民に圍まれた大統領ヒンデンブルグ  
第二回大統領、一九二五年就任、一九三二年再選(因に大統領の年限は七年)一九三四年任半ばにて歿す

つたが、彼の方針は賠償全額をも拒絶しかねまじき有様であつたので、フランスその他の不安は大なるものがあり、且つドイツ賠償金の減額は、米國に戦債を有する英・佛等諸國の支拂にも影響を與へ、國際經濟の前途に暗影を投じた。

●現代ドイツに於ける國粹主義

ドイツでは世界大戰の末、帝政が廢されて、聯邦共和政が出来、社會民主黨のイーベルトが第一回大統領に選ばれたが、その歿後、大戰當時の名將として遍く崇敬されて



ゐたヒンデンブルグ元帥が大統領になり、人民黨の領袖ストレーゼマンを擢んでて外相とし、國際協調主義を以て國家の難局に當り、賠償金問題等も比較的順調に進んだ。しかも一九三三年ヒトラーが中心となつて國粹社會主義の内閣をつくり、異民

\*この影響は一九三四年七月三十一日(即ち一九三五年三月一日)に正式にヒトラーに歸屬した。\*  
この影響は一九三四年七月三十一日(即ち一九三五年三月一日)に正式にヒトラーに歸屬した。\*

ヒトラーの大ドイツ主義

ヒンデンブルグ大統領歿す

ザール人民投票(一九三五年)

軍備制限條項廢棄

マジール民族の奮起

族排斥植民地回收陸海軍備平等を唱へ、國粹主義を以て、沈滞せる國民精神を鼓舞せんと圖り、更に總ゲルマン主義の精神を傳へ、オーストリアのドイツ的地方を併せて、大ドイツ國を造らうとした。さて一九三四年八月、ヒンデンブルグ大統領が病んで歿し、ヒトラーが後を承けて、人民宰相の名の下に、共和國の政務を統べ、獨裁政治と強硬なる外交を行ひ、一九三五年一月に行はれたザールの人民投票は、壓倒的多數を以てドイツ側の勝利に歸し、同年三月には、突如、ヴェルサイユ條約規定のドイツ軍備制限條項を廢棄し、翌年ラインランド再武装を宣し、歐米諸國を驚愕せしめた。

●ハンガリヤの國家主義

ハンガリヤは大戰の結果、奥匈二元國から離れ、マジール人の民族國家を造つた。然るにルーマニヤ、イタリヤ、チッコスロヴァキヤから周圍の土地を削られて、大戰前より領域が非常に狭くなつたので、祖國を愛するハンガリヤは、王政主義の攝



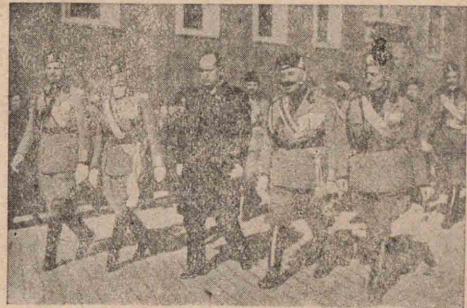
ラスーゴエ、日九月十(年九和昭)年四三九一、てり操を國客刺はヤリガンホに爲\*  
るゐてれば云とたせざ殺暗で(Marseille)ユイセルマ國佛をルドンサクレア帝皇ヤ、ヴ  
。ため認を立獨の廳王法、び結を約協と王法年九二九一\*\*

小協商の成立

一八八三年北イ  
タリヤの片田舎  
で生れた  
圖はムッソリー  
ニがファシスト  
黨を率ゐて街上  
を練るところ

現 ファシスト黨の出

ムッソリーニの活



政政府に統合され、共產主義を斥けて、戦前の勢力にひき返さうと努  
めた。その爲に大戦によつて生れたチッコスロ  
ヴァキヤ、ルーマニヤ、ユーゴスラヴィヤ(セルブ、クロ  
ア、トスロヴ、エヌ)の三箇國は所謂小協商を組織  
して一種の防禦同盟を造り、フランスの援助の下  
にホンガリヤに對抗を續けた。

④ **イタリアの國家主義** イタリアでは大戦後、  
社會主義者が暴威を振つたが、ムッソリーニが出て、  
國民社會主義を奉ずるファシスト黨を率ゐる國王よ  
り全權を受けて、極端な獨裁政治を布き、反國家主義者を押へ、法王と  
和し、同時に、社會政策に全力を注ぎ、國論を一にして外交上國權の發  
揚に努めた。即ち先には獨、埃、匈の三箇國と相結んでフランスの專  
横を押へ、次いで一九三六年エチオピアを攻略し、一九三九年アルバ  
ニアを併せ、獨伊軍事同盟を結んで英、佛等諸國と對峙した。

ニヤを併せ、獨伊軍事同盟を結んで英、佛等諸國と對峙した。

フランスの國權主  
義  
ポアンカレ内閣  
の功績

ケマルパシ

ケマルパシは  
もとのトルコ領  
サロニカに生  
れ、世界大戦に  
出征して功あ  
り、元帥の稱を  
授けらる  
トルコの縮小

⑤ **フランスの國權維持**

大戦後、フランスは強大な陸海軍を擁し  
て獨伊兩國に當り、特にドイツの復興を抑へるに全力を致し、一九二  
三年にはルール地方を占領してドイツの不信に制裁を加へた。そ  
の後、財政著しく悲境に陥つたが、ポアンカレ内閣の下にこれを整  
理し、常に國際聯盟に頼つてヴェルサイユ條約の維持に努め、また小協  
商を指導し、英、伊兩國と相結んで、ドイツの復興を阻止しようとした。  
しかし後、漸くイタリヤとも對立した。

⑥ **トルコの國權主義**

トルコは大  
戦に敗れた結果従來の領土の三分の  
二以上を失ひ、人口も二千萬から、僅に  
八百萬足らずになつた。ここに國民  
黨のケマルパシがアンゴラから奮起



Kenal Pasha Angora

め望の伊月一(年十和昭)年五三九一、めたがんは買を心歡のヤリタイはスンラフ\*  
。たつ至にるす興讓を部一の(Sahara)ラハサ領佛



トルコ共和政の出現

し、一九二二年、民族主義の主張によつて、小アジアのギリシヤ軍を退け、喪失地の一部を回復して、ローザンヌ會議で認められた。ケマルはまた一九二二年に帝制を廢し、翌年共和政を布き、自ら大統領となつて獨裁權を行ふに至つた。

英國諸屬領の動搖

アイルランド自由國 (Irish Free State) の成立

七 英國版圖内の自治 英國は大戦前よりカナダ、オーストラリア、南アフリカ等諸植民地に自治を認めてゐたのであるが、大戦後に盛んとなつた民族自決主義の影響で、その他の諸屬領に動搖を來したから、ここに自治權認可の範圍を擴げることとなつた。即ち一九二二年、南アイルランドに内政の自治を許し、信仰の自由を認め、ただ軍事權の一部を本國に獲得した。エジプトではザグルル=パシヤが主となつて英國に種種なる要求を提示し、ここに英國は一九二二年單なる名義上の獨立を許し、外交立法に若干の自治を認めた。しかもインドではガンデー等の指導の下に烈しき抵抗を試みつつある。

兎に角、英國が大戦後、全世界にわたる自國領に對し、政治、經濟、軍事上、よくその統制を保つてゐるのは注意すべきである。

上シレシヤの人民投票

北シレスウイヒの人民投票

ユダヤ民族復興主義

八 上シレシヤ、北シレスウイヒ等の歸屬 ヴェルサイユ條約で人民投票により、所屬を決するやう定まつた上シレシヤは、ドイツ、ポーランド兩民族の居住するため、それぞれドイツ、ポーランドに歸屬せんと希ひ、投票の結果、大體希望通り、獨波兩國に分割された。北シレスウイヒも同様、ドイツ、デンマルク兩民族の混住するところであつたが、條約による人民投票の結果は、北半分をデンマルクに、南半分をドイツに歸屬させた。しかし國境制定に關して民族間に幾多の紛争を生じ、公平な國境決定は至難であつた。なほ十九世紀後半以降、分散せるユダヤ民族(ヘブラ)を集めて、パレスチナに一國家を起さうといふ論があり、大戦中からその運動が盛んとなつたが、實現は覺束ない。

九 イギリスに於ける民主的傾向 大戦後、財政困難や物價騰貴の



英國の労働黨内閣

圖 馬クドナルド  
一八六六年、ス  
コットランドの  
貧農の子に生  
れ、刻苦勵精し  
て遂に首相の地  
位を得た



ため、中産階級以下の困窮が甚だしく、労働運動や、社会運動が盛んとなり、これに乗じて傳來の民主主義が高調され、一九二四年にはマクドナルドの労働党内閣が出現した。その後、保守黨のチェンバレン内閣の時、獨伊兩國の復興目ざましきを恐れ、フランス、ポーランド等と結び、ロ

獨・伊包圍策

シヤと接近を圖つて、獨伊兩國の包圍を策した。

④ ロシヤソヴェト政府の發展 大戦中に出來たロシヤソヴェト

社會主義ソヴエト共和國聯邦

政府は次第にその勢力を展べ、一九二二年には全露の大小諸邦を合せて、Union of Socialist Soviet Republics—U.S.S.R.社會主義ソヴエト共和國聯邦を組織し、翌年憲法を出して明かにこれを規定し、共產主義を勵行して、これを世界に廣めようとした。

新經濟政策

しかしこの間、當初の共產主義に若干の資本主義が加味されて「新經濟政策」が出來、しかもレニンの死後、これが施行について當局者間の

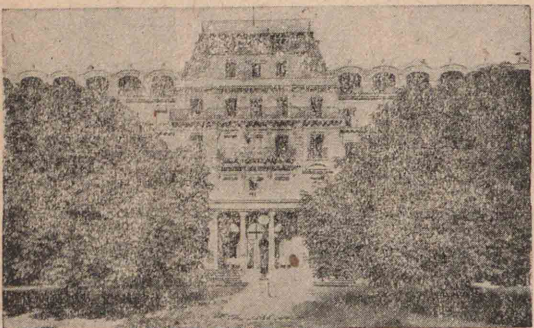
五箇年計畫

争を生じ、トロツキー一派が追はれてスターリンが全權を握り、所謂「五箇年計畫」を以て、農工をすすめ、教育を盛んにし、軍備を修め、更に歐

米諸國との交を復し、國際聯盟に加入し、他日の活動に備へた。

⑤ イスパニヤ革命 イスパニヤでは最近、アルフォンソ十三世が專

イスパニヤ、ブルボン王朝顛覆（一九三二年）  
フランコ政權の確立  
圖 ジュネーヴ國際聯盟本部  
この建物の背後はレマン湖であつて、湖畔の眺めは絶勝である



制政治を行つたが、遂に一九三一年、革命運動が起つて共和政府が出來た。しかし一九三六年、國家意識に目覺めたフランコ將軍は奮然たつて共和政府を倒し、銳意國力の恢復を圖つた。  
⑥ 國際聯盟の組織と發展 大戦當時、ウィルソンの提議により、世界平和の維持を目的として國際聯盟が生れ、參加國は世界の各方面に互つて五十有餘を算し、本部をスイスのジュネーヴに置き、一九一九年にはオトラント諸島關係のフ

國際聯盟の活動



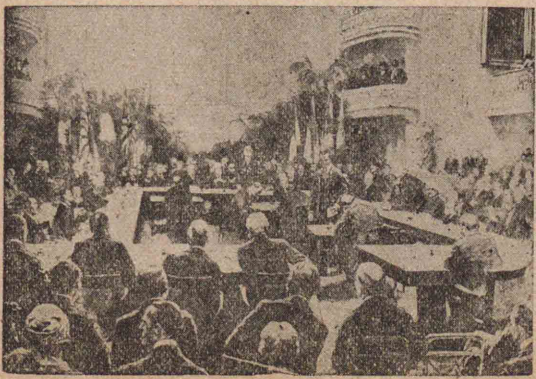
日・獨兩國の聯盟  
脱退

ンランド・スウェーデン間の紛議をまとめ、一九二一年には上シレシヤ關係の獨波兩國間の紛擾を解決した。その後、日支問題の紛争から日本の聯盟脱退となり、また軍縮問題の不滿からドイツの脱退をひき起し、更に最近には領域問題の紛糾フンキウから南米パラグアイの脱退となつたが、なほ且つロシアの聯盟加入を得てその勢力の恢復を計つた。(一九三五年二月)  
(一九三四年)

○國ワシントン軍備制限會議  
一九二一年十月十二日開會、一九二二年二月六日署名調印、同年八月十七日批准完了

ワシントン軍備制限會議  
(一九二一年)  
一九二二年

●軍備縮小會議と不戰條約 大戰後、平和論が頻りと唱へられ、一九二一年米國大統領ハーディングの主權により、日・英・米・佛・伊に支那を加へて、ワシントンに軍備制限會議を開き、その結果、日・英・米三國主力艦の噸數を三五五の比率に定め、更に日・英・米・佛の四國協約を結んで太平洋の平和を約し、日英同盟を廢棄し



Paraguay

九箇國條約

不戰條約

ロンドン會議

日本のワシントン條約廢棄  
(一九三四年)

た。また以上四國に伊・白・蘭・葡支五國を加へて、九箇國條約を結び、支那の領土保全等を決定した。一九二七年、第二回軍備制限會議がジュネーヴに開かれたが、失敗に終り、ここに米國がフランスと協定して不戰條約を提議し、日・英・伊・獨等列國の賛助を得、一九二八年、同條約がパリで調印を了へ、能ふ限り戰爭を中止することとなつた。やがて一九三〇年米大統領フーヴァーHooverと英首相マクドナルドの協議により、日・英・米・佛・伊五國のロンドン會議が開かれ、海軍の縮小を議して、特に日・英・米三國の巡洋艦、その他補助艦艇の比率を七・一〇・一〇と定め、やがて一九三四年、わが國は、ワシントン條約に規定する三五五の比率が、眞の軍縮方針に合一せざるを難し、該條約の規定に従ひ、その廢棄を關係諸國に通牒ツクテウし、翌翌年無條約時代に入つた。

第六章 現代の趨勢



民族自決主義

●最近に於ける時代思潮 世界大戦は獨り歐洲のみならず、世界各國に大變革を齎らした。即ち十九世紀以來唱へられてゐた民族主義は戰後愈々高調せられ、民族自決主義として、幾多の小民族國家を生じ、從つて國境線は著しく改變せられた。更に大戦に依つて民衆の力は大に伸張せられ、戰後、民主自由主義的傾向は急激に助長せられた。爲に英國に於ては労働黨の活動となり、普通選舉は世界各國に實施せられ、その勢の極まる所は社會主義の隆盛となり、またロシヤ共產主義の如き過激思想も現れて害毒を世界に流すに至つた。しかも英、米、佛等諸國は、戰後の現状を維持して自國の利を圖らんとし、自由平和の名の下に、大に國際協調主義を唱へた。大戦の慘害を見た各國もこれに賛し、通信交通の發達と相俟つて、益々各國間の和親をひき起し、國際聯盟、軍備縮小會議、各種の平和運動等が相次いで現れた。しかし戰後の現状には幾多の不合理な點があり、爲に多くの

社會主義

國際協調主義

獨裁主義

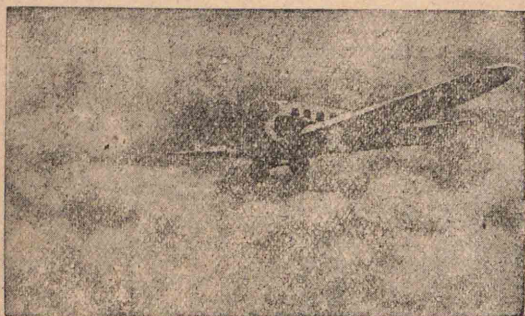
國家に満足を與へることが出來ず、加ふるに國力の疲弊、財界の變動、思想界の動搖等に依つて、世界情勢は漸く不安となつて來た。ここに於て獨伊等諸國は、獨裁主義の政治を布いて、各種の改革を斷行し、強力な民族國家として、國權擁護と國力發展とを圖るに至つた。

科學文明と精神文化

●科學の隆盛と精神文化の高調 現代文化

の特色は科學の進歩とその應用にあり、特に電力、ガソリン、モーターの利用、航空機の發達等は驚異的なものがある。しかし科學文明の偏重は、社會生活の複雑化と共に、種々の弊害を招いた。かくて近來國家主義の發展に伴ひ、世界各國孰れも科學の振興と同時に、自國の精神文化を尊重し、更に他國のそれをも研究し、物質的精神的に健全な文化を形成せんとしてゐる。

●國際旅客用飛行機  
十九世紀の初め、英人ケール(Catlett)飛行機の原理を考へ出し、一九〇三年米人ライト(Wright)兄弟、飛行機での飛行に成功、次いで軍用・交通用各種の飛行機が作られるやうになつた





獨・波開戦

③ 歐洲大戦亂 最近に於ける歐洲の情勢を見るに、ドイツは新興の氣運に乗じて、大ドイツ國建設の歩を進め、一九三八年、オーストリアを併合し、翌一九三九年、チエコスロヴァキヤに勢力を伸ばした。次いでポーランドに對してダンチヒ等の還附を要求し、遂に同年九月同國と砲火を交へて、これを攻略し、ここに再び歐洲大戦亂が勃發した。現状維持を圖る英佛兩國は直にドイツに宣戦し、ロシヤは機に乗じて、ポーランド及びバルト海沿岸諸國に侵入した。一九四〇年、ドイツは北歐の要地を占領し、同年五月一轉してオランダ、ベルギーを席卷し、フランスを攻めたが、六月イタリヤはドイツに呼應して起ち、フランスは遂に屈服した。それよりドイツは頻にイギリス攻略の機を窺ひ、また一九四一年にはバルカン諸國に力を伸ばし、着々歐洲に新秩序を建設せんとしてゐる。しかし米國のイギリス援助は次第に強化せられ、ロシヤもドイツの勢力増大を好まず、六月、遂にド

フランスの屈服

イツと砲火を交へるに至つた。

### 第七章 西洋史上より觀たる我が國の使命と國民の覺悟

大戦後に於ける世界の趨勢は、一面、國際協調精神の盛になると共に、他方民族主義、國家主義が高まり、ややもすれば他國の發展を阻害して自國の興隆を圖らうとした。爲に平和の氣運の裡に、既に争亂の兆を藏し、遂に一九三九年再び歐洲大戦亂の勃發を見るに至つた。この間我が國の急激な發展、滿洲帝國との親交、及び昭和十二年(一九三七年)に起つた支那事變等に依つて、列國はいづれも東亞の動靜に注目し、或は我が東亞新秩序建設の使命を妨害しようとするものも少なくない。しかし我が國は毅然として其の使命達成に邁進し、更に昭和十五年(一九四〇年)には日獨伊三國同盟を締結して、世界新秩序の建設に寄與しようとしてゐる。

我が國の使命



日本文化の進展と  
外國文化

日本の歴史を西洋史に比較すれば、尊嚴なる國體の發露する所、獨自の展開をなした所以を明瞭に知ることが出来る。しかも日本文化の躍進を遂げた時代は、必ず外國との交渉の盛な時代であり、その時代は常に國民の自覺を喚起し、嚴然たる自主的態度によつて、彼を長を採り、以て新日本文化を建設するに努めたのである。ここに於て世界一體の今日、進んで日本精神、日本正義を世界精神、世界正義にまで高めることが崇高な我が國の使命であり、現代に於て最も緊要に感ぜられる所である。されば我が國民たるものは、今後の日本文化を正しく導くため、強固なる國民的自覺に基いて西洋史の發展を理解し、惹いては世界の新しい歴史を創造するやう覺悟しなければならぬ。

我が國民の覺悟

## 新編女子西洋史

終

### 上代史總說

上代史は太古より紀元第四世紀の末ゲルマニヤ民族大移動の初めまでを包括し、我が國では仁徳天皇

マケドニヤが勃興し、ギリシヤに於けるアテネスパ  
ルタテール等の爭覇に乗じ、悉くこれらを併合して  
意氣大いになり、アレクサンドル大王に至つては、  
東海を涉つてペルシヤの全土を略し、ここに老大な







中世史總說

中世史はゲルマニヤ民族の大移動より、第十五世紀後半期、東ローマ帝國滅亡前後に及び、わが國では仁徳天皇の御代から室町幕府時代に及び支那に於ては東晉の末から明の英宗頃に及んでゐる。先づローマ帝國は衰へ果てて往時の統制を保つことが出来ず、遂に東西に分裂し、その中西帝國はゲルマニヤ民族の侵入にたへ得ずして先づ滅亡し、そしてローマの故地を占有せるゲルマニヤ人はローマの文化とキリスト教の感化を受けて、主要なる歐洲列國の基礎を築いた。この時に當つてサラセン人はマホメット教を奉じてアジアの西南隅に興起し、東西兩

面からヨーロッパを脅かし、北歐よりするノルマン人も、至るところに侵略を試みた。随つて不安動搖の氣が全歐に漲り、これが動搖を救ふべき現實の要求から、封建制度が發達し、不安の氣を一掃する必要から、愈々キリスト教の聲價をたかめ、ここに法王は神聖ローマ皇帝の帝冠をすら授けるに至つた。やがて西歐諸國民の宗教的熱情と、尙武的精神が迸發して十字軍の壯擧となつたが、その失敗に了るや、法王權は俄然として衰へ、キリスト教の勢力も衰へ、封建制も衰頽して、中央集權の風盛んに、國家精神は益々活躍し來つた。尙ほ十字軍に伴うて東西の通商盛んとなり、ひいて自由都市の勃興を促すに至つた。

大事年表 二、中世史

年	代		事	蹟
	日本	支那		
九	雄略	宋文帝	四三 カタラウヌムの戰	白河
八	仁賢	齊廢帝	四二 西ローマ帝國の滅亡	堀河
七	顯宗	梁武帝	四一 フランク王國の建設	同
六	安閑	同	四〇 東ゴート國王の建設	同
五	欽明	陳敬帝	三九 ユスチニヤヌス帝の即位	同
四	同	同	三八 (六五)	同
三	同	同	三七 ユスチニヤヌス帝の即位	同
二	同	同	三六 ユスチニヤヌス帝の即位	同
一	同	同	三五 ユスチニヤヌス帝の即位	同
十	後冷泉	英宗	一〇六 ノルマンチー、イングラ	同
九	醍醐	宋太祖	一〇五 セルジックリトルコの建	同
八	同	宋太宗	一〇四 ノルマンチー、イングラ	同
七	同	宋真宗	一〇三 ノルマンチー、イングラ	同
六	同	宋仁宗	一〇二 ノルマンチー、イングラ	同
五	同	宋英宗	一〇一 ノルマンチー、イングラ	同
四	同	宋神宗	一〇〇 ノルマンチー、イングラ	同
三	同	宋哲宗	九九 ノルマンチー、イングラ	同
二	同	宋徽宗	九八 ノルマンチー、イングラ	同
一	同	宋欽宗	九七 ノルマンチー、イングラ	同
十	後醍醐	順宗	一三七 百年戰役起る(一四三)	同
九	同	同	一三六 オスマンリトルコの建國	同
八	同	同	一三五 イングランド國會開始	同
七	同	同	一三四 リーグニツの戰。ハンザ	同
六	同	同	一三三 大憲章發布	同
五	同	同	一三二 第二十字軍出發(一二四)	同
四	同	同	一三一 イエルサレム王國滅亡	同
三	同	同	一三〇 第二十字軍出發(一二四)	同
二	同	同	一二九 カノッサの屈辱	同
一	同	同	一二八 第一十字軍出發(一〇九)	同
十	同	同	一二七 第一十字軍出發(一〇九)	同
九	同	同	一二六 第一十字軍出發(一〇九)	同
八	同	同	一二五 第一十字軍出發(一〇九)	同
七	同	同	一二四 第一十字軍出發(一〇九)	同
六	同	同	一二三 第一十字軍出發(一〇九)	同
五	同	同	一二二 第一十字軍出發(一〇九)	同
四	同	同	一二一 第一十字軍出發(一〇九)	同
三	同	同	一二〇 第一十字軍出發(一〇九)	同
二	同	同	一一九 第一十字軍出發(一〇九)	同
一	同	同	一一八 第一十字軍出發(一〇九)	同

(時對年表)







最近世史總說

最近世史は一七八九年のフランス大革命勃發に始まつて、一八七八年のベルリン公會に至る八十九年間を包容し、わが光格天皇の寛政元年に始まつて、明治天皇の明治十一年に及び、支那では清高宗、乾隆五十四年より清德宗、光緒四年に至つてゐる。  
この期の初めに起つたフランス大革命は歴代の弊政、社會制度の不健全、財政の紊亂、啓蒙文學の影響、ルイ十六世の失政等、諸種の原因が相俵り相俵つて、未曾有の大變革を促すに至つたものの、しかもその極共和政治が布かれて、自由平等の思想は極端に走り、社會の秩序は全然破壊されようとした。かかる時代に現はれたナポレオン一世は武斷的帝政を以て國內の秩序を恢復し、更に全歐諸國を討伐して、これをフランスの勢力にもち來たし、フランスを中心とする世界大帝國を造つて、これに自由平等を加味せる善政を行はうとした。然るにナポレオンの武力に壓倒された歐洲諸國の民族的敵愾心は大いに起り、將た民族的自由精神は勃然として湧起し、その局

ナポレオンをして一敗地に塗みれて起たず、遂にセント・ヘレナの孤島に窮死せしめるに至つた。さて亂後の整理のために開かれたウィーン公會は、如上、民族主義や自由主義を顧みず、只管革命前の状態に復歸せしめんと計り、彼の神聖同盟の如きも依然これら兩主義を彈壓して顧みるところがなかつた。ここに於てこれが反動主義に對する自由主義民族主義の對抗は、猛烈と現はれ、その爲、ギリシヤはトルコより獨立し、ベルギーはネーデルランドから離れ、ポランドはロシアの束縛を脱せんとして、屢騷擾を起し、更にイタリヤ、ドイツの如き完全なる統一を樹立するに至つた。かくて成立せる歐洲諸國は或は同盟によつて、或は協商によつて、武裝的平和を維持するに努めたが、バルカンに於けるトルコの弊政はややもすれば列強間の攻争をひき起し、その局ベルリン公會によつて暫定的の平和を維持することが出來た。この間、アメリカ合衆國も南北戦役後、モンロー主義を變じて、帝國主義をとり、着々實力を充實して、世界の競争場裡に進出せんとするに至つた。

大事年表 四、最近世史

年	代	事	蹟	年	代	事	蹟
光格	日本	フランス大革命起る	齊將軍宣下	仁孝	日本	ギリシヤ獨立完成	松平定信・近藤重藏卒
高宗	支那	フランス共和政	二年前、徳川家	清宣宗	支那	七月革命	
宗		第一回對佛大同盟(一七九二)	尊號事件	宣宗		ベルギー獨立	
	十	第二回對佛大同盟(一七九五)	近藤重藏、擇捉	宣宗	九	イギリス選舉法改正	頼山陽歿
		第三回ポロランド分割	伊能忠敏、蝦夷	宣宗		イギリス女王ウァクタトリア即位(一八一七)	大國平八郎亂
		ナポレオン、イタリヤ征伐	露使レサノフ日	宣宗		イギリスとフランスの和議(一八一七)	徳川家慶將軍
		ナポレオン、エジプト遠征	本交易	宣宗		イタリヤ統一戦役(一八一七)	二年前、清國、長髮賊亂
		ナポレオン、オーストリア遠征	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	一年前、ベルリ
		リネヴェール和議	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	徳川家定將軍
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	江戸大地震、藤田東湖歿
		第三回對佛大同盟(一八一七)	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	著書取調所設置
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	安政大獄
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	愛媛條約
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	神奈川、長崎、函
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	館開港、佛國榮
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	和宮降嫁
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	前年、北京條約
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	生麥事件
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	佛國越南侵略
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	長州征伐
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	長髮賊平定
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	徳川慶喜將軍
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	一年前、慶喜大
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	政奉還
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	版籍奉還
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	廢藩置縣
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	神風連亂
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	西南役勃發
		ナポレオン、フランス皇帝	露使レサノフ日	宣宗		イタリヤとプロシヤ首相ピスマルクの和議(一八一七)	

(時野谷年表)



現代史總說

現代史は一八七八年のベルリン公會から現今に至るまで約五十有餘年を含み、わが明治天皇の明治十年より現今に互つてゐる。第十九世紀後半期以降、列強何れも帝國主義の潮流に駕して、通商植民の業に熱中し、アジアにアフリカに力を競ひ、彼のアメリカ合衆國の如きもモンロー主義の國是を捨てて、帝國主義に赴くに至つた。この間、歐洲大陸に於ては、獨逸の三國同盟に對し、英露佛の三國協約が對立し、これが均勢を以て僅かに平和を維持するところがあつた。既にして晩近に於けるドイツの異常なる發展と活躍とが、漸く列強の均衡を破らんとするものがあり、偶、バルカンの一角に起れる總スラヴ主義對總ゲルマン主義の争を契機として、世界大戰の大

活劇を生むに至つた。さて大戰後に於ける世界の狀勢は俄然として一變し、大戰當時高唱された民族自決主義より生れた諸小國、さては從來の列國とも何れもその豫期するところに達せずして、不滿を懷き、加ふるに財界の變動、思想の動搖は列國をして大なる不安を懷かせ、ここに國體擁護と國力維持を目的とせる獨裁主義の流行を見るに至つた。しかも大戰に示された民衆力の偉大、大戰前後の民衆の窮狀は、忽ちにして民主自由の精神を高潮させ、その極まるどころ社會主義の隆盛を見、ロシア共產主義の如きをもひき起すに至つた。更に大戰の慘害は戰爭防止の必要を痛感させ、或は國際聯盟の成立となり、或は軍備縮小の會議となり、ひいて世界の現狀維持を圖らしめた。しかし獨逸等は盛な國家主義の精神によつて、國力を充實し、次第に英佛等との對立を深め、遂に今次の歐洲戰亂の勃發を見るに至つた。

大事年表 五、現代史

Table with columns for Year (年), Era (代), Event (事), and Achievement (蹟). It covers the period from the Meiji Restoration to the early 20th century, detailing major international events and domestic developments in Japan and China.



第十七世紀のヨーロッパ要圖 (ウェストファリア條約後の形勢)



第十七世紀に於ける各國植民地

地商通及び地民植のダンラオ  
 地商通及び地民植のドンラウイ  
 地商通及び地民植のドンラフ  
 地商通及び地民植のルガトルボ  
 地民植のチニパスイ  
 代年開種は又見發は字數内( )



一八二五年後のヨーロッパ要圖

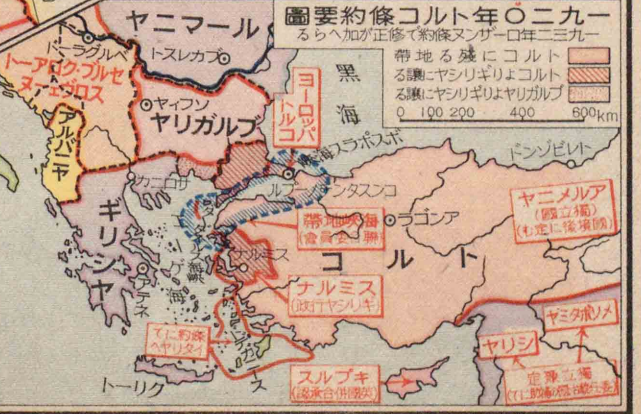
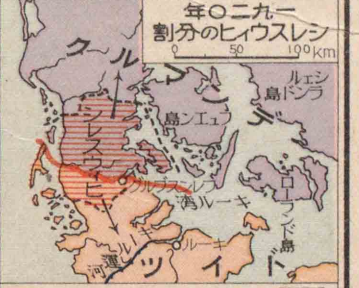




世界大戦後ヨーロッパ要圖



地理管際國 境界の前戦大  
帯地止禁備軍 境界の後戦大  
川河際國 國興新字赤





昭和十八年八月五日  
 昭和十六年六月十一日  
 昭和十四年六月十一日  
 昭和十二年六月十一日

新編女子西洋史	定價金九拾八錢
---------	---------

(略名) 三省時野谷女西史

著者

時野谷常三郎

發行者

東京都神田區岩本町三番地  
 中等學校教科書株式會社

印刷者

東京都蒲田區仲六郷一丁目五番地  
 株式會社 三省堂蒲田工場  
 代表者 岸本玄男

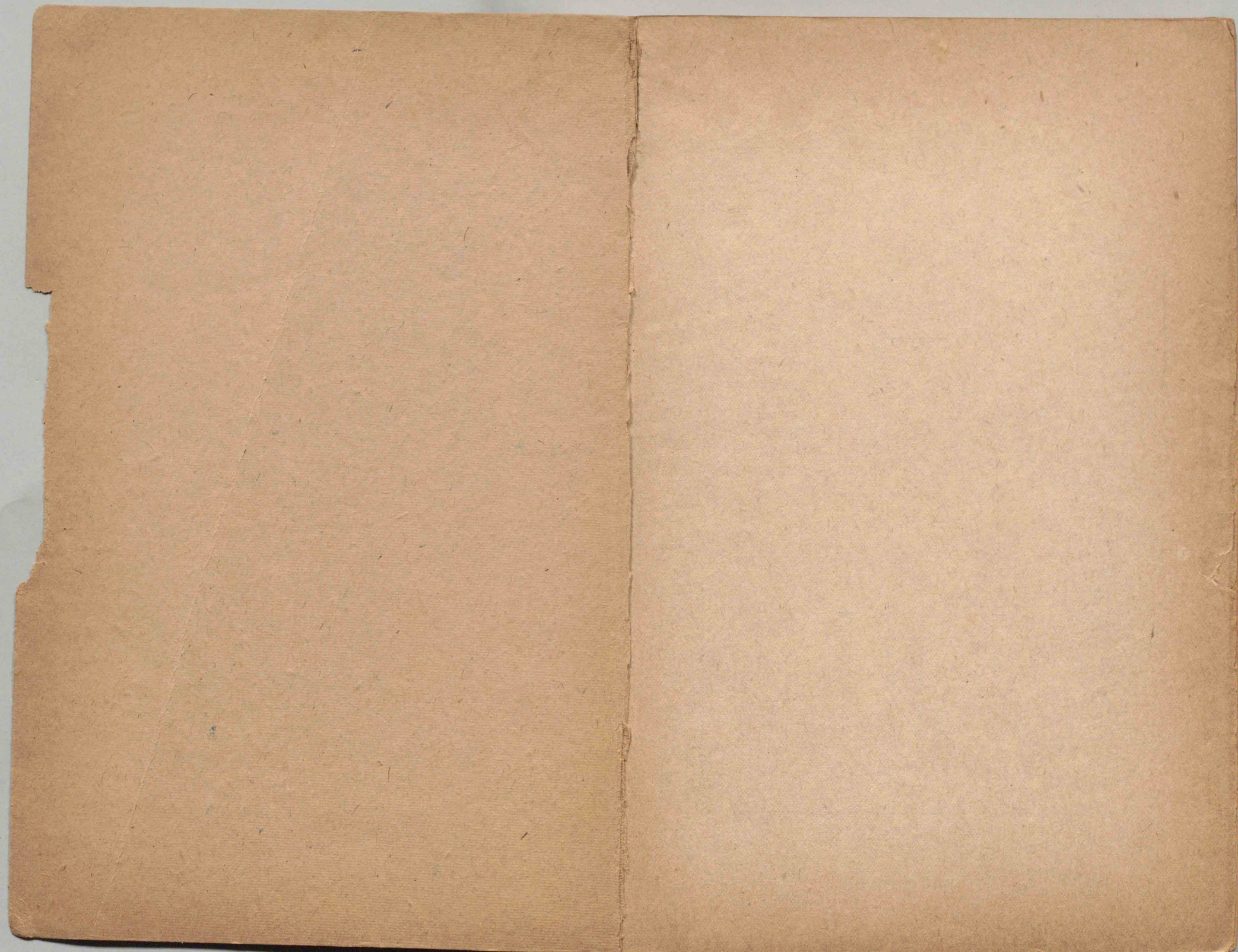


發行所

東京都神田區岩本町三番地  
 中等學校教科書株式會社  
 日本出版會會員番號 一一七五二二

配給元 日本出版配給株式會社  
 東京都神田區淡路町二ノ九







17  
三  
蘭  
天  
津  
豊  
子

広島大学図書

2000071224



庫  
3  
24